

K2A-34

Z32-B88

金の星

大正十五年八月十日第三種郵便認可 毎月一回一日発行
大正十五年八月九日印刷 大正十五年九月日發行

九月号



国立国会
9. 3. 26
図書館

第八卷 第九號

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



オハナ

巖谷小波関・鹿島鳴秋 著
橋本 邦助・太田 三郎
杉浦 非水 岡野 榮

童話も
昔のこと
今のこともある
面白くて
為めになる
オハナシ
四六倍原裝全五冊
紙裝各冊八十餘頁
定價各 壹 圓
送料各 八 錢

日本一の噺

巖谷小波 著
岡野 榮・小林 健吉
杉浦 非水

繪が一頁に
お噺が一頁
繪が踊れば
お噺も踊り出す
これこそ本統の
日本一の噺
袖珍版裝全二十五冊
紙裝各冊三十餘頁
定價各 貳 拾 五 錢
送料各 金 四 錢

オトウキタ

巖谷小波 著
太田 三郎・岡野 榮
鈴木 靜岐

歌と繪と
次々に續いてゆく
印象の濃い本
牛若丸は？
吾切花は？
運動會の賞品は！
四六倍原裝全三冊
紙裝各冊三十餘頁
定價各 八 拾 錢
送料各 六 錢

東京日本橋通
丸善株式會社

横濱
仙臺
札幌

大
阪
神
戶
京
都
名
古屋

東京—神戶—田三—丸



世界少年少女偉人傳大系 (5) 三島霜川先生著・装幀・挿書・水島爾保布書伯

太閤秀吉

日本の英雄で最も人氣のあるのは豊臣秀吉です。また日本の英雄として世界に誇れるのはこの秀吉に及ぶ者はありません。實際秀吉は偉い人です。しかし、その秀吉の偉い一生が「太閤記」などといふ嘘の多い本によつて世の中に傳へられてゐるのは残念なことです。い加減な作り話で傳へてゐるために、秀吉の本當の偉さが知られてゐません。秀吉の本當の傳記は、人一倍の涙と苦しみで充ちたもので、成程これこそ、秀吉は偉い」と感心せずにはゐられないものです。

三島霜川先生の「太閤秀吉」は秀吉を傳へるものとして、恐らくこれ程立派な本はありません。秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて書き現したのでありますから、これ程完全な、そして又讀んで面白い「太閤秀吉傳」はない筈です。

本書一冊は、是非皆さんの愛讀書として備へられるべきものです。御愛讀下さい。

町坂勳郷本京東
社星の金
番六九五五京東替振

四六判箱入頗美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外八枚
定價金九拾錢
送料六錢

世界少年少女偉人傳大系 (7) 津谷孝吉先生著 装幀・挿書 岩岡こも枝女史

ワシントン

アメリカを獨立させて今日のやうな大國にしたその建國の偉人ジョージ・ワシントンの傳記が、遂に一冊となつて現れました。

ワシントンが少年時代櫻の樹を伐つて嘘をつかなかつた話は、誰も知つてゐますが、そのワシントンが少年時代から艱難辛苦して、遂にアメリカ最初の大統領になるまでの變化極りない人生に就ては餘り紹介されてゐません。

アメリカ全土に自由の旗風をひるがへした偉人ワシントンとはそも／＼如何なる人であつたか。先づ本書の第一頁を讀み出した方は、恐らく最後の頁を終るまで本を措くことが出來ないでせう。そして、全アメリカの喜びを傳へる自由の鐘の響きは、永へに偉人ワシントンの傳記と共に、皆さんの心の底に、深く／＼ひそまれて残るでせう。

是非御愛讀下さい。少年少女のために書かれたワシントン傳は本書が最初であります。

町坂勳郷本京東
社星の金
番六九五五京東替振

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

童話讀本 (3) 沖野岩三郎著 裝幀・挿畫・寺内萬治郎

笛吹川

大統領様
びんばふ
多岐川
黒川
身代り
守り
頭
笛
歸
つて
來
た
興
志
喜

沖野先生の童話讀本は、そこらの有りふれた編纂ものでは
ありません。また、外國讀本の翻譯や焼直しでもありません
各篇とも、そのまゝ日本の少年少女が讀んで意味となるやう
な、傳い教訓と崇高な藝術とを持つた著者の創作です。
従つて、模範的課外讀本として、この童話讀本を用ひてあ
る學校は數知れずあります。こゝに、第三編「笛吹川」を加
へましたから、いよ／＼大評判となりませう。御愛讀を待つ

東京本郷町
金星社
東京替振五九六番

四六判箱入美本
内容一八〇頁
挿畫三色版外十一
定價金壹圓
送料六錢

永橋卓介編 ◇ 高坂元三裝幀

世界名篇物語 叢書第八編 ミゼラブル (噫無情)

ミゼラブルは世界的文豪、ヴィクトル・ユーゴーが一代の傑作です。或時は獄中に鞭打たれ、又或時は花の横な少女コゼットを救ひ又名譽ある市長の位にあるかと思へば、惡魔の横な、探偵ジャブエルの眼に追はれる。呪はれた運命のもとにさすらひ歩くジャンバルジャンの一生のことくが如何に劇的でありませうか、その數奇の極みとも云ふ可きジャンバルジャンの運命に、一度讀み出したら必ず同情の涙と深い興味を、紙上に注がすには居られないでせう。

四六判箱入美本
本文一九二頁
挿畫三色版外十枚
定價金九十錢
送料十二錢

第七編	太閤記物語	第九編	太平記物語
第一編	赤穂義士物語	第四編	水滸傳物語
第二編	八犬傳物語	第五編	膝栗毛物語
第三編	クオ・ヴァデス	第六編	三國志物語

東京市外集鴨上駒込二八
金蘭社
振替東京六一七〇番

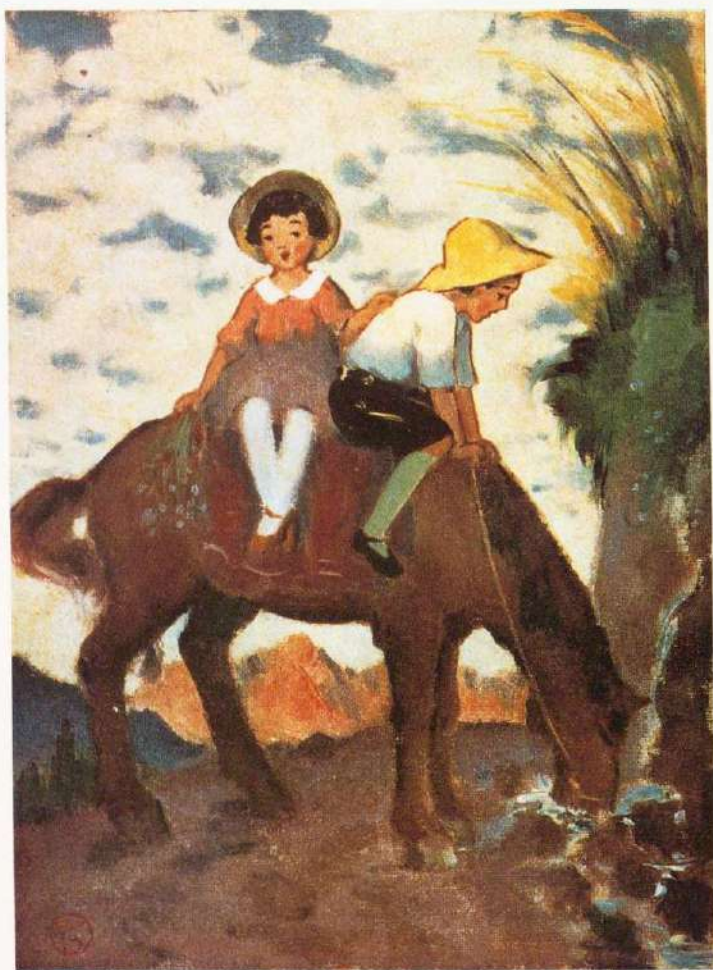


らを やさん(子供篇)	柿の木の 上の山伏	生理に された話	不思議な フラスコ	不	ド	辨慶の 少年時代	飴賣り 爺さん	乾	鈴	川中島の 合戦	同作	竹藪 小曲	岩戴	夏も 終れ
草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)
野口雨情選	西川 勉	久米 絃一	鳴海 要吉	野口雨情選	菅原松二郎	泉 豊春	大戸喜一郎	杜仙之介	湊 一訓	三島 霜川	本居 長世	野口雨情	寺内萬治郎	岡本 歸一



河童 月角力	叔父の 軍刀	朱の 盤坊の話	狸が本當に 化した話	アーペンチーレン、タアレナー	バルコニー 夜話	フランタースの 少年	怪 犬 慧星	愛 犬 物語	通	茫々 草	深山の 怪異	引越した 蜘蛛
角力	軍刀	盤坊の話	化した話	タアレナー	夜話	少年	慧星	物語	信	草	怪異	蜘蛛
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)
久米 絃一	西川 喜平	海野 良子	水島爾保布	齋藤佐次郎	寺内萬治郎	三宅 房子	三井 信衛	小島政二郎	齊藤佐次郎選	達崎 龍	小山 勝清	窪田 重次





岩清水

(金の星雲)

寺内萬治郎畫

世界少年少女偉人傳大系 (5) 入交總一郎先生著・裝幀・挿畫・岩岡こも枝女史

ナイチンゲール

ナイチンゲール嬢のお話は、皆さん教科書で学習になつたので、彼の女が女神のやうな氣高い心を持つた人で、クリミア戦争へ遙々と出かけて行つて傷病兵を看護し、はじめて赤十字の仕事をしたといふ事は御存知でせう。

本書はこのナイチンゲール嬢の一生を精しく書いたもので得難い著述であります。少年少女のための本として出版されたのは、恐らく本書がはじめてであります。

涙ぐましい程優しい心を持つた少女時代のナイチンゲールのお話は、全部集められてあります。尙、成人して、死を賭してクリミアで働く勇壯な場面や、その他餘り世間に知られてゐない隠れたる立派な事蹟は、本書によつて全部知ることが出来ます。

あゝ、ナイチンゲール！ この世の人とは思はれない程に尊い彼の女の傳記を読む時、誰か襟を正さぬ者がありませうか。本書こそ、課外讀物として最上のものであります。

東京 本郷 勤坂 町
金の星社
振替 東京 五九五 九六番

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

世界少年少女偉人傳大系 (4) 久米絃一先生著・裝幀・挿畫・鈴木保徳畫伯

リンコルン

リンコルンは、ケンタッキー州の土百姓の家に生まれました。リンコルンはどうかして勉強して、豪い人になりたいと思ひましたが、家が貧乏なので、紙一枚買ふ事が出来ません。又お父さんも、リンコルンが勉強するのを厭がつて「百姓の子供に本などは要らない。鼻へ行つて働け。」と云つて叱りつけました。リンコルンは、書間は一生懸命になつて、お父さんの手傳をしました。そして夜、皆なが寝静まつてから、蠟燭の光りをたよりに、一心になつて本を読みました。かうしてリンコルンは、遂に大統領となる事が出来ました。又、大統領となつてからの働きも目覺しいものです。四ヶ年に亘る南北戦争を鎮定し、南部四百萬の奴隷に自由を與へ、遂に反對黨の爲に、劇場に於て暗殺されました。併し、この本には、其等の大事業よりも、むしろ、リンコルンの日常の生活に重きを於て、リンコルンとは一體、どんな人出であつたか? と云ふ事を、誰方にも分るようにな、面白く書いてあります。この偉人の言行は、必ずや皆さんの胸に、大いなる炬火を投ずる事でせう。

東京本郷動坂町
金星社
振替東京五九六番

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外八枚
定價金九拾錢
送料六錢

世界少年少女名著大系 (25) 三島霜川先生著・裝幀・寺内萬治郎畫伯

爲朝一代記

金の星誌上でヤンヤといふ大喝采を博した三島霜川先生の『爲朝物語』へ、尙後を書き足して此の長篇大傑作『爲朝一代記』が出来上りました。

少年諸君の憧憬の對照である爲朝です。また、英雄崇拜の雄々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスバライ魅力をもつ事でせう。

くだくしい廣告的文句は省きます。ただ本書一卷によつて、讀者の胸に日本に生れた大英雄爲朝の男々しい影を映せば足るのであります。

裝幀と挿畫は寺内萬治郎畫伯の苦心の作になりました。殊に表紙畫の船に向つて弓を射てゐる爲朝の雄姿は、讀まずして本書の内容を語つてゐます。

暑中休暇の讀物として『爲朝一代記』は最も適してゐます。是非御一讀下さい。

東京本郷動坂町
金星社
振替東京五九六番

四六判箱入頗美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

金 星 編 世 界 少 年 少 女 著 名 大 系

四 六 判 入 類 美 本 ・ 定 價 各 冊 金 十 九 銭 ・ 送 料 金 六 銭

第 一 編 第 二 編 第 三 編 第 四 編 第 五 編

ロビンソン漂流記

ナポレオン物語

ドン・キホーテ

コロンブス物語

大人國小人國めぐり
ガリバー旅行記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて来るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程深山に置かれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですからこの本を讀まない者は一生の不幸だとさへいはれてゐます。

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セントヘレナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語なわが易く面白く書いてあります。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

イスパニヤのある村にタイザノといふ男が、あつたが、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、瘦馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂におかれた死をとげるといふ痛快な物語です。

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心懺悔して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられませんが、その面白く物語ります。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

ガリバーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡る、滑稽と奇想な面白く物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすすめいたします。

金 星 編 世 界 少 年 少 女 著 名 大 系

四 六 判 入 類 美 本 ・ 定 價 各 冊 金 十 九 銭 ・ 送 料 金 六 銭

第 六 編 第 七 編 第 八 編 第 九 編 第 十 編

ロビン・フッド物語

アラビヤナイト

ギリシヤ神話
オデッセー物語

シエークスピア物語

グリム童話

『ロビン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白く物語ります。シャールワットの森に住んで正義のために戦つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで胸をなぞらせます。悪い知事や僧正や、王をやつつけて、最後に厄のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として珍れてゐる物語りです。昔アラビヤに悪い王があつて、毎日一人づつお姫を迎へては翌日に殺してしまふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤナイト』だといはれてゐます。

ギリシヤ詩聖ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『オデッセー物語』と共に有名な物語りです。トロイの戦争に幾度海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語りです。

有名なシェークスピアの芝居の中で、童話として面白いものばかり特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御意のま』『ベニスの商人』『がみ』『女訓』『眞夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

金社の星編 世界少年少女著名大系

六四判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

編一十第
入 繪

イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで随分澤山の書が出てゐる。しかし本書の如く一つの物語に一枚づゝの立派な挿入を入れて、お話しと聞かす面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたいと思ひます。

編二十第
神 日 本 話

古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありません。實際驚く程立派な面白い物語です。日本の國がはじめて出来た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからつと米になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

編三十第
子供キリスト傳

新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエスキリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本です。この尊い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として、廣く世に紹介したいと思ひます。

編四十第

西遊記

支那から印度へ、はる／＼お経を取りに行つた玄奘三蔵の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々の魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない、世界的の名作です。この本を讀まない者も不幸です。

編五十第

ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロムルスとレマスの不思議な生立物語りからはじまつて、ハンニバルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現れて來て、息もつけぬ面白く物語です。

金社の星編 世界少年少女著名大系

六四判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

編六十第

聖書物語

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものはないと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム、イサクの繰えらび、鹽の柱になつたロトの妻、鹿の肉の好きなイサク、ヨセフの夢判斷、實に面白い物語です。

編七十第

奴隸トム物語

奴隸トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隸達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

編八十第

ギリシヤ英雄物語

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇はこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛兒のために著した名著を、土產にして書いたものだけに、最も理想的なものとして誇ることに出来るものです。

編九十第

アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならぬほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

編十二第

小公子

『小公子』の名は古くから知られてゐます。ほかには無い運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推薦されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き手の子に育てられたから、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず悲劇の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

金社の星編 世界少年少女著名大系

四六判入題本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

編一十二第 編二十二第 編三十二第 編四十二第 編五十二第

母を尋ねて三千里

不思議國めぐり

青い鳥

爲朝一代記

ハムレット

本書は伊太利文豪アマチスの世界的名作「クオレ」の中から最も面白い部分を選んで一冊としたものであります。三千里の道をはるんと母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乗り込んで自分の身を棄て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられない物語ばかりです。少年少女必読の書。

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がいました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原に行つて草をつんでゐるうちに「ひゅう」といつと眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの不思議な夢を見ました。覚えてからのち、アリスはお姉様にその話をしました。一體それは、どんな夢だつたでせうか？

メーテルリンクの傑作「青い鳥」の名を知らぬ者はありません。原作は劇になつてゐますが、本書はそれをお話風に書改めました。青い鳥の影を追つて夜の宮、未来の國と移り歩くメーテル、ミナル二人の姿は、ちやうど活動寫眞でも見るかのように、皆様の眼の前に浮ぶでせう。何人も一讀すべき名著であります。

鎮西八郎爲朝！この名を聞いて胸を躍らさぬ少年はありません。また、英雄崇拜の雄々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスバシイ魅力をもつてゐる。本書の表紙の裏、海に向つて弓を射てゐる爲朝の勇姿は、讀みすすめて本書の内容を語つてゐます。金の星社自慢の本として、お薦めします。

ハムレットは、世界第一の芝居の作者シェークスピアの傑作です。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる悲しき運命を描いたもので、ハムレットが如何に自分の父母を熱愛したが、又、可憐な花の如きオフェリヤ姫のはかない最後など、一讀、再讀、よ／＼熱涙を覚える名篇であります。

日本童謡作曲界を代表する大好评

金の星童謡曲譜集

一輯二各金六錢・三輯以下八金拾錢・送料金六錢

第一輯 人 買 船	第二輯 一つお星さん	第三輯 青い空	第四輯 赤い靴	第五輯 夢ごり	第六輯 子守唄	第七輯 お人形さんの夢	第八輯 べんべん鳥	第九輯 あこの町	第十輯 名所めぐり	第十一輯 夢のお國
本居長世作曲・野口雨情作詞	本居長世作曲・野口雨情作詞	本居長世作曲・野口雨情作詞	本居長世作曲・野口雨情作詞	小松耕輔作曲・野口雨情作詞	本居長世作曲・野口雨情作詞	本居長世作曲・野口雨情作詞	小松耕輔作曲・達崎龍作詞	中山晋平作曲・野口雨情作詞	本居長世作曲・野口雨情作詞	藤井清水作曲・野口雨情作詞
(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)
人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん	一つお星さん、七つの子、鵲と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬	青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼鳥、雀の酒盛り、呼子鳥	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥持山、朝鮮船屋、眠り鶴の子	夢ごり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水波、雀の機織り	子守唄、鳩と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、葱坊主、藪の下道	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雄子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱	べん／＼鳥、雲のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蛸、さみだれ	あこの町、雀踊り、木の葉のお鈴、高野山、鼠の小母さん、證誠寺の狸囃	長柄の橋、柱ぐり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳輪、石山寺の飲の月	夢のお國、鬼が来い、赤い櫻んぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の歌

東京 本郷 町 坂 金 星 社 電話 小石川三五七八番 東京 五九五九番 振替

金の星童謠曲譜集

本居長世先生曲・野口雨情先生作謠

俵はごろく

菊定郵
判價送
木八料
版十六
表錢
紙錢

曲目
1 俵はごろく
2 歌の中
3 狐の提灯
4 つまらない
5 鳩さん茶買ひ
6 小石

『俵はごろく』は本居先生の作曲中でも『青い眼の人形』と同じ程度の高評を受けたものです。尙、その他の五曲も、何れも一粒選りの名曲揃ひで、童謠作曲家としての本居先生の名聲をいよゝ高めたものばかりです。装幀は例により金の星社自慢の木版五度刷の壮麗な美本であります。

(10) 名所めぐり

本居長世先生作曲
野口雨情先生作謠

(目曲)
長柄の橋、柱くゞり、阿
彌陀池、宮城野の萩、お
乳餅、石山寺の秋の月、

定價八十錢
送料六錢

(11) 夢のお國

藤井清水先生作曲
野口雨情先生作謠

(目曲)
夢のお國、兎が来い、赤
い橋、横の歌、砂の数、

定價八十錢
送料六錢

金の星

九月 號



(通巻第八拾貳號)

金の星社

電話 小石川三三八七番
振替 東京五九五六番

東京 本郷 町

竹 簾 小 簾

作曲 本居長世

作謠 野口雨情

mf p

たけやぶ こやぶ こやぶは
てのなる はうは こやぶの

mf p

く ら い こ や ぶ の な か の
こ み ち ゐ う ま が と ほ る

f

p mf

ま ひ ま ひ つ ぶ ろ お う ま が
ま ひ ま ひ つ ぶ ろ こ や ぶ は

p mf

f rit. p

と ほ る て の な る は う へ
く ら い て の な る は う へ

f rit. p

竹藪小藪

野口雨情

竹やぶ 小やぶ
小やぶは暗い

小やぶの中の

まひくつぶろ

お馬が通る

手の鳴る方へ



手の鳴る方は
小やぶの小みち

お馬が通る

まひくつぶろ

小やぶは暗い
手の鳴る方へ





川中島の台戦

三島 霜川

寺内萬治郎盡

六、三十六段車懸りの戦法

(鞭聲肅々、夜、河をわたる謙信の軍勢)

「馬の轡には、布を巻け、舌は縄で縛れ、兵は、木の枝を銜め、息を静め、聲を殺せ」

謙信は、嚴に、さういふ軍令を下しました。つまり、人にも、馬にも、音を立てさせぬ用心でした。つまり、西の山蔭に落ちて、時は正に亥の下刻、甲斐から信越の山々は、闇に吞まれて、夜色沈々。ただ虫の聲と、千曲の瀬の音のみが、かすかに聞える。謙信勢は、静に、陣營を引拂って、妻女山を下りかけました。後には、篝火だけが、あつちこつちに、夜寒の山風に煽られて淋しく燃残る。これは、陣拂を敵に氣づかれぬ爲に、わざと然うして置いたのです。

「鞭聲肅々、夜河を渉る、曉に見る千兵の大牙を擁するを」——これは、頼山陽が、この時のことを詠じた詩だと云ひますが、謙信勢八千の兵は、今、足音のみを、肅々と、地上に響かせて、雨の宮の渡しの上流、八代の渡しの方へ動いて行きました。そして、そこから、川中島へ渡りました。それは、雨の宮の渡しからでは、萬一、信玄勢が、襲つて来ようも知れぬといふ心配があつたからです。

謙信は、例によつて、采配の代りに、青竹を小脇にして、時々、北斗七星を仰いで、嘯き、やがて、放生月毛を流れに乘入れました。軍の殿、甘粕近江守は、「渡渉掩護」の任に當つて、信玄勢に備へました。

千曲には、川霧深く立ちこめてゐるのが、闇にも、それと解りました。

信玄の方では、もう一ツ時前に(二時間前)妻女

山の陣營が引拂はれてゐようとは、夢にも知りませんでした。それで、軍議の通り、子の刻を合圖に、まづ、一萬二千の正の兵——これは、地の理に精しい高坂彈正を先鋒として、飯富兵部、馬場民部、小山田備中、甘利左衛門、眞田一徳齋、相木市郎兵衛、蘆田上野、小山田彌三郎、小幡尾張の十將が、十隊になつて、海津の城を出る。そして、夜霧をわけて、徐ろに妻女山の背後の方に廻つて行きました。

それから、また二ツ時経つて午前二時になると、今度は信玄。これは、奇の兵八千をつれて押出し、自分は中央に、舍弟典厩信繁、飯富三郎兵衛、穴山伊豆、諸角豊後、内藤修理を前備にして、嫡男の義信、原隼人を左右に備へ、武田道遠軒、望月信吉、跡部大炊助、淺利式部、今福喜九郎を後備に、いはゆる魚鱗、十二段の陣立、廣瀬の渡しを越えて、犀川の一里ばかり東へ、八幡原といふところに陣を布いて、夜の明けのを待ちました。

曉近くなると、霧はますます濃になつて、川中島の天地は、さながら霧の海となる。

こちらは謙信、柿崎和泉の二千の兵を第一陣として、眞ツ先に刀八毘沙門の旗を翻し、第二陣には、謙信自ら大燕青の馬印を押立て、馬を進め、左には柴田因幡、本庄越前、右には山吉安蕃、北條安藝、そして、謙信のすぐ後ろには安田上總の第七陣——と、かう、軍の中堅を七陣に立て、別に、上田景國、古志秀景、宇左美定行等の隊は、北國街道に沿つて、大車輪をえがいて、段々の備、一陣戦へば、他の一陣は、敵の隙を衝き、一陣敗れば、他の一陣が代つて、敵に當るといふ陣法——

……車がかりの陣ぞなへ
……めぐる合圖の関の聲
……あはせるかひも嵐吹く
と、歌にある通りの陣備です。軍談ではこれを、

三十六段車がかりと云ひます。

かうして謙信は、龍が雲を巻き起さうとする勢、その後備には、甘粕近江守、これが、東福寺に陣を取つて、妻女山に廻つた信玄勢の出で来るのを待ち受けてました。さうして、直江山城は、小荷駄奉行として、づつと退つて、犀川の方へ進むで行きました。やがて、夜が明け、秋の日が、東の山に輝くと共に、霧が少しづつ薄れて行く。

七 山本勘助入道道鬼齋の話

山本勘助晴幸入道道鬼齋——いよく謙信勢が信玄の旗本へ突ツこむで行かうとする前に、ちよつと、勘助入道のお話ですが……

川中島合戦の話から、この凄惨入道——跋で、めツかちで、おまけに手の指が何本か無かつたといふ此の道鬼齋入道の物語を取除けて了ふと、お話が、だいふ淋しくなつて了ひます。しかし、どうも仕方

がありません。眞ツとの歴史の上で調べると、残念ながら道鬼齋入道は、この合戦記に名を出すほどのえらい人ではありません。

これが、軍談の方ですと、道鬼齋勘助入道は、信玄の大軍師として、廿六年間も、甲州軍の智慧袋になつてゐたのです。むろん四天十八將のうちでも、頭抜けた方の大英傑です。この川中島合戦の時も、その陣立は、一切、勘助がやつたのだが、それを、謙信に裏をかかれ、三十六段車がかりの陣法に引ツかゝつて、信玄の旗本までが危くなつた。そこで、軍師の責任として、悲惨な、しかし、壮烈な討死をした——と、かう云ふのです。

古い錦繪や繪本なども、この説によつて、道鬼齋入道が、坊主頭から血みどろになつて、引扯斷れた鎧には矢を負ひ、血みどろの槍にすがり、まるで修羅道から出て來た血の亡魂のやうになつて、片目で敵を睨みつけてゐるところが描いてあります。そし

て、その傍には、勘助の乗馬が、これも血だらけになつて、先きに死んでゐるところが描いてあるのもあります。

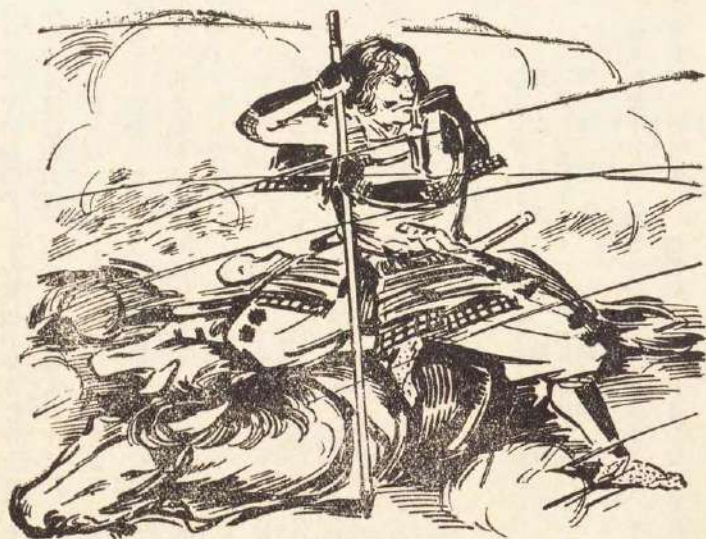
何にしろ、昔の子供たちは、恰と、童話のやうにして、『山本勘助、びつこで、めっかち』と、よく、やつてゐたものです。それほどに、誰でも、山本勘助のことを、えらい軍師だと思つてゐたのです。そして、大概の人が、謙信方の直江山城守と同格——或は、一枚上の大將だと思つて居りました。

ところが、直江山城守は、前にも云つた通り、甘粕近江が、直江山城かと云はれたほどの大將です。この川中島の合戦の時も、小荷駄奉行といふ大切な役を引受けて居ります。そして、後には、上杉の家老でこそあれ、廿五萬石の大名格になりました。そこで、勘助の正體はと云ひますと、信玄方の十八將の一人、山縣昌景（三郎兵衛）の配下。身分は、まづ、百貫（百石）取の雑兵頭位のところであつた

一〇
でしようか。侍には違なかつたのですが、せいせい十人か二十人の隊長で、もちろん、馬で、戦場へ乗出すやうな資格などはなかつたのです。この戦の時には、斥候の役をして、信玄の目に止つたと書いてある本もあります。ちよつと、小才のきいた人だつたらしいのです。それから、この九月十日の戦に、討死したことは、間違のないことです。現に、今、勘助の墓が柴村といふところにあります。これは、以前、八幡原の古戦場にあつたのを、後に柴村に移したのです。

しかし、こゝに一ツ、『いや、然うぢやない。おれは、眞正に軍師だつた』と、勘助が威張る材料もあるのです。信玄の菩提所、甲斐の鹽山、慧林寺に残つてゐる『甲軍十八將畫像』のうちに、立派に勘助の畫像があります。だから勘助は、たしかに、信玄の軍師だつたといふ人もあるのです。

だが、待つて下さい。たとへ、その『畫像』が残



つてゐるにしても、それで、すぐに、勘助を大軍師にして丁ふことも出来なければ、また、十八將のうちに加へることも出来ません。何故と云へば、『畫像』は、後からでも作らうとすれば作れるものです。つまり、その『畫像』についてゐる『記録』が確でない、うッかり、信じて了ふことが出来ないのです。勘助の『畫像』には、それを信するだけの記録がないのです。

すると、今度は、『そんなら、勘助はどうして、そんなに、えらく云はれるやうになつたのか』と、いふ疑が出て来ましよう。これは、お話が至つて簡短です。

勘助入道鬼齊に、一人の子がりました。この人が、お坊さんになつて、なか／＼學問もありました。いつも、信濃と甲斐との間を往つたり來たりして、あつちこつちで、信玄のことを書いた、いろいろの書類を集めました。そして、その書類を書きつ

ブツで、父の勸助のことを英傑のやうに作上げ、それを、海洋城の大將であつた高坂彈正が作つたことにして、世のなかへ出したのです。それをまた、軍學者の小幡勘兵衛が、『甲陽軍鑑』で、尾に端をつけて、山本勘助晴幸といふ不思議な大軍師を生み出してつたのです。

勸助のお話がつい長くなつてしまつた。しかし、お訓染の、びつて、めつち——川中島の合戦には、あの戦を據つて立つてゐるやうに云はれてゐる勸助は、斥候の雑兵にして片づけて了つたのです。それで、その理由へ、ハツキリさせる爲に、お話が、ちと、くどくなりました。

八 信玄、受けて立つ

其疾如風 其徐如林
侵掠如火 不動如山

信玄の旗下には、黒地へ金で、この孫子の語、十六字を、二行に書いた指物が立つてゐました。それ

に、日の丸に武田菱の大旗と。そして、この孫子の語、十六字こそ、名將信玄の心の刻印でした。

日が山の端を離れると、朝風に、旗や馬印が、ハタ／＼と心ちよい音を立てる。そして、霧が薄れ、銀のやうに光る薄の穂波が、さつと走ると、その彼方に、黒い影が、ばやけて、うね／＼と動いてゐました。林の影でない、丘のうねりでない。

『や、越後勢ぞ！』

信玄は、さつと顔色を変えました。そして、八幡原の陣といふ陣は、ザワ／＼と色めき立つ——まだ妻女山にゐるとのみ思つてゐた謙信勢が、さながら天兵が下つたやうに眼前に陣を取つてゐたのです。信玄方では、驚きました。

『斥候せい！』と、信玄は叫ぶ。

『妻女山に向つた正の兵は、まさにすかを喰つた。しまつた！』

と、思ひながらも、さすがに名將です。慌てもし

なければ、騒ぎもしない。すぐに斥候を放つて、謙信勢の様子を見させる。飯富、高坂等十將の方へは赤母衣の騎馬武者（使番）に馬を飛ばさせる。つゞいて、前備、協備の陣々へもその赤母衣が飛んで、『この戦、勝たうとは思ふな、只、敗けぬやうに忖へろ。よし、勝つても敵を追ふな』

と、觸れを廻しました。これが、信玄が、機に臨むで變化した此の戦の方略——いはゆる『待味方備』と名づけて、奇の兵を備へて、正の兵の來るのを待つ戦法であつたと傳へます。

やがて、備が少し立てなほつて、日の丸武田菱の大旗は、嫡男義信の陣に移されました。そこにはまた、信玄の軍神、南無諏訪南宮法性上下大明神の大旗も翻る——これは、信玄の本陣を晦ませよう爲でした。

旭は輝き、戦機は迫る。

謙信勢の第一陣、柿崎和泉は、旗を絞つて、前に

倒し、えい／＼、おう／＼と、信玄勢、飯富三郎兵衛——後ちの山縣三郎兵衛昌景の陣を目がけて突つかへり、凡そ一町ほど此方まで押寄せ、そこで、鐵砲隊に『折敷』の下知をしました。鐵砲隊は、四列になつて、バラ／＼と散開する。もちろん火繩銃、しかも、それが、鐵砲が種ヶ島に傳來してから、まだ十六七年ほどしか経たない時です。彈丸は、三々五々、五々、八々と、いろ／＼あつて、大概は鐵でした。この鐵の丸の凄じい鐵砲、これが、三百ほど四列になつて、まづ、第一列が、どつと火蓋を切る。銃口にバツと火が閃いて、ど、ど、どつと、向ふの竹把の楯にぶつかつて響く。わつと、関の聲があがつて、敵も味方も血が躍り、さつと戦氣が漲ります。煙硝の煙をくゞつて一列が退き、第二列が替つて、また、ど、ど、どつと、ぶち放す。飯富の陣の方でも、ど、どつと打出して、煙硝の煙で、双方の陣頭が暗くなる、それが、三四度繰り返されると、今

度は、どちらも、弓の隊から、矢つぎばやに矢を飛ばす、矢は、蝗のやうに飛びちがつて、忽ち胸頭を射ぬかれて、『あッ』と云つて倒れる者もあれば、手負(傷つて)になつて、後へ引退る者もありました。

と、見るうち、謙信は、今ぞ潮時と見て、

「突撃」

と、號令を下しました。謙信の陣から、黒母衣の騎馬武者が二騎づつ、三組四組、三方四方に別れてまっしぐらに陣々へ飛んで、それと號令を傳へました。

柿崎和泉の陣頭には、『みだれ龍』の旗が、さつと翻る。これは、上杉の「突貫」の旗と云つて突撃命令の旗です。

「そら、突ッ込め」

その時まで、弓の隊の後ろに、腕を鳴らしてゐた長柄の鎧隊の面々、我先きにと、鎧の穂先きを上

「鎧を傾けて、敵を見るな。旗は倒せ、えい、えい、進め、えい、えい」

と、謙信は、青竹を打振り、叫ぶ。

「おう、おう」

と、勇士も、兵も、大將にこたへ、和して、躍りすむ。鬼小島彌太郎、宇野左馬之助、長尾新九郎、小田切部、高梨播磨、同源二郎など、一騎當千の馬廻りは、馬の鼻先を駢べて、謙信を護つて進みま

九 亂軍——兩大將一騎打

謙信が進むと見て、左の柴田因幡、本庄越前、右の山吉玄蕃、安田上總、須田右衛門、五陣六陣、次ぎ／＼に競ひかゝる。信玄勢の方でも、嫡男義信、武田道遙軒、原隼人、望月信吉、跡部大炊の備まで、それ／＼に、旗をすゝめて、川中島は、今や震天動地の大修羅場となりました。しかし、信玄は、泰然

と突いて出ます。それと見て、飯富の陣、典厩信繁の陣——信玄勢の前備も、ゆら／＼と人垣が、うねりを打つたと見えますと、はやりにはやつた勇士が、一同に、どつと躍出す。そのうちには、『槍長刀』と云つて及渡り二尺五寸から三尺もあらうといふ、恐ろしい大薙刀を水車のやうに振廻して突進する者もありました。砂煙土煙が、パツと揚がる——兩方の隊から、火事の煙のやうに舞上がつた其れが、四十間、二十間、十間、五間と、双方から、だん／＼近づいて、やがて一とかたまりになると、互に「おッ」と喚いて、鎧と鎧とを突ッかけて、火花を散らします。

人と馬と、馬と人と、鎧と刀と、刀と鎧と——大將もない、雜兵もない、只、眞ッ黒になつて、入亂れる。

大薙刀の馬印を眞ッ先きに、大將自ら陣頭に馬を飛ばして、謙信の第二陣が動き出した。

として動きませんでした。

山吉、安田、謙信勢の一手は、斜に、典厩信繁の備に、這二無二に突いてかゝりました。信繁は信玄の弟、この年、三十七歳、副將軍として、軍の中に立つてゐました。卯の花絨の鎧に、金の鰐形の兜、武田重代、紺地に法華經を書いた母衣をかけ、逸物の三歳駒に跨がり、西東に駆廻つて、采配を振つて居りましたが、恰も其の時、味方の右翼、内藤昌景の陣が謙信勢の本庄越前のために突崩されました。そして、自分の陣も、山吉、安田に、ひた押しに押されて、半町程引きさがる。「すはこそ、事ぢや。この手が崩れては、信玄の旗本が危い」と、信繁は、決死の覺悟になりました。母衣をといて、鞍の前輪にく／＼りつけ、鎧の袖、草摺りをゆり合はせ、馬を陣頭に乗出しました。そして「かゝれ、引くな」と、味方を勵まし、崩れかゝる勢を盛返さうと燥つてゐますと、山吉隊の鐵砲組の一人、



『典厩だナ。よしッ……』と、亂馬のうちを窺ひよッて、ビタリと狙をつける……ゾドン、火蓋を切ッた。あはれ、信繁は胸を撃ちぬかれて、『あッ』と、馬から眞ッ逆さまに落ちました。ところを、雑兵が走り寄ッて首を掻落し、血の滴るゝやつを提げて、勇むで引返さうとすると、信玄方の勇士、山寺妙之助といふもの躍蒐ッて、たゞ一太刀に雑兵を斬伏せ、危くも首は取返しました。しかし、その陣は崩れて了ひました。

諸角豊後は、桶皮胴の鎧に、火炎頭の兜をかぶつた頑丈作り、甲州名代の驍將でした。内藤の陣が崩れ、信繁の陣の崩れたのを見ると、阿修羅王の如く怒ッて、長柄の槍をひッしこきながら、鎧を踏張り、栗毛の馬を煽りつけ



く、「小癪な越後の奴ばらよ。豊後が踏みつおしてくるぞ」と、一千の兵を引きつれて、鐵陣も突き破れど、横さまに、山吉、安田勢の眞つたど中へ突ッかけて行きました。「それ、撃ちすくめろ」と待ッてゐたといふやうに、山吉、安田の鐵砲組は、銃口を揃へて、ド、ド、ドツと、鐵丸を雨霞と打ちかけました。云甲斐なくも諸角勢は、さツと退く。豊後は、齒嚙をして仁王立に踏止ッてゐましたが、やがて二十人ばかりの郎等と、むらがる安田勢を目がけて、面もふらず突き進みました。見る／＼うちに、豊後等廿一人は、安田の兵に取圍まれる、郎等は、五人、八人と、バタ／＼枕をならべて討死して豊後の馬は傷つて倒れました。それでも豊後は退きません。徒走になつて、大童となり（髪を亂し）右に當り、左を突いて、槍の柄が眞ッ赤に染まるまで、縦横無盡に働きましたが、高松源五といふ者に左の脇を突かれて屈むところを、源五は透さずに躍

りかゝッて押倒して首を取ると、その時、そこへ、豊後の危いのを見て、取ッて返して来た石黒五郎兵衛と、三河浪人の成瀬吉右衛門、左右から源五を突き伏せ、首を奪ッて、引上げる。けれども、豊後の備も、それで崩れて了ひました。かうして、信玄勢は、三陣四陣と、だん／＼に崩されて、原隼人、武田道遠軒、跡部大炊、今福善九郎、淺利式部等の備は、謙信勢の柴田、上田、古志、宇佐美等に突き崩されて、廣瀬の渡しの方に追ひまゐりました。しかし、信玄は、まだ落ちついてゐました。その旗本の備と、穴山梅雪、嫡男義信の備と、柿崎和泉にぶつかつた飯富三郎兵衛の備とは、謙信勢の車懸りを、ウムと踏みこらへて、味方の死骸を飛越え、敵の手負を蹴散らして、もう一息で總崩れとならうとするところをこたへました。さうして、妻女山に向つた一萬二千の兵の出で来るを待ッてゐました。

この間に、初鹿源五郎や山本勘助なども討死する。美しい薄の穂波も、滅茶々に踏みしじられて、敵、味方の死骸と手負とが、あつちにもこつちにも横たはる、それを飛越え、跳越えて、大亂撃。喚く、叫ぶ、呻く、修羅道の大惡戦に、信玄勢の備は、ますます危くなつて来ました。時は正に辰の下一刻（午前、七時過）草といふ草は、血に染められて、朝風も腥い。

「これは、いけぬぞ」と、信玄は、そのまゝでは持切れぬと見て取ッて、つツと、胡床を離れて、備を變えようとした時でした。

太く、逞しい汗馬に跨ッて、蹄を宙に跳らせ、疾風の如く、信玄の旗下に飛込むで来た一騎の武者、紺糸織しの鎧に、萌黄緞子の胴肩衣、金の三十六筋打ッた星兜の上に立烏帽子、白の綾絹を行人裏みにして、顔は半分見えぬが、さながら猛虎の躍りかゝる勢でした。

「信玄は、何處に居るぞ」

と、叫びざま、スラリと引抜いた小豆粥長光の名刀、片手討ちに、信玄目がけて斬下ろす。

信玄は、危く身を躲して、『推參者、さがれッ』と、大喝。その聲の終らぬうちに、二の太刀の閃き、信玄は、太刀を抜く間もない。持ッた鐵軍扇で、發矢と受止めました。隙間もなく三の太刀、信玄は、肩先を斬られて、『あッ』と、いふ、その刹那……危いとも危いところへ駈けつた、信玄の足輕頭原大隅守、槍をのばして、馬上の大將目がけて突上げる。槍の穂先は流れて、馬の『三途』——首の下、前足、兩股の上を突く、馬は逆立ちに飛上がッて、星の流れるやうに、さツと彼方へ走去る。原大隅は、逃さじと後を追ふ。つゞいて、奈多源五郎、金丸平八郎等が、槍先きを揃へて、馬上の大將を追駆けました。

その時、謙信勢の後ろに當ッて、哄ツと、百雷の

とどろくやうな関の聲が上がりました。妻女山に向
つた一萬二千の信玄勢が、今、やつと、雨の宮渡の
下流の方を渡つて、川中島へ押出して來たのです。
この兵は、妻女山に向ふ途中、闇に路を迷つて、夜
が明けてから、妻女山に着いて見ると、そこはもう、
陣營、ひっそりとして、謙信勢の影もない。川中島
を見下ろせば、まだ霧れやらぬ千曲の川霧の彼方に、
旗、指物が入亂れて駈違ふのが手に取るやうに見え
ます。

『さてこそ、謙信めが、出しぬき居つた』

と、すぐに陣營を焼拂つて、高坂彈正、一の先き
になり、どつと山を駈下つて、揉みに揉むで、川中
島へ押寄せたのでした。

十 お互に勝鬬——互角の勝負

信玄の旗本へ、一騎駈けに斬込むだのは、云ふま
でもなく不識庵謙信でした。しかし、信玄の方では、

な太刀打となりました。が、義信の方の太刀が三四
寸短かった。それで、見る／＼うちに十一ヶ所の薄
瘻を負はされて、タジ／＼になつたところへ、義信
の馬廻りの武者が二十騎あまりも駈けつけて、謙信
をおつ取り巻く、謙信は、すばやく、馬を躍らせ、
一方の血路を切開いて、味方の陣へ歸りました。

一萬二千の大兵は、関の聲をあげると共に、ヒシ
ヒシと謙信勢に迫りました。崩れ、または崩れか
けた信玄勢も、急に勢を返して、日の丸に武田
菱旗は、ヒラ／＼と陣頭に翻り、高坂彈正、小
山田備中などを先手に、飯富兵部、馬場民部、甘利、
眞田、相木、蘆山、小幡、小山田彌三郎の十將は、
隊をつらねて、謙信勢に襲ひかかりました。『かう
なつては、もう駄目』と見て、謙信は、備々を繰引
きにして、おい／＼に犀川を渡つて、善光寺の方へ
退きました。

その時は、それと知りませんでした。

謙信は、新たに加はつた、敵の関の聲を聞くと、
『咄、厄介な奴が出て來おつた』と、思ひながらも、
放生月毛に煽りをくれて、追迫する原大隅等を駈抜
け、とつ、とつ、とつ、とつと、味方の方へ引返へ
して來ますと、そこに、武田太郎義信が、日の丸に
武田菱の旗を立て、敗兵を集めて居りました——
白と緋とのだんだらの鎧に、白星の兜、黒の馬に金
の馬鎧をかけて跨り、その年、廿四歳の若大將は、
見るから、きつびやかです。

謙信は、きつと見て、『それにあるは、太郎か、
典厩か』

と、呼はりざま、長光を振りかぶつて、馬を突つ
かけました。

『オ、太郎であるぞ』

と、義信も、血氣の大剛です。太刀を引抜き、手
綱をぐいと絞つて、馬を駈合はせ、互に馬上、壯烈

その時、甘粕近江は、一千五百の兵を、越後一流
の『龍の丸』に備へて、むらがる信玄勢を喰ひとめ
て、味方の退却を擁護しました。これは、甘粕近江、
川中島の退却と云つて、名高いお話です。恰と今の
午前十時頃のことでした。

信玄は、甘粕近江が、死物狂の『龍の丸』の備で
頑張つたのを見ると、『戦は、これまで。長追す
るな』と、戦を差止めました。十一ヶ所の手瘻を受
けた義信は、『近江めを蹴散らして、善光寺へ押寄
せましよう』と、云ひましたが、信玄は、聞入れま
せんでした。そして、二十二の備を、残らず八幡原
に集めて、凱歌をあげました。信玄の方には、四千
六百餘人の討死がありました。

謙信も、全軍を善光寺平に集めて、それから、オ
取山の麓に本陣を据え、そこで首實の式を行ひま
した。首實の式は、勝軍の式です。謙信の方には、
三千四百人の討死がありました。双方合はせて、八

千の戦兵に對して、三千四百と、四千六百との討死——それが僅に四時間ほどのことですから、實に、激しい戦でした。短時間に、こんなに戦死者率の多い戦は、日本は、もちろん、世界にも其の例が少いのです。

しかも、双方ともに、何んの獲るところがありませんでした。そして、兩方ともに、自分の方が勝ったことにして、勇ましく、越後と甲斐とに引揚げました。謙信は、功のあつた將士に、威狀を與へましたが、世にこれを、『血染の威狀』と、云つて、後々までも勇ましい話として残りました。『血染の威狀』——川中島の戦は、まったく血染の戦でした。凡そ、戦として、血染でない戦はありませんが、川中島の戦は、殊に、血染といふ、感が深いのです。

謙信の持つてゐた小豆長光の名刀は、二口あると云ひます。一口の方は、上杉家から、明治大帝に献上して、今、皇室の御物になつてゐると申します。この長光は弘治元年（二

二二）
鹿目の（戦）の戦に、謙信が、敵の鐵砲を切つたといふ傳
來のある名刀です。

この戦——つまり、一騎駆けで、信玄の軍鐵砲を切り、
その肩先を傷つけた一口は、これを小豆長光と云ひまし
て、現に、上杉家の家寶として名高いものです。

それから、その時、謙信のかぶつてゐた行人裏の白綾
綱上の方に松竹梅の模様があらまして、これは、今も、
上杉家に秘藏されて、毎年の蟲干には、必ず、當主自身
が手にかけられることになつてゐると申します。

次に、『越後軍記』や、その他の軍記によりますと、謙信
の方にも、信玄の方の山本勘助と等しく、えらい大軍師と
云はれてゐる宇佐美定行といふ人が居ります。この戦にも、
一將として、參加して居りますから、一方の大將であつた
ことは確です。しかし、これは、元禄年中、宇佐美定行
といふ人が、『甲陽軍鑑』の用たのを見て、定行をえらい
者に作り上げて、越後流の軍歌を唱へたのです。つまり、軍
師といひは、嘘です。

（をばり）

鈴 虫

（推薦）
湊

一 訓

りーん りん
鈴虫やお鈴を
振つて來た
お馬もあごから
ついて來た
りーん りん
鈴虫やお鈴を
ちよこやめた
お馬のお鈴を
さいてゐた



乾草

杜 仙之介

仔牛が 乾草

つんでつた

おせなへ 乾草

つんでつた

仔牛は 生れて

日があさい



仔牛の 足は

細かつた

仔牛は ゴンゴまで

はこぶのか

山ほご 乾草

つんでつた



寺内萬治郎畫

飴賣り爺さん

大戸 喜一郎

岡本 歸一 畫



あつい夏の日のことでした。

秩父山中を流れてゐる小さな谷川の土手に、一人の少年がすわつてをりました。頭の上には、こんもり茂つた大木が枝をかざしてゐて、いゝ工合に、影をつくつてくれてゐました。そばの草原の上には、さつと弟でせう。小さな男の子が、しづかに睡つてをります。

少年の名は美代次といつて、この村の貧しい家の子でした。學校からかへると、美代次はまい日弟をつれてこの土手に來ては、ひる寝をさせてゐるのでした。

ヒヨロヒヨロ、ヒヨヒヨ……

けふも、弟は流れのしづかな音にすかされて、ぐつすり睡つてをりました。美代次は、そのそばにすわりながら、岩にせかれて、泡を立てて流れて行く水を、眺めてゐました。

と、そのときでした。

木々にこだましながら、妙な笛の音が、ひびいて來ました。まだ一ともきいたことのない、さびしい、それでゐて、何となくをかしみのある節でした。

めつたに、人のはいつて來ない、山の中のさびしい村です。それにきゝなれない笛の主は、いつたい、どういふ人なのでせう。

美代次は、音のする方に、ちつと眼を向けて、またゝきもしないで見つめてゐました。すると笛の音は、次第に近づいて來ました。やがて土手の上を、一人のお爺さんが、天稗棒の兩はしに、箱をくくりつけたのをかついで、やつて來ました。頭には、小さな菅笠をかぶつて、兩手で笛をふいてゐます。

行くのでした。

『東京には、私の子供がゐる。ちやうどお前と同じ年くらゐの孫もゐる。』

お爺さんは、さう言ひました。

美代次が、まい日ゝ、何にも知らないで見つめてゐるこの川は、東京まで流れて行くのでした。

『東京には、天子様がおいでになるのだ。』

美代次は、お父さんから、かう聞いてゐました。

お父さんは、まだ子供のころ、たつた一と東京へ行

つたことがあつたのです。けれども、今お爺さんが話してくれたやうに、電車だの、自動車だの、高い／＼石でできたお家だののことは、話してくれませんでした。

「これが、東京で、一ばんいいところだ。」

お爺さんは飴の入つた箱の側を指して言ひました。そこには、きれいに彩色した名所の繪がはつてありました。六階も七階もある家の前を、電車だの、自動車だのが、たくさん／＼走つてをります。

「東京つて、ほんとにぎやかな所だね。」

美代次は、さう言ひました。そして、もしこんな賑やかな所に、住めるのだつたら、どんなに仕合せだらうと思ひました。

けれどもその時、

「お爺さんは、どうしてそんな賑やかな所にゐないのだらう。」といふ考へが、ふつ／＼かんで來ました。そして考へれば考へるほど、不思議に思へてなりま

せんでした。美代次は、この事を思ひきつて、きいてみたのです。すると、お爺さんは、ちつと美代次の顔を見つめてゐましたが、答へました。

「うむ、それはな、かういふわけだ。一ど旅に出た者は、家へ歸つて來ても、決してちつとしてゐる事はできないのだ。どんなに年をとつても、また旅へ出かける。そして旅で……だがな、こんな事は、お前がもつと大きくならなくては、分らない事だよ。」

お爺さんは、さう言つて立ち上がりました。

二

あくる日のことでした。美代次は學校からかへつて、いつものやうに弟をおぶつて、外に出ました。すると、また、あの笛の音がひびいて來ました。昨日と同じやうに悲しい寂しい笛の音でした。けれども昨日のよりは、もつと静かな、もつと寂しいものでした。

美代次は木蔭につつ立つて、静かに村中にひびきわたるその笛の音に、耳を傾けてゐました。するとお爺さんが、大せいの子供たちに取りまかれてやつて來ました。そして家が二三軒並んでゐる所まで來ると、木蔭に荷を下ろして、ちがつた歌を吹きはじめました。

いく人かの子供が、家から駆け出して來ました。大人の人も庭へ笛を聞きに出て來ました。美代次も、やつぱり、お爺さんの所へ行つたのです。

子供たちは、てんでに飴を持つて、お爺さんの水色の手甲をかけた手を見つめてゐました。新しく集つて來た子供たちは、ふた／＼び家へ引つ返して行つて、お金をもらつて來ました。そして、お爺さんの指さきから生れて來るいろ／＼の飴細工を、眼をぎら／＼して見つめてゐました。

まったくお爺さんの指さきは、不思議な力を持つてゐました。穴のあいた管のさきに、ちよんぶりつ

けた飴を、次第にふくらまして行つて、瓢箪だの、胡瓜だの、柿だのをこしらへるのです。けれども、一番美しいのは臺の上にさしてある、狐の振袖を着て踊つてゐる姿でした。それには美しく彩色さへしてありました。

美代次は、次々にこしらへられて、子供たちに手渡されて行く飴細工を、熱心に見つめてゐました。一つ、また一つ、いろ／＼の細工は次々に子供たちの手に渡されて、もうまはりにあつまつてゐる子供たちの手には、のこらず何かしらの形をした飴細工にぎられてゐました。

お爺さんは、まはりをぐるつと見まはしてさて、笛を取り上げようとした。がそのとき、お爺さんの、眼はパツタリ美代次の眼に會ひました。お爺さんは、美代次が何にも持つてゐないのを見ました。と、今までよりはすつとたくさん飴を取つて、管の上につけました。そして口にあててふくらましながら



三〇

ら、きれいな天狗の面をつくってくれました。

「さあ。」

お爺さんは、それに色を塗りをはると美代次の前
に出して、いひました。けれども美代次は手を出し
ていゝのか悪いのか分りませんでした。

「お爺さん、違ふよ。」

「美代公はお金なんて、持つてやしないよ。」

「貧乏人の子どもの。」

子供たちは、口々にさういひました。

「いゝや、私はお金を受け取つたよ。」

お爺さんは言ひました。この言葉は一層子供達の
心をそねました。

「嘘だ。美代公は出しやしねえ。」

「いや、貰つた。」

「そんなや、嘘の金だ！」

「盗人だ！」

この終りの言葉は、お爺さんを怒らしてしまひま

した。もちろん、美代次は、とうから涙をためてゐ
たのです。

「餓鬼めら、お前達に私の心が分るか。さあ、これ
を取つておおき。……私はお前らのやうな餓鬼等は
大嫌ひだ。さあ、これも上げる。」

狐が振袖を着たのを、美代次の弟の手にもたせ
ました。

「さあ、もうおしまひだ。こんな悪い餓鬼のある村
には、一刻もゐたくねえ。……お前は泣くな。泣か
ずに、また河へ行つて、弟を寝かせろ。な、いゝ
子だ。」

お爺さんはやさしく美代次にさう言ふと、もう笛
も吹かないで、さつさと荷物を擔いで行きました。

三

飴賣りのお爺さんが来なくなつてから、いく日も
くすぎました。そして夏のお休みが来ました。す

ると、美代次にとつて、大へんうれしい、思ひがけ
ない事が起りました。

美代次の家には、山がありました。その山には杉
の木が植つてゐて、三十年目に一どづつ切つて、筏
を組んで、東京へ賣りに行くのでした。その三十年
目が来たのです。

お父さんは、まい日山の木を切つては、川に落し
てゐました。そして今では長い／＼筏が幾つも出来
上りました。この筏を、お父さんと兄さんと、東京
を見物に行く前の小父さんとが流して行くのでし
た。そのとき、美代次もいつしよに行く事になつた
のです。

途中で、いく日かを泊つて、東京へ行く！

この考へは、美代次をどんなに喜ばしたことでせ
う。兄さんは、美代次が坐るために、筏の上に板を
しいてくれました。その上に坐りこんで、ちつとし
てゐたら東京へ行ける！

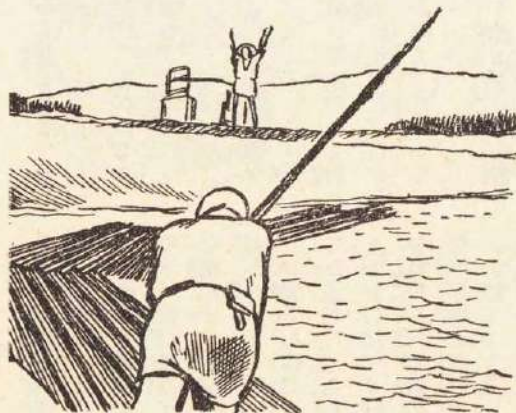
三一

その楽しい日、美代次は誰より一番早く起き上りました。そしてお母さんが支度をしてくれた新しい着物を着て、小さな草鞋をはいて、出かけました。やがて繋がれてゐた縄が解かれて、筏はそろりと流れ出しました。美代次はうれしくつて、飛び上りました。

「行つて来るよ、お母さん。」
美代次は大聲に、呼びました。

が、やがて筏は次第に早くなつて、まもなく、土手に立つてゐたお母さんの姿は見えなくなつてしまひました。

走る！ 走る！ 筏は氣持よく走つて行きます。それといつしよに、土手の景色は、どんどんかはつて行きます。板の上に坐つてゐた美代次は、たゞうれ



しくつて、一刻もちつとしてゐる事ができないで、坐つたり、立つたりして、何か見つめるたんびに、大聲を上げて、となりつゞけました。

筏は、いく時間も／＼流れて行きました。やがてお晝が来て、みんなは持つて来たお握りを食べました。

さうしてまた、川下へ、川下へ、筏を流して行きました。

生れてはじめて、川岸の小さな宿屋へとまつたとき、美代次はどんなにうれしかつたでせう。けれども、ある日のこと、もつと／＼嬉しい事が起りました。

ちやうど美代次が、筏から上がつて、お晝をたべてゐるときでした。あのいつかきいたこと

のあるチャルメラの音が、静かな川邊にひびいてきこえて來たのです。あのさびしい調子は、やつぱり同じでしたけれども、今日の美代次には、それさへもなつかしいものに聞えて來たのでした。

「お爺さんだよ。」
美代次は食べかけたお弁当を下においてさうとなりました。

まつたく、あの飴賣りの爺さんでした。お爺さんは、この前美代次の村へ來たときと同じ様子して、荷をかついで、笛をふいてやつて來たのです。

「爺さん！」
美代次は、駆け出しながら、さうとなりました。



すると笛の音は、ふつと止みました。

「東京へ、行くんだよ。」

美代次は、また言ひました。

お爺さんも、やつと美代次であることがわかった、

「お、いつかの子供だな、うむ、東京へ行くのか、うむ。」

さう言つて、近づいて、來ました。そして、美代次のお父さん達が挨拶をしたり、お禮を言つたりすると、

「何の、お禮どころか、私にも、この子と同一年くらゐの孫がゐるでな。」

さう言つて、皆のそばへ腰を下しました。

美代次は、思ひがけない所で、思ひがけない人に
會つたことを、どんなに喜んでおられませんか。

「お爺さんはやつぱり歩いて行くの。」

「あゝ、歩いて行くんだよ。それに、明日の晩は、
東京へつけるでな。」

お爺さんは、東京へつくことが、大して嬉しくも
ないやうに言ひました。

「ぢや一しよに筏に乗つて行くといふよ。」

美代次は大好きになつたお爺さんといつしよに行
かれたら、どんなに嬉しいかと思つて言ひました。

ところが、お爺さんは、

「滅想な、私は歩いて行く。それだけ面白い目に會
ふんだからな。だが、お前さん達も深川あたりへ行
くんだらう。さうしたら、私の家へ寄るといふよ。
案内をして上げるで。」

お爺さんはさう言つて、所を書いてくれました。
それから、また荷物のそばへ引き返して行つて、大
きな箆のかたまりを持つて来て、美代次にくれまし
た。

さうしてお爺さんは、また箆をふきながら川下へ
歩いて行きました。

美代次たちは、また筏にのりました。美代次はお
爺さんにもらつた箆を大事さうに片手に持つたまゝ、
いつまでも聞えて来るチャルメラの音に耳を傾けて
ゐました。

そして、心の中では、

「東京へついたら、きつとお爺さんのところへ行く
んだ。」

さう、かたく思ひこんでゐました。

(をはり)



辨慶の少年時代

泉 豊 春

松政徳次郎畫

一 お山の饑鬼大將

「顔はこんな怖ない顔をしてをりますけれど、どう
やら心は伶俐らしい存じます。どうぞお師匠さんのお
方で、本の一冊も讀めるやうにしてやつて下さり
ませ。」

辨慶の鬼若は、叔母さんの山井の三位の奥方の傍
で、小さくなつて坐りながら、然ういはれて悲觀し
て了ひました。

お父さんもお父さんなら、叔母さん、叔母さんだ。
お父さんは、私が産れた時に、あんまり怖ない顔を
してゐるといふので、鬼若と名をおつけた。
今又叔母さんは僧正さんの前で、あんな事を云つて
ゐる。そんなにも怖ない顔なのかなあ……

鬼若は、悲觀しながら、黙つて、小さくなつて、
僧正さんと叔母さんのお話を聞いてをりました。

と、僧正さんにはこゝ／＼なすつて、

「幾歳にお成りぢや？」

「六歳でございます。」

「え、何、六歳？」と僧正さんは、又にく〜ツとして、鬼若の顔から鬚髯を更めて御覧になりました。

「は、は、は、わしは又十三かと思つた、大きなア。素敵だなア。角力のやうぢやナ。」

辨慶は又、然う云はれて、出来るだけ小さくならざるを得ませんでした。

すると、叔母さんも笑ひながら、

「唯今でもこんなでございますから、産れました時は普通の子の三歳ぐらゐの大きさでございました。

その上顔がこんな怖ない顔でございますから、これの父が心配をして、餘り怖い顔をしてるから、事に依ると鬼ツ子といふ奴かも知れぬ。捨て、了はうかと申しましたのを、これの母と、私が頼んで、手前共の宅へ連れて参りまして、可愛がつて育てましたので、猶こんなに大きくなりました。」

辨慶の鬼若は、益々悲觀して了ひました。笑談に



しろ、捨て、了はうかは情無い。だが、此の叔母さんには恩がある。然う思つて、柔順しくしてゐますと、僧正さんは又笑ひながら、

「兎に角置いておいでなさいまし。」

「どうぞ何分よろしうお願申上げます。僧正さんの有仰る事は、何でもよく聞くんですよ。」

と、云つて叔母さんはお歸りになりました。

僧正さんは、鬼若を傍に置いて、色々學問を仕込んで見ますと、成程山井の三位の奥方の云はれた通り、顔は兎もあれ、心は恰例で、何を教へてもよく覚ええます。で、教へる方でも脚みがつき、是なら今

に大僧正にもなるであらうと樂みにしておいでになると、これが一方ならぬ悪戯です。

元來生れた時から非凡な體格を持った鬼若、年を取るに従つて、學問も優れてよく申來る代りには、骨格は彌々逞しくなり、力も人並優れて強いので、

いつの間にか、叡山中の餓鬼大將になつて了ひました。

そして毎日小坊主共を集めては、腕押しをする、頸引きをする、相撲を取る。そんな事はかりして遊んでゐます。

外の坊さん達は眉を顰めて、

「自分だけでする事ならまだ我慢も出來ますが、折角勉強してるものを、外の小坊主達を誘ひ出すので何しろ困つて了ひます。」と、僧正さんの許へ來ては、毎日苦情が絶えません。

すると僧正さんはお叱りになる。鬼若はそれを聞くと、

「言付口をした奴は誰だ？ 卑怯な奴だ！」といふが早いか、その人の處へ飛んで行つて襖を蹴破る。障子を叩き破る。イヤモウ亂暴至らざるなし。

終ひには、坊さん達は、鬼若に道で出會ふと、知らあんな顔をして傍道へ透れて了ひます。

と、鬼若は、其時は、その儘黙つてやり過して置いて、後で出會つた時、

「此間は何の意図があつて俺を避けたのだ？」

と、突然腕を捻り上げるやら、拳固でボカ／＼頭を擲つたりします。

最初の内は、僧正さんのお可愛がりだからといふので、お山でも我慢をしてゐましたが、到頭みんなは我慢をしかねて、叡山の坊さん三百人、徒黨を組んで、ぞろ／＼ぞろ／＼、京都の御所へ訴へて出ました。

二 虎班らの坊主頭

辨慶の鬼若は、又悲觀してしまひました。今までは何をしようと、自分の勝手でありましたが、みんなからは御所へ訴へられるしそれはまあお咎めもなく済みましたが、今度はお師匠さんに愛想を盡かされる——もう恚うなつては、お山にゐても仕方がな

い、何處かへ行つて了はうと決心しました。

「だが、此のまゝの格好では、何處へ行つても餓鬼大將の、鬼若と知れるから、相手にしてくれる者もあるまい。一層頭髪をクリ／＼坊主にして、坊さんになつて出掛けやう。」

辨慶の鬼若は、その頃はまだ、圖體は大きくても少年でしたから、振袖に袴を穿いて、お稚子さんの姿をして居ました。

それが、お法衣と剃刀とを、何處で用意したか、持つて來ると、美作治部卿といふ人の湯殿へ這入り込んで、盥へ水を汲み込むと、髪をベト／＼に水で濡らして、ゴリ／＼、ゴリ／＼と、自分で剃り始めました。

が、何うもうまく剃れない。

「まあいゝや、此のくらゐで。」と、盥の水鏡に寫して見ますと、鬼に角虎班にしる何にしる、頭の格好だけは圓く見える。

で、辨慶の鬼若は、湯殿へ振袖と袴を脱ぎ捨てる、スツボリ墨染の法衣を着て、上へ袈裟まで引掛きました。

「これでいゝ、これでいゝ、誰が見ても坊さんだ。が……名前が鬼若では坊さんらしくない、何かいゝ坊さんらしい名はないものかな？」

鬼若は虎班の頭で考へました。と、

「いゝ事を考へ着いた。昔此のお山に武藏坊といふ有名な亂暴者の坊さんがあつたさうだ。よく人が噂をする。俺も亂暴がもとでお山にも居られなくなつたのだから、その人の名を貰つて、坊主の名を武藏坊と付けやう。然したゞ武藏坊だけで、本名が無くては困る。鬼若はお父さんがつけてくれた幼名だから、いつまでも鬼若でもあるまい。何がよからう？ お父さんのお名が熊野別當辨慶で、僧正さんのお名が櫻本歡慶だから、兩方の名を一字づゝ貰つて、辨慶……？ は何うだらう。一つ名告つて見やう。」

武藏坊辨慶！ 武藏坊辨慶！ 強さうでよい名だぞ。」

辨慶の鬼若は、早速それに定めました。

偕て、今までの鬼若は、急に武藏坊辨慶といふ虎班の坊主と早變りをして、素足の高足駄で叡山を降りて來ますと、小原の別所といふ處に、何者かの住み荒した、破れ寺がありましたから、それへノソノソ這入り込んで、暫く住み、晝は京都の町へ出て、托鉢をして歸り、夜は此寺にゴロリと寝てゐましたが、誰も訪ねて來てくれる者もないので、一向面白くも何ともないので、

「どりや、諸國修行にでも出掛けやうか……」と、大欠伸をして、破れ寺を出て行きました。

三 大笑ひ 高笑ひ

その頃、播磨の書寫山には、諸國の修業者が大勢集まつて、然心に學問をして居ました。然しその學問所へ入るのには、それ相當の手續さ

が要る。先づ行所といふ處へ行つて、色々と手續きを聞き、願を入れ、此處で許可を受けてから、始めてその學問所へ入る事が出来るのです。
處が、或日、一人の虎班らの大坊主は、突然、その學問所の縁へ、高足駄で押上つて、ギョロ〜と



大きな目玉で、大勢居る坊さん達の、頭の上を睨め廻して居ました。
許可がなくては誰も入れぬ處なので、中に居た坊さん達は驚いて、
「近頃見馴れぬ法師ぢやが、何處から參られた修行者か？」と聞きました。
と、虎班の大坊主は、怖れ氣もなく、大きな聲で

「比叡山の者でござる！」

「比叡山は何れの御坊か？」

「櫻本。」と、素ッ氣ない。

「僧正の御弟子か？」

「さうでござる。」と、威張つてゐる。

「お名前は？」と、尋ねられて、虎班は、此處一番と、大きな聲を張り上げて、

「天兒屋根命の苗裔、中關白道隆の末孫、熊野別當辨證が嫡子、武藏坊辨慶でござる！」と怒鳴りました。

が、兎も角も、その言葉に、偽りはあるまいといふので、仲間には入れてくれました。

辨慶も、最初の内は、極めて殊勝にお講義など聞いて居りました。

「案外柔順しい坊主ぢやのう。」と、感心して見て居りました。

處が或日、大勢の坊さん達は、一堂に集まつて、盛んなる酒宴を催して居りました。

辨慶は、招かれたわけではなかつたので、一間へ入ると、ごろりと横になつて、脇枕をして、グウグウと、高聲で、晝寝をしてしまいました。

と、其の頃此の書寫山に、相手選ばぬ喧嘩好の、信濃坊海圓といふ暴れ坊主がありました。

その海圓が、辨慶の晝寝をして居る處を見ると、
「ヤ、此奴、うまい處に寝てやあがる。平常から生意氣な坊主だと思つてゐたのに、好い鹽梅だ。恥を



岡體は大きくても、辨慶はまだ少年です。恙う云つて、大さに威かしよした。

すると學問所に居た坊さん達は、その虎班の頭を見て、ブツと思はず噴出しました。

搔かせて、山から追ひ出してやらう。」

と、悪い事を企てました。海圓は硯の墨を持つて来て、いゝ心持さうに寝てゐる辨慶の、片方の頬に「足駄」と書き、片方の頬に「書寫法師の足に穿く」と書き、別に大きな紙を持つて来て、紙捻で辨慶の背後へ結び付け、それに、

「辨慶は平足駄とぞなりにけり。面を踏めども、起きも上らず」と書付けて、小坊主連を二三十人集めて來し、目引き袖引き辨慶を指さしながら、

「今、俺が、オーニイ三！」と聲をかけたなら、みんなで板敷をドン／＼踏鳴らして、一緒に手を叩いてわツと笑ふのだよ。」と教へたから耐らない。

小坊主連は嬉しがつて、海圓が號令をかけると同時に、ドドドドツと板敷を踏鳴らして、みんなであッ！と関の聲を上げて笑ひました。

辨慶は、ナ目玉を剝いて、むツくりと勿ね起きました。が、自分が笑はれてゐるとは氣が付かず、こ

れは飛んだ煩い處に寝てゐたものだからに思つて黙つて其處を出て、大勢の坊さん達の居る方へ歩いて行きました。

と、その又大勢の坊さん達は、辨慶の顔を見て、思はずブツと噴出しました。中には耐らないやうに腹を抱へて笑ひ轉げるのがある……

然し辨慶は自分が笑はれてるとは氣が付かず、何がそんなにをかしいのかは知らぬが、みんなが笑ふのに自分だけ笑はないのも變なものだ。つきあひ氣のない偏屈な男に思はれてもならないと思つたので自分はをかしくも何ともないが、強ひて一緒に、

四 八角の棒の棒

すると坊さん達は猶笑ひ出す――

「コリヤをかしい……わツはッはッは、コリヤをかしい……自分が笑はれてゐるとも知らずに、本人ま

でが笑つてゐる……わツはッはッは、コリヤをかしい……」

「こいつは耐らぬ……」

と、中にはコロ／＼轉がつて笑つてゐる者もあります。辨慶は始めて自分が笑はれてゐる事に氣が付きしました。然し何がそんなにをかしいかは、自分の

るのか？」

と、大きな目玉をギョ／＼光らせて、眞面目に聞くだけ猶をかしいと云つて、アツハ／＼アツハアツハ轉げ出して、人に隠れて笑ふのがある。

辨慶の血相が穩かでないので、長老さんもをかしいのを耐へて間へ入つて、



顔が見えないから分りません。

辨慶はブツと膨れて、

「いや、貴僧の事を笑ふのではござらぬ、外の事を笑ふのでござる。」と云つたので、辨慶も、漸うに納得して其處を出

ましたが、ブラ／＼門前へ出て来ると、其處を通る人が又自分の顔を見ては笑つて行くので、どうも變だとして始めて気が付いて、傍なる池の水鏡に寫して見ますと、顔中何か書いてある……。そればかりではない。背中へ何かヒラ／＼觸る物があるから、手をやつて引張つて見ますと……大きな紙へ……

「辨慶は、平足駄とぞなりにけり、面を踏めども、起きも上らず。」と、落書の狂歌が書いてある……

辨慶はタワツと大目玉を見開くと、其紙を散々に引裂いて捨て、

「こんな恥を掻かされて迄も、此のお山に居る必要はない、直ぐに何處かへ行つて了はう。」と思ひました、

「だが待てよ、俺一人の恥なら兎に角、俺の恥は師匠の恥だ、師匠の恥は叡山の恥だ。面を踏まれて迄も我慢する譯には行かぬ。何うせお山を立去るくらいなら、一つ大いに暴れ廻つて、叡山の僧の度胸を

示せてくれやう……」

辨慶は兎う決心すると、お寺の納屋へ入つて行つて、其處にあつた襦の直垂に、黒糸織の鎧を着、久しく剃らぬ蓬々頭に、鉢巻を引括り、八角に削つた棒の棒を持つて、グワラン／＼と高足駄で出て行きました。

五 仕 返 し

お堂の中には何が始まつたか知らぬが、長老さんが中央の一段高い處に坐つて、其周囲には、三百幾つもの、坊主頭が並んでゐる。又、縁には、中僧小僧其又下には、四五百人もの信徒達が集まつてゐる。

皆なで千人ばかりは居るらしい。其中を、辨慶は御免とも、何とも云はず、ガラ／＼、ガラ／＼高足駄を踏鳴らしながら通つて行く。

中に居た坊さん達は、

「これは怪しからぬ。又あの坊主めがやつて来たよ、

本堂の中に、ズバリズツと、頭を並べた、僧さん達の、膝と云はず、肩と云はず、頭と云はず、辨慶は高足駄のまゝ、大跨に踏ん跳いで歩き廻る……

長老さんは驚いて、

「此處を一體、何處だと思つて居るのぢや。此のお寺は悉くも性空上人の建てられたお寺で、高貴の方方も御登山有る時には、履物を脱いで上られる處だ。それだのにお前は御本堂の中まで足駄を穿いて歩き廻るとは何事ぢや？」辨慶は澄ましたもので、

「長老さんの有仰る事は御尤もに存じます。だが左様に御堂の中へ足駄を穿いて上つてさへ、不都合だとお叱りになる程の方々が、何意恨あつて叡山の修行者の顔を足駄にして穿かれたか？」

それだけなら長老さんも、辨慶を宥めて歸し、辨慶も笑つて歸る事が出来たでせうが、其時、その大勢の坊さん達の中に、彼の惡戯の發頭人、信濃坊海圓がゐたから耐りません。(つゞく)

然かも襦の直垂に、黒糸織の鎧を着て、鉢巻迄占めてゐる。何をするか分つたものでない、一層の事此方へ呼び入れようか、それともあのまゝ、打違つて置かうか。」と、中ではが／＼相談が始まりました。

すると一人は、

「何にしても厄介だ、係り合ふと却つて面倒だから知らぬふりをして、見ないやうにして居やう……」

と、皆は目を伏せて、知らん顔を始めました。

信徒達も、一人隠れ、二人隠れ、辨慶の通り道に居た者は、皆道を避けて、後の方へ、コン／＼と隠れました。だから辨慶は大威張です。ガラ／＼、ガラ／＼と、高足駄を踏鳴らしながら、どん／＼階段の方へ上つて行きました。

と、見る間に、縁に居た中僧小僧の肩と云はず、膝と云はず、頭と云はず、辨慶は高足駄のまゝ、大跨に踏ん跳いで、ガタ／＼ガタ／＼縁側中を歩き廻ると、今度は又其足で、裾を端折つて、脛を出して、

ドン

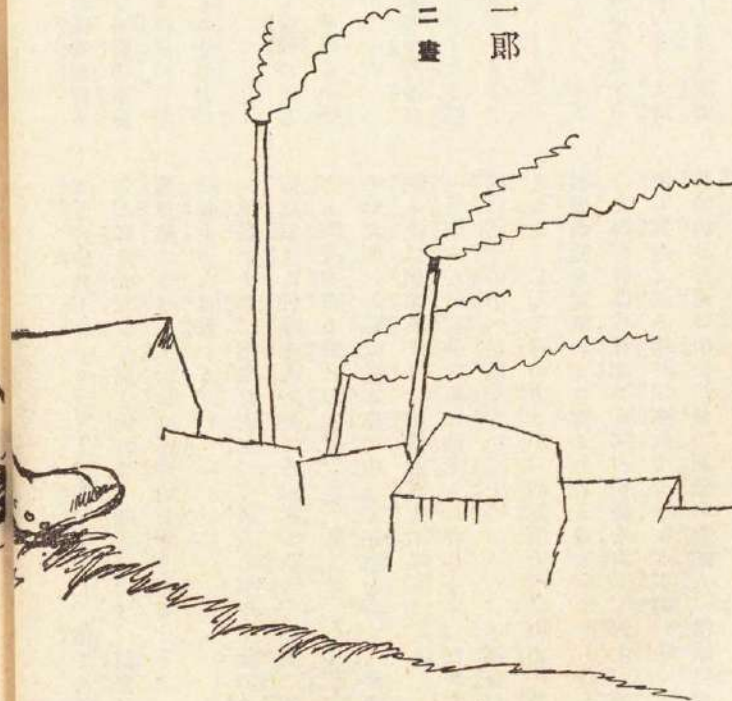
菅原松二郎

竹久夢二畫

ドンだ

おひるだ

ふえがなる



からり

はれたよ

あをぞらよ

ドンだ

おひるだ

ふえがなる



愛犬物語

小島政二郎

寺内七郎画



十七

「さあ、これからどうしよう。」

僅か五分間に、バックが儲けてくれた千六百弗の金を手にした時、ソントンとビートとハンスとは、額をあつめて相談しました。

「これだけ金が出来て見ると、今までのやうに人に使はれてゐるのは馬鹿馬鹿しいぢやないか。」

ビートのさう云ふ言葉に、ハンスも、

「さうとも。これだけの資本で、三人で獨立して何か素晴らしいことがして見たいな。」と合槌を打ちました。

その時、腕組みをして考へ込んでゐたソントンが、

「どうだらう、みんな。」と腕をほどきながら、二人の顔を見ました。「お前達も聞いたことがあるだらう、どこだか知らないが、兎に角アラスカの東部地

方に、金鑛の廢坑があると云ふ噂を……。」

「うん、あるある。」二人が一しよに答へました。

「これまでも大勢の人がそれを探し求めたが、誰一人見つけ出した者がない。探險に行つたまま歸つて來ない者も随分ある。悲劇にからまれ、神秘につつまれた廢坑だ。——どうだ一つ、俺達でその廢坑を探しに行つて見ようぢやないか。」

「成程、そいつは面白い考へだ。一つ一かバチかやつて見ようか。」

「よからう。」

ここで相談が一決して、生きてゐるものではまだ一人も掘り當てた者のないその實の庫を探しに行くことになりました。

三人は、バックと外の犬の五六匹とを連れて、これまで自分達と同じやうな人と犬とが悉く失敗したその大事業を成し遂げる決心で、雪の大海原をアチもなく進んで行きました。彼等は、例のユーコン河

を七十マイルほど溯つて、左に折れてステワード河に入り、更にのぼつてステワード河が小さな深川になつて、この地方の背骨をなしてゐる峻しい山々の間を縫つて流れてゐるあたりまで辿り着きました。ソートンは深山だらうが荒野だらうが、少しも恐れませんでした。一握りの鹽と一挺の銃とを持つて、山の中野の末に分け入り、どこでも、いつでも、氣の向くままに日を暮し、少しも先を急がず、毎日旅をしながら獵をしては食物を求めてゐました。若し食物が獲られないでも、なかに、いつかは取れるに極まつてゐると安心をして、あせらずに旅を續けて行きました。彼等の食事はすべて肉ばかり、櫛に積んだ荷物は主に彈藥と器のたぐひ、さうしていつ終はるか分らない旅でした。

毎日ズン／＼進んで行く、さうしてそれが終はると、今度はまた幾週間もそちにキャンプを張つて、犬どもが勝手に歩きまはつてゐる間に、三人は、凍りついた泥や砂の中に穴を掘つて、その土塊を洶々皿に入れて、何杯ともなく火にかけて金の有無を調べた。また或時は獵の運次第で、人間も犬も共に餓ゑを忍ばなければなりませんでした。その代り、ある時には鱈腹食ひ溜めをしました。そのうちに、夏が來ました。犬も人も荷物を背に負うて、山の中の青い湖水を筏でわたり、森の立ち木でこしらへた細長いボートで、さま／＼の川を下つたり上つたりして廢坑を探しまはりました。

月日はドン／＼經つて行きました。彼等は、この寂しい荒れた野や山を、縦横に歩きまはりました。夏の間に高い／＼分水嶺を越えて、低い谷合へ降り

ました。そこには人里のやうに蚊や蠅が飛んでゐるばかりでなく、南の暖い國へ行かなければ見られ



ない野苺が真赤に熟れて、綺麗な花さへ咲いてゐました。

秋が来ました。彼等は、真青に澄み返つた湖が、幾つもの物凄く静まり返つてゐる地方を歩きまはりました。昔はここにも水禽が住んでゐたのですが今では何一つ生きて動いてゐるものとはありませんでした。あるものは、たゞ吹いて来る冷たい風の音ばかりでした。

また永い／＼冬が来ました。掻き消された人の足跡をたづねて、彼等は飽きずにまだ旅をつゞけてゐました。

「おい。」或日、一つの森の中へはひりかけた時、ソーントンが叫びました。「見る見る、路だ。」

成程、一本の路が森の下にすつと光つてゐました。「へた。もう廢坑も近くに違ひない。」ビートが膝を打つて喜びました。

「うん、たしかに最初に金鎖を探し當てた人が作つ

その聲に、

「どうした、どうした。」と、あとの二人も駆け寄つて覗いて見ると、そこには砂金が黄くバタのやうにコピリ附いてゐました。思はず知らず二人とも、

「バンザイ。」と兩手を高くあげて振りました。

しかし、ここは三人がそれを目當てにやつて来た例の廢坑でないことは明かでした。廢坑でなからうが、三人にとつては、金鎖さへ見つけられれば、譯でした。で、彼等は松の木を切つて小屋を作つて、ここに足を止めることになりました。

羨ましいことに、彼等がここで一日働くと、砂金と金塊とで何千弗と云ふ儲けをすることが出来るのでした。しかも、それが毎日だから大變なものでした。それを鹿皮の袋に五十ポンドづつ詰めて、小屋の外に、薪のやうに積み重ねました。かうして毎日毎日寶を積み上げて行きながら、彼等は楽しく急しく夢のやうに働きつづけました。

五二
た路のやうな氣がする。」とハンスも喜びに顔を輝しました。

「兎に角、この路を行つて見よう。」

ソーントンが真先に立つて歩き出しました。暫く行くと、獵小屋の跡に出来ました。

「らしいせ。」

三人とも顔を見合せました。と云ふのは、廢坑の近くに、小屋が立つてゐると云ふことを聞いてゐたからです。しかし、そこからは、腐つた毛布の屑しか見つけ出すことが出来ませんでした。

「チエツ。」

三人はガツカリして、また旅をつゞけました。

二度目の春がめぐつて来た時、彼等は廣い谷合にキャンプを張つて、例によつてあちらこちらの砂や土を調べまはつてゐました。と、或日、淘汰皿を火に掛けてゐたソーントンが、突然、

「バンザイ。」と叫びました。

十八

それに引きかへて、大達は、ソーントンが殺す食料の肉を折々挽いて来るより外に全く用事がなくなりました。バックは絶えず火の傍で、うつら／＼と眠りながら時を過しました。そんな時、彼は森の奥から自分を呼んでゐるやうな聲を聞いて、ビクツと頭を持ちやげることがありました。さうして耳を澄して一心に聞き入るのでした。それは、不思議にボンヤリとした喜びを彼に感じさせ、譯の分らない憧れを抱かせるものを持つてゐました。で、彼は、時としてはその呼び聲を追つて森の中へ分け入つて、それを探し求めながらその時時の氣分で、或は軽く或は強く吠えたりしました。また冷たい山の苔の間や、草の生ひ茂つた黒い土の中へ鼻を押し入れて、山の匂を懐しんでゐる時もありました。しかし、なぜそんなことをするのか、彼には自分でも分りませ



んでした。たゞ、さうしずにはゐられなかつたのでした。

また或時は、いきなり飛び起きて、一目散に駆け出して行くこともありました。さうして何時間も何時間も、森の中や、石ころの多い野原を走りまはつてゐるのでした。

水のない谷川を走り下つたり、藪の中へ忍び入つて小鳥に狙ひ寄つたりすることが、バツクには非常に愉快でした。

どうかすると、一日中小藪の中に身を潜めて、いろんな鳥や獣が現れてノコノコ歩きまはるのをちつと眺めてゐることもありました。

しかし、彼が一番楽しみとしてゐたのは、夏の真夜中の薄暗がりの中へ走り出て、森の幽かな叫びに耳を傾けながら、野山の姿

や物音にうつとりとなつて、あの不思議な呼び聲を探し求めてゐる時でした。

或晩、バツクはふいに眠りから醒めて飛び起きました。目は燃え、鼻はピク／＼と顫へ、鬚は逆立つてをよいでゐました。――森の方から、例の呼び聲が聞えて來たのでした。

彼はいつもの懐しい氣持に馳り立てられて、寢静まつたキャンブを抜け出るが早いか、森をさして走り出しました。

だん／＼その聲に近づくにつれて、バツクは歩みをゆるめて一足毎に注意を加へつつ、木立の間の或廣場まで來ました。

見ると、狼が一匹、そこに腰を据ゑて、鼻を空に長鳴きをしてゐました。

(つづく)





童謡

野口雨情選

(大人篇)

蛙 (賞)

森 ほとる (愛知)

田んぼの
田んぼの
お月さま
蛙と

あそんで

夜がふける

田んぼの

田んぼの

ぬれた草

蛙と

あそんで

夜がふける

山の頭剃り

吉村 薫 (大分)

春だよ

風も

最うぬくい

山の頭を剃つてくりよ

剃刀や

紅い火

よくすべる

くりくり坊主黒坊主

山の頭が剃れました

春だよ

雨も

最うぬくい

ちよいと見ぬまに

知らぬまに

山の頭は青坊主

かたつむり

都外川 勝 (大阪)

キラ／＼光る

銀の路

煙も出さず

汽車が行く

キラ／＼光る

五六

銀の路

機関車一つで

客車なし

キラ／＼光る

銀の路

通つた汽車は

かたつむり

金魚

阪野 潤 (大阪)

金魚の金魚は

可愛いナ

ガラスのお家で

ねんね してる

さつき背高の

異人さんが

青眼で チョツクラ

見て通つた

ガラスのお家で

ねんねしてる

金魚の金魚は

可愛いナ

すみれ

中村 利雄 (大阪)

すみれの

花はこむらさき

一けんやの

おせどに

さいてゐた

ひよこは

五六ツば

あそんでた

一けんやの

おせどは

山つゞき

すみれは

ならんで

さいてゐた

月夜の小鳥

村山俊太郎 (山形)

月夜になると

小鳥は夢をみる

お月さん青いから

夢をみる

夢で小鳥は

母さんと

青い月眺めて

ゐるのだろ

月夜になると

小鳥はうれしいな

若葉の小枝で

ねんねする

日盛り

本多 鐵磨 (東京)

日盛り

川べり

草いきれ

いろんな匂が

してゐます

誰が捨てたか

さびついた

カンカラ小太鼓

たゞ一つ

日盛り

かげらう

草いきれ

ゆらゆらゆれて

見えました

空のお星さん

田島 英二 (神奈川)

空見りや

お星さんは

光つてる

窓でちらちら

光つてる

見て居りや

お星さんは

ふえて行く

ちらちらお窓に

ふえて行く

五七

よしきり

古村 徹三 (大阪)

風の
日ぐれは

さや さやり

葦洲の

よしきりや

寒かるな

伸びて

ちぢんで

岸の灯も

ちかちか

お目々に

いたかるな

ほうせん花の實

名和 暢兒 (福岡)

ちよいとつまめば

はぢけてぼろぼろ

あはつぷこつぷの

ほうせん花の實

つまむなよつまむなよ

ほうせん花の實

おつむさすつても

びつくりしてぼろぼろ

あはつぷこつぷの

ほうせん花の實

さすつてもだめだよ

ほうせん花の實

蝶々の影法師

室町かづ緒 (大分)

おにはの

おにはの

真中に

はつばが

一つ

おちました

どこから

来たかと

上見たら

なーんだ

蝶々の

影法師

唐辛子

島本 夫二 (愛知)

だんだん畑の唐辛子

いまでは 蓆に

干されてる

蓆に干された唐辛子

とんぼが とまつて

五八

かんがへた

だんだん畑にある時に

とんぼは とまつた

ことがある

つゝじ

長谷川重業 (東京)

小さな日がさを

さしてゐる

つゝじのそばに

子がひとり

風にさらりと

ゆられてる

つゝじのひがさを

ほしそくに

ひとりいつまで

見てゐます

いちご

川口 洋 (東京)

いちごころころ

草の中

赤い帽子の

見えかくれ

ひばりが上から

呼んでゐる

赤い帽子が

四つ五つ

兵隊さん

都築 保二 (愛知)

肩組んで

肩組んで

走つてこ

隣りの爺さん
言つてたよ

カザノお馬で

兵隊さん

学校の道を

山道を

お晝はもうじき

通るぞな

肩組んで

肩組んで

走つてこ

迷子の螢

鈴木 眞哉 (東京)

しつとり静かな闇の夜

びつかり螢が飛でゐた

はよー歸れ



迷子の螢

しつとりぬれた澤の家

はよー歸れ

迷子の螢

はよー歸れ

迷子の螢

はよー歸れ

迷子の螢

はよー歸れ

迷子の螢

はよー歸れ

迷子の螢

はよー歸れ

迷子の螢

はよー歸れ

迷子の螢

はよー歸れ

林 潮花 (山形)

かもめ

かもめが飛んだよ

かもめが飛んだよ

海ん中飛んだよ

白いお羽で飛んだよ

渚にや遠いよ

島にや遠いよ

海ん中とんだよ

海ん中とんだよ

海ん中とんだよ

五九



不思議なラフコス

鳴海要吉

水島蘭保布畫

き

お母さんが電燈の下で針仕事をしてゐます。
お父さんが火鉢のそばで大きい／＼欠伸をしまし
た。

六疊つぎりのバラツクの家です。

「アーア。明日もまたあふれかな。仕事の無いのは
一番閉口だ。」

お父さんは欠伸まじりに斯う言ひました。

あふれといふのは仕事が休みになることです。

「貧乏が一等辛いな。夢にでもい／＼から、大金持に
なつてお父さんとお母さんに一遍樂をさせたいもの
だ。」

と、傍で聞いてゐた一人息子、梅吉くんが考へま
した。

梅吉くんは親孝行な子です。そして尋常六年の級
長です。

或日曜日に、『けふは仕事がない。』といつて、お
父さんは朝から家にゐました。

「梅吉。お前を浅草の公園につれて行かう。」

お父さんは言ひ出しました。

「公園を唯歩くばかりちやつまんないなあ。」

梅吉くんは答へました。

「まあ、なんでもい／＼から一緒にお出で。」とお父
さんはまた言ひました。

お父さんと梅吉くんは電車に乗りました。

雷門の前で降りました。

二人は仲店をだまつて通りました。路傍にいろい
ろの商ひをする所も通り抜けました。綺麗な活動

小屋の前は繪看板を見い／＼歩きました。

「お父さん。安い活動を一つ見て行かない？」

と、梅吉くんが言ひました。

「夢にでも大金持になつたら見やう。まだ／＼見ら
れない。」とお父さんは言ひました。

今度は、

「お腹がすいたからおそばを食へさせてね。」

と、梅吉くんが言ひました。

「夢にでも大金持になつたらたべやう。まだ／＼た
べられない。」

と、お父さんは言ひました。

大分歩きました。

妙な小屋の前に、人が三十人ぐらゐ立つて見てゐ
ました。小屋は不思議な術を教へる所でした。

フラスコといふのを皆さん知つてませう。――首

の細長い硝子の瓶のことですね。

あのフラスコの中に、その口よりも大きいいろい
ろなものが這入つてゐました。

大きな／＼毬も這入つてゐました。

大きな／＼糸轆も這入つてゐました。

造花の這入つてるのも、お人形の這入つてるのも

玩具の這入つてるのもありました。

そんなフラスコがいくつも小屋の前に飾られてありました。

どれもみな口よりすつと大きいもので、どうして入れたか不思議でくたまらない物ばかりでした。

『さあ……。この不思議な術を覚えていらつしやい。大金持になることが受合ひ……。全部教へて傳授料は唯の二十銭……』

と、木戸の男は聲を咽らして呼び立てゝゐました。

二十銭を出して傳授を受けに這入る人が大勢ありました。

『之を習へば、またこの通りお錢をどつさり儲ける譯だ。十人で二圓、百人で二十圓、千人で二百圓、萬



人、二千圓……これは大金持になる一番の早道だ。梅吉くんが考へました。

『習つて行かうよ。』梅吉くんは小さい聲で、お父さんの袖を引きました。

『バカ……。こんなものを習つてどうする。』

お父うさんが言ひました。

『大金持になるんぢやありませんか。』と、また低い聲で梅吉くんは一生懸命に言ひました。

お父うさんはだまつて、がまぐちから二十銭出して、木戸の男に渡しました。そして、

『これはわしの子供だから、負けて入れて呉れ。』

と、お父うさんは言ひました。木戸の男はすぐに負けて呉れま

した。二人は小屋の中に這入りました。

二

習ひ手が外に七八人ゐました。教へる人は白髯のお爺さんでした。

フラスコへ大きな毬を入れること

から二人は見はじめました。

……紙の風船球へ砂を一杯つめました。その上へ薄く綿をかけました。それに

白い細い絲を満遍に捲き付けました。その上を色絲で綺麗にかざりました。

フラスコの中いづばいぐらゐの見事な毬が出来上りました。



それから、その毬の一方に穴をあけて、砂をそつくり出ししました。その穴へ細い竹筒を挿入れ、毬は細くつばめて、フラスコの中へ押込みました。竹筒からまた砂を注ぎこみました。中で段々にくれました。

そうれ。フラスコに立派に大きい……毬が這入りました。

なんと驚ろいたでせう。その外いろく物の入れ方を、お爺さんがしてみせました。

『これは面白い……。私等の身體でも這入りさうなものだ。』

お父うさんは冗談半分に言ひました。

『え。這入りますよ。なんなら入れてあげませうか。』白髯のお爺さんはお父うさんの顔を見ながら

言ひました。

「それぢやひとつ入れて貰ひませうか。」

と、よせばいいのに、お父うさんはさう言ひながら、お爺さんの前へ出て行きました。

梅吉くんは、お父うさんは喧嘩でもするのではないかと心配でたまりませんでした。

「この上へちよつと足を載せなさい。」

白髯のお爺さんが言ひました。

お父うさんが、ちよいと片足をフラスコの口の上に乗せたかと思ふと、もう兩足からする／＼と吸はれるやうに、お父うさんはフラスコの中に見る／＼這入つてしまひました。

透徹つた一尺ばかりのフラスコの中にお父うさんが小さく見えて居ります。

みんなは驚ろいて顔を見合せました。

何より困つたのは梅吉くんです。

「やい。魔法ぢやい。お父うさんをこんなに小さく

して、人殺しの畜生。お父うさんを元の通り大きくしてよこせやい。」

と、梅吉くんは憤りわめきながら、大聲で、

「アーン、アーン」と泣き出しました。

「お前さんはこの中の人の息子かえ。憤るのも泣くのも無理はない。だが、考へてごらん。お前さんのお父うさんが入れて呉れと頼んだから私が入れてあげたのだよ。這入

つたのが悪ければお父うさんが悪いので私が悪いのでは無いよ。」

とお爺さんは言つて、けろ

りとして

ゐます。



梅吉くんも、その爺さんの道理に負けて何とも言ふことは出来ません。そこで、傍にある火箸のやうなものを持つて、フラスコを毀してお父うさんを出さうとしました。

「それは止めなさい。お父うさんは斯うなつた以上はもうフラスコから出したら死んで仕舞ふのですよ。死ぬがいゝか、生きてるがいゝか。」爺さんはあわて、梅吉くんを止めながら言ひました。

「生きてる方がいゝけれども、こんな風になつて悲しい……」

といつて、梅吉くんはまた泣き出しました。

お爺さんは慰めて、

「いや、その代りこのまゝお父うさんのフラスコを持つて歸れば、お前さんところは大金持になれるんだ。大金持にさへなつたら、どんなことでも出来るぢやないか。」と、梅吉くんに申しました。

梅吉くんは泣く／＼そのフラスコを手へ提げて、

本戸を出てまゐりました。



本戸の外には大勢の見世物師が待構へて居りました。

「そのフラスコを百圓に

賣つて下さい。」

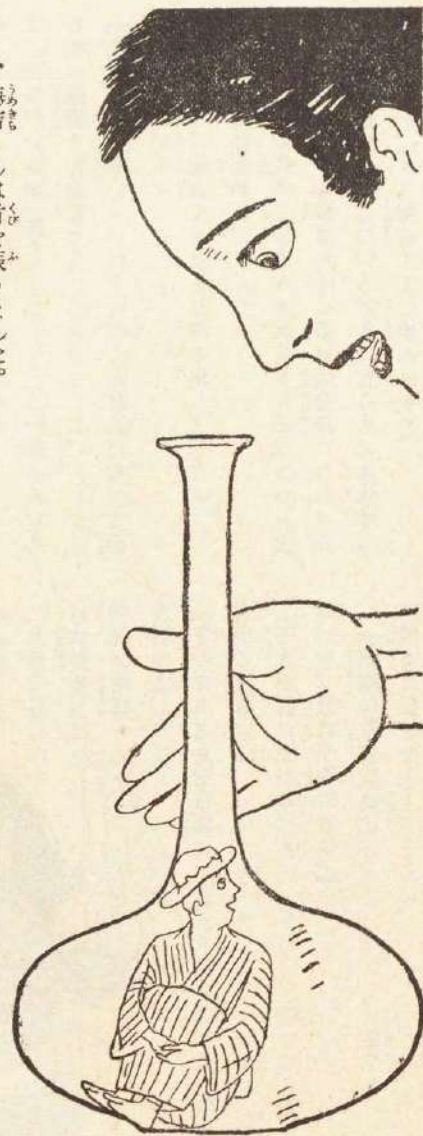
一人が言ひました。

「いや、私は千圓に買ふ。」

「一萬圓に私は買ふ。」

段々に値がせり上りました。

「賣るならいくらでも嫌だ。」



と、梅吉くんは首を振りました。

『私に二年間貸して下さい。十萬圓出す。』

と、一人の見世物師が言ひました。

貸すのならいゝと、梅吉くんはその人と約束しました。

梅吉くんは百圓紙幣千枚貰つて家に歸りました。

三

『お母さん。いま歸つたよ。』と言つて、梅吉くんはまたも泣き出しました。

『お父さんがどうかしたのか。』

と、お母さんは心配しながら訊ねました。

『お父さんはフラスコに這入つちやつたんだあ。』

と、また泣きました。

お母さんは何が何だか呆氣にとられてゐました。

梅吉くんは譯を細かく話して、十萬圓のお紙幣をそこに投出しました。

お母さんはあまりに悲しいやら、うれしいやらで、目をまはしてしまひました。

梅吉くんは何しろお金が澤山あるものですから、深川區一等ともいふ程のえらいお醫者さんを頼んで来てお母さんの療治を頼みました。お母さんはやがて丈夫になりました。

お母さんと梅吉くんとは五萬圓で立派な家を買つて住まひました。

残りの金で、思ふやうなことをして楽しく暮しました。

二年は夢のやうに経ちました。

見世物師が、お父さんのフラスコにまたも一萬圓

のお禮を添へて、梅吉くんの所へ返しに來ました。

二人は、フラスコのお父さんを見て、また今更のやうに胸一杯に悲しくなりました。

『折角大金持になつても、お父さんがこんな風ではなんにもならない。』

と、二人ともまた／＼大聲をあげて泣き出し

た。

その時、梅吉くんの背中を叩く人がありました。

『梅吉。お前何が悲しくて、そんなに泣くのさ。』

と、いふ聲はたしかにお父さんでした。

梅吉くんは、お父さんとお母さんの傍に寝て夢を見て居たのでした。

『あゝ、夢でよかつた。』

と、梅吉くんは思ひました。

(をはり)

生埋さにたれ話

久米 舷一

寺内萬治郎 書



六八

これは、北海道の鶴巻炭坑で起つた悲惨な事件です。私は、伯父の善助と一緒に炭坑へ這入りましたが、不意に大洪水が起つて坑内が水没となりました。我々はもう少いで溺れてしまふところでしたが、危い命を助かつて、小高い丘へ助け上る事が出来ました。我々の外に、五人の坑夫がゐました。皆んなはもうとても助からないと思つて、自然気が荒くなつてゐました。その内、坑夫の一人の安公と云ふのが、どうしたわけか、急にオイ／＼と子供のように泣きだしました。

三

「おい、安公。どうしたんだ、大きな泣きをして、見つともない！」
龍太はかう云つて、安公の顔を覗き込みました。
「や、此奴め、ほんとに涙を出してゐるんだな。」

安公は、太い逞しい腕で、涙をこすつては泣きじやくりを續けてゐました。石炭屑と涙で、顔が薄黒くなつてゐました。

暫くして、安公はふと顔を上げて、皆んなを見渡しました。

「皆んな、聞いてくれ。俺は一つ懺悔をしたい事があるんだから……」

懺悔と聞いて、皆んなは呆氣にとられたように、黙つて安公の顔を見詰めました。

「俺は、皆んな此處で話してしまふ。お前達は俺の罪を赦してくれらだらうな？」

「なんだと、安公」と、第一番に龍太が口を切りました。「貴様、どんな悪い事をして來たんだ、さア、

早く話してしまへ。隠してをすると非道いぞ。貴様みたいな奴がゐるから、俺達までこんな苦しみをしなけりやならないんだ。さア早く白狀してしまへ。云はないか此奴め。」

龍太は立上つて、いきなり安公の襟首を捉まうとしました。

せんせいはそれを止めて、

「まア待ちなさい、龍太。安公は今、自分から云はうとしてゐるんだ。なア安公、お前、包まずに話すだらうね？」

「話す、話す。皆んな話してしまふ。だから俺の罪を許してくれ、な、皆んな、俺のして來た事を赦してくれ。」

「此奴め、往生際の悪い奴だな。」

六九

早く云はないか。」龍太は猛りた
ちました。

安公は猶も暫くためらつてゐま
したが、やがて決心したように云
ひ出しました。

「二月前に……茶店のお仙婆の
財布が無くなつた事があつたら
う。中に拾二三圓金の這入つてゐ
た……あの財布を盗んだのは俺
だ。俺が盗んだのだ。……だが……
俺はあの金を使ふ事が出来なかつ
たんだ。一文も使はずに、いまで
もちやんとその儘になつてゐる。俺
の家の臺所の火消壺の中に隠して
あるんだ……皆んなの者。俺
のしてきた事を勘辨してくれ。な
ア……」

一瞬間、あたりはしいーんとし

てゐました。然し、直ぐに龍太が
獸のように喚ぎだてました。

「安公！ お仙婆の財布を盗ん
だのは貴様だつたのか！ こいつ
め、よくも今まで隠してゐたな。

貴様みたいな奴があるから、天罰
で我々までかうした苦しい目に遭
はなけりやならないんだ。こいつ
奴、どうするか覚えてゐろ！」
龍太は喋つてゐる内に、自然
と自分の言葉に激昂して來まし
た。そして、よろ／＼と立上つた
かと思ふと、いきなり安公の襟首
を掴みました。

「さア、水難炊を食はしてくれ
ぞ！」

龍太は安公を、下の水めがけて
突落さうとしました。安公は突落

されまいとして藻掻きました。人
人は止める間もありません。

「あッ」と云ふ間に、二人は組み
合つたまゝ、足場を失つて、真逆様
に下の水めがけて、轉げ落ちて行
きました。

ガラ／＼と石炭屑が崩れて、凄
じい水煙りが立ちました。一度水
底へ沈んだ二人は、再びチャリと
水面に姿を見せましたが、それも
ほんの束の間で、直ぐと又黒い水
に吞まれてしまひました。

私は我を忘れて立上りました。
そして、水際へ降りようとする
と左右からせんせいと、善助伯父と
に止められました。

「待て、源之助、どうしようと云
ふのだ。」

「助けにゆくんだ……」
「助けに？ 馬鹿！ 貴様泳げる
のか？」
「泳げる……さッと助けてくるか
ら……」

「いけない！ 行つちやいけな
い！ ちいッとしてゐろ。」

善助伯父は私の腕を掴まへて、
叱りつけるように云ひました。せ
んせいは私の襟首をつかまへてゐ
ました。鶴松も真似をして、私の
上衣の端を、しッかりと握つてゐ
ました。

丁度その時、岸から一間ばかり
離れた所に、一つの黒い頭が、ボ
ツカリと浮び上りました。そして
こつちの岸めがけて、そろり／＼
と泳いで來ました。

善助伯父は、ランプを差出して
「誰だ。どつちだ。」と叫びま
した。

丁度、岸へ上らうとしてゐた男
は、ギロリと眼を光らせて、こつ
ちを睨みました。

「俺だ、龍太だ。」

「安公は？」
「絞め殺してやつた。奴め、狂人
みたいに暴れやがつた……」

龍太は、雫をボタ／＼垂らしな
がら上つて來て、私の傍に、どつ
かと腰を下ろしました。私は思は
ず身を退きました。

可哀さうな安公。
私は今でも、あの大きな圖體を
した安公、併し、どこか子供々々
した所のある安公の姿を思ひ浮べ

ると、自然と胸の中が熱くなつて
來ます。安公には、親もなく子も
なく、たゞ二ツ姉下の妹と一緒
に、河岸の小屋に住んでゐたと云
ふ事です。

四

永い／＼日が経ちました。夜晝
真暗闇のことゝて、はつきりとし
た事は分りませんが、少なくとも
七日位は経つたかと思はれます。
その間何一つとして口に入れた
ものはありません。たゞ時々、水
際へ降りて行つて、金魚のように
ガブ／＼と水を飲むだけでした。
もう皆んなの眼は恐ろしい程に窪
み、身體の皮はお婆さんのように
弛んで、つまみあげてみると、何

時まで、その形が残つてゐました。

中で、最もひどく饑餓を感じたのは、鶴松でした。鶴松は、ひっそりなしに『うーん、うーん』と呻つてゐました。そして、手あたり次第に、なんでも口の中に入れて、舐ぶつて見るのでした。壁を傳つて行く鼠を見ると、鶴松は、どうかしてそれを掴まへようと思いました。併し、こればかりはどうしても駄目でした。一度などは、手を伸ばし過ぎて、もう少しで轉げ落ちさうになつた事がありました。

到頭しまひに、鶴松は、私の革靴に眼をつきました。そして、『その靴を俺に呉れんか。』と云ひま

した。

私は、どうするかと思つてやりますと、鶴松は例の帽子から小刀を出して、靴の革の軟かい所を削りだしました。そして、口の中へ入れて、『ニツチャ、ニツチャ』と噛みしめてゐるのです。獣の皮だけに、噛んでみると、いくらか味があつたと見えます。

權藏や龍太は、口に出してこそ云ひませんが、その苦しみは、あり／＼と顔に現はれてゐました。頬の肉はゲツツリと落ちて、眼だけが妙な光りを帯びてゐました。

我々の中で一番元氣のあつたのは、せんせいでした。せんせいは地上から確かに助けに来てくれる事を、確く信じてゐました。私が

七二

家の事々思ひ出して、メソ／＼と泣いてゐると、せんせいは私の肩に手をかけて、『源之助や、お前、なにを泣いてゐるんだえ？ 泣かんでもよい、きつと助けに来てくれるからな。』俺の考へでは、地上からこの『袋』まで掘り下げてくれるか、或ひは、坑内の水をポンプで汲み出して呉れるか、どつちかの方法できつと助けてくれると思ふんだ。それも、あと十日ばかりの辛抱ぢや。』

あと十日！ その間我々は、どうして生きて行かうと云ふのでせう。せんせいとても、口ではこのような強い事を云つてゐますが、内心ではきつと心細く思つてゐた



に違ひありません。

到頭、恐ろしい事が起りました。

私は、極度の空腹の爲に、睡氣を催はして、ウツラ／＼としてをりました。すると突然、誰れかの大きな叫び聲で眼を覺まされました。

それは鶴松の叫び聲でした。

鶴松は、右手にナイフを持ち、よろ／＼と崖際に立上つて、踊るような身振りをしながら、

「アリヤ、アリヤ、アリヤ。」と、譯の分らぬ事を口走つてゐるのです。大きな口は、だらんと開いて涎が流れてゐます。

かと思ふと、鶴松は突然ベタリ

と石炭屑の上へ坐つて、

「やア、聞える。鶴松の音が聞える。我々を助けようとしてゐるんだ。お前達、あの鶴松の音が聞えねエのか。ドーン、ドーン、と氣持ちのいい音をたてゐるぢやないか。あれが聞えないか、馬鹿！我々はもう直ぐ助け出されるんだぞ。……」と、續け様に喋べりたてます。

私には、一體どうしたのか、ちつとも分りません。耳を澄まして見ても、鶴松の音などは、ちつとも聞えません。私は、そつとせんせいの顔を見上げました。するとせんせいは私の手を確く握つて、「可哀さうに、氣が違つたのぢや。」

と、云ひました。

私は、ぎよつとして鶴松の方を見ました。

鶴松は、その大きな眼で、キョトンと私の顔を見詰めてゐましたが、やがて、

「源之助。お前にやアあの音が聞えるだらうね。ホラ、あの鶴松の音がさ。ドーン、ドーン、と云つてゐるだらう。我々はもう直ぐ外へ出されるんだよ。外は綺麗だよ。おてんとさんが照つてゐる、青い樹があつて、冷たい風が、ソヨソヨと吹いてゐるんだよ。小鳥も鳴いてゐるんだよ。嬉しいだらうお前。……」なに、嬉しくないッて？」鶴松は、かう云つたかと思ふといきなり立上つて、右手のナ

イフを取りなはし、露な左の腕に

グサリと突刺しました。人々は、

「あッ」と叫聲をたてました。

鶴松は、ほとばしり出る血をぢ

いッと見てゐましたが、やがて、

「餓頭！餓頭！」と叫んで、そ

の傷口に口を當て、チュウ／＼と

音をたて、血を吸ひ始めました。

血が出なくなると、又小刀で、滅

多やたらに傷口を突つき廻し、貧

乏るように血を吸ひのぞいた。

「鶴松！これ、鶴松！」

直ぐ傍にゐた善助伯父は、鶴松

を抱き止めようとしてました。鶴松

は、ツと身を翻はさうとしましたが、

が、その途端、するりと足を滑ら

せて、恰も棒が倒れるかのように

眞逆様に下の水めがけて落ち込ん

で行きました。

併し、鶴松の身は水へは入らず

に、水際の平地で止まりました。

一度、仰向けになつて、のけぞる

ような恰好をしました。その儘

ぐつたりとなつて、再び動きませ

んでした。

直ぐに善助伯父は降りて行きま

した。そして、鶴松の胸を押しひ

らいて、手をあて、見ました。

「お、もう死んでゐる。」

善助伯父は低い聲で呟きました

ランプの光りは、水際に長々と

寝た鶴松の死骸を照しだしまし

た。鶴松は、大きな眼をボカンと

開いて天井を見つめてゐました。

善助伯父は、自分の上衣を脱いで

鶴松の顔の上に被せ、靜かに上へ

上つてきました。

私は喉が乾からびつゝいようになつて、言を云ふ事が出来ません

でした。そして、眼の先が暗くな

るような氣がしました。

「私は一體、こゝで何をしてゐるん

だらう。なんだつてこんな真暗な

所に這入つてゐるんだらう？」

や、それよりも、私ッて云ふ人間

は、なになんだらう。たゞ、かう

云ふ生きた肉の塊りなんだらう

か？」私は妙な事を考へだして來

ました。何んとも云へない變な氣

分になつて來ました。

「はてな？氣が狂ふと云ふのは

かういふ事なのか？」かう思つ

た時、私は愕然として、覺えずあ

たりを見廻しました。（つゞく）



柿の木の上の山伏

西川 勉

岩岡とも枝 畫

七六

太郎は、いよいよ、草履をはいて家を出ました。これから田圃を見廻りに行くのです。
百姓は、雨が降つても、日が照つても、毎日、田圃の見廻りをします。お父さまや、お母さまが、なにかの御用事で行けない時には、かはりに子供を遣ふこともあります。そんな時には子供でも、大人と同じやうな役目が果せるのです。
今日は、太郎が、お父さまのかはりに、見廻りをする事になりました。

『うちの稲はよく出来てゐるなあ！』
太郎は、いよいよ、嬉しそうに呟きました。あつちこつち、ぐるぐる田圃を見廻つて、その稲と比べて見て、自分の家の稲が一番よく出来てゐるやうに思へたからです。
さて、太郎はひととほり田圃を見てしまつて、畑の方へ廻りました。すると、薄くの南瓜畑の柿の木に、白い布のやうなものがかはらしてあります。
『おや、なんだらう？』
太郎は不思議に思つて、どんだん足を急がせて近寄つて見ました。すると、どうでせう？ 一人の山伏が柿の木にのぼつて、むしやむ

い、や、柿の實を食べてゐるやありませんか？ ひといい奴です。盆柿といふのは、新暦のお盆時分にうまくなる甘柿のことです。

この山伏は、さつき町を歩いてゐた時に、『法師貝もたぬ山伏は、法師貝吹くこと出来ないで、道々嘘を吹いて行く。』と、云つて、町の子供たちからかはられました。大急ぎで逃げ出して来たのです。そして町はづれへ出て、こゝまで来ると、非常のどがかわいて来たので、水でも飲まうと思つて、ふと見ると、畑の中に柿の木があつて、うまさうな盆柿が澤山實つてゐるのを見つけたのです。

『幸ひ邊りに人もゐない。この盆柿をひとつ、ひいやりと食べたならば、のどかわきもとまるだらう。』

かう思つて、山伏は、すると木にのぼつて、柿の實をひとつもいで食べたのです。ひとつでよせばよかつたのですが、食ひしんぼの山伏は、ふたつも、みつつも、いくつも、いくつも、もいでは食べ、もいでは食べしてゐたのです。そして遂々太郎に見付けられてしまひました。

『山伏の人が柿の木へのぼつて柿を食つてゐる。無暗矢暗に、もいでは食ひ、もいでは食ひしてゐる。いや、憎さも憎し。どうして呉れよう？』

太郎は柿の木の下に立つて考へました。
『大きな聲でどなつてやらうかな、それとも、小石でも拾つてぶつつけて呉れようかな？』

二

『口直しにもうひとつ食べよう。どれがよからうぞ？ これが好き、これが好い。』

山伏は柿の木の下に太郎が来てゐることも知らず、ひとりごとを云ひながら、さかんに柿をもいで食べて居ります。口直しにひとつ、口直しひとつ、と云つて、いくつも、いくつも食べてゐます。
『えへん、えへん、不思議なことや。風も吹かないのに、柿の木がゆらいである。鳥でもとまつてゐるのか知ら？ おや、おや、大きな鳥だ。大きな、大きな白鳥だ。』

太郎はかう云つて、木の上を見上げました。
『俺のことを鳥だと云つてゐる。』

山伏は木の上で呟きました。

『鳥といふものは、よく啼くものだが、啼かないかなあ？ 鳥啼け、白鳥！ おのれ啼かなげりや、鐵砲で打つて貰つてやる。ちやうど向ふの小道へ鐵砲の小父さんが通りかゝつた。小父さん！ 小父さん！』

太郎は叫びました。山伏はこりや大變なことになつたと思つて、鳥の眞似をして啼き出しました。

七七

10

二

にんげん
人間の聲に

にんげん
人間の聲に

人間の聲に

人間の聲に

人間の聲に

人間の聲に



人間の聲に

人間の聲に

人間の聲に

人間の聲に

人間の聲に

人間の聲に

人間の世界に

人間の世界に

人間の世界に

人間の世界に

人間の世界に

人間の世界に

人間の世界に

人間の世界に

人間の世界に

人間の世界に

人間に
おんな
の影に

A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment, looking towards a landscape. The landscape features a body of water, a small boat, and several birds flying in the sky.

人間に
おんな
の影に

A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment. They are looking towards a circular frame containing a landscape with many small birds flying around a central point. The style is traditional Japanese woodblock print.



人間に
おんな
の影に

A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment. They are looking towards a circular frame containing a landscape with many small birds flying around a central point. The style is traditional Japanese woodblock print.

人間に
おんな
の影に

A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment. They are looking towards a circular frame containing a landscape with many small birds flying around a central point. To the left of the circle, there is vertical Japanese text.

[illegible]

人間の世界に



A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment, looking towards a small sailboat on the water under a cloudy sky.

人間に
おんな
の影に

A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment. They are looking towards a circular frame containing a landscape with many small birds flying. The style is traditional Japanese woodblock print.

人間に
おんな
の影に

A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment. They are looking towards a circular frame containing a landscape with many small birds flying. The style is traditional Japanese woodblock print.

[illegible]

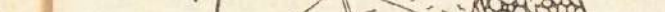
人間の世界に



A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment, looking towards a small sailboat on the water under a cloudy sky.

[illegible]

人間の世界に

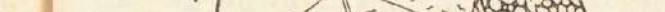
A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment, looking towards a landscape. The landscape features a body of water, a small boat, and several birds flying in the sky. The style is traditional Japanese woodblock print.[illegible][illegible]

人間に
おんな
の影に

A black and white illustration showing a person from the chest up, wearing a patterned garment. They are looking towards a circular frame containing a landscape with many small birds flying around a central point. The style is traditional Japanese woodblock print.

[illegible][illegible]

人間の世界に



A circular illustration showing a person's profile on the right, wearing a patterned garment, looking towards a landscape on the left. The landscape features a body of water, distant hills, and several birds flying in the sky.



童謡

野口雨情選

(子供篇)

らをやさん (賞)

千葉 伊藤 (詩四)

らをやさんが来た
らをやさんが来た
らをやさんが来た
赤とんぼ

花 島 (賞)

熊本 海達 公子 (四年生)

やぶの中から
花鳥が
明るう
見えた

学校へ来る時 (賞)

福岡 富永 雪夫 (詩五)

草つゆが
青葉の先で
きよつとして
光つてた

夕 焼

山口 木村 勇 (詩六)

夏の夕方
夕焼が赤い

電線に

赤とんぼが一匹
赤く見える

ア メ

熊本 山村 一郎 (詩三)

アメガザザザ
フリダシタ
ヤネカラアマダレ
オチテキタ
オヤネノアマダレ
アマダイコ
ヤネカラボタリト
オチテキタ

ニツコリお日様

東京 和田 一

ザア／＼大雨
はれました

八二

仔犬が

ビョン／＼
はねてゐる

ニツコリお日様
こんには

お人形さん

千葉 平山 幸子 (詩四)

わたしがお人形
だつこして
かがみの前へ
いつたら
かがみもお人形
だいてゐた

雞

千葉 小幡鐵太郎 (詩五)

おはちに手を入れた

雞が
首を長くした

夜の濱

東京 醍醐 正明 (詩六)

しーんと

しづんだ夜の濱

さわいでゐるのは
大波小波

夜の自動車

朝鮮 山本 力 (詩七)

夜の自動車

お目玉さん

暗の中から
二つ目さん

おや／＼こちら

三つ目さん
夜の自動車
お目玉さん

ポストさん

東京 長尾あき子

赤いべを着た

ポストさん
明るい町に

ただ一人

横町の木かげに
立つてゐる

風

東京 大築登美子 (詩八)

そよ／＼ふくは

夏風か

ゆら／＼うごくは
影だろか

お人形さん



おてんぱ様は
きいらきら

馬車

福岡 草場 一九 (詩九)

馬車がゆく

がらがらと

家の前を通る
うちの仔馬は

ひーんとなく

牛の群

山口 青木 武夫 (詩一〇)

牛の群

とはつたあと
しづかな風

菜の花がゆれる

八三

引越した蜘蛛 (推薦)

窪田重次
寺内萬治郎書



蜘蛛は、深い眠りから覚めまし
た。爽かな五月の朝風が静かに銀
色の釣床を揺つたのです。蜘蛛が
眼を開いてからも釣床は時々快
く微かに揺れました。揺られ乍ら
蜘蛛は、大きな欠伸をして、それ
から、「せい」ばいのびをしました。
清々しい空気が太つたお腹に流れ

込みました。で、蜘蛛の昨夜から
の軽い疲れが全く消え去つて了ひ
ました。

蜘蛛は昨夜かなり遠くの森の中
の小藪から、ここへ引越して来た
のでした。蜘蛛はここへ着くと直
ぐに、窓から洩れる燈火を頼りに、
松の枝から軒端へかけて、新しい
お家を拵へなければなりませんで
した。で、眼が覺めた時、軽い疲
れを覺えてゐたのです。

蜘蛛は全く元氣になりました。
そこで、此の新しいお家の見晴し
はどうだらうと見渡しました。實
の所、引越が夜だったもので、こ
こらがよからうとただ何となく感
じた外は、全くの行き當りばつた
りだったので、あたりがどういふ

様子であるかを見るのは今朝が始
めてなのです。

太陽は未だ上らず、時々鶏が
かん高い叫びを擧げる外は、物音
一つ聞えませんが、でも、あたりは
もうすっかり明いのです。都では
そろ／＼あの大人國の狂人の唸聲
でもあるかの様な騒がしさが始
まる頃ですのに、さすが郊外の朝は
静かです。その静けさの中を蜘蛛
は見廻し見渡しました。

「や、素敵だ。」
眼の下に、朝露を含んだチュー
リップやヒヤシンスや、その他眼
の覺める様な色とりどりの花が、
多少未だ夜氣の爲にしほれてはあ
りましたが、それでも、もう嬉し氣
に朝風に挨拶をしてゐる大きな花

壇があつたのです。蜘蛛はそれだ
けですつかり此の新しいお家が氣
に入つて了つて、もし皆さんのや
うに童謡でも歌へる事が出来たな
らば、大きな聲で歌ひ出してすつ
たであらう程有頂天になつて了つ
たのでした。生れてから昨日まで、
蜘蛛は森の小藪から一步も外に出
た事がなかつたのです。

太陽が、小鳥の音に迎へられて、
その寢床から起出しました。五月の
朝は、蜘蛛の新しい銀色の釣床と
共に輝き始めました。そこで、蜘
蛛は、昨夜の中にかかつた羽蟲で
軽い朝御飯を濟ませる爲に、朝の
食卓に向ひました。

郊外の家は眼覚めました。窓が新しい空気を流し込むために開けられて、そこから、頬の赤い、芋のやうに肥つたおさんどんの顔が現れました。

「あら、蜘蛛があんな所へ巣をかけて。」おさんは顔をしかめ乍ら呟きました。「今朝はあれを拂ひ落すつていふ餘計な役が一つ殖えちまつた。」

一時間ばかり経つた時に、蜘蛛は、生れてから始めての恐ろしさを味ひました。振上げられた箒が風を切つて打落されたと思ふと、昨夜、せつせと拵へた新しいお家もろ共、大地にたたき落されたのです。

「ああ痛い……」暫くしてから、

蜘蛛は腰をさすり乍ら起き上りました。「だが、死ななかつただけ幸だ。」

蜘蛛はそこで始めて、死ぬといふ事はまあ何て恐ろしい事だらうと、しみじみと考へました。

やがて蜘蛛は、大切なお家はとうなつたらうと、見上げました。美しい網の目を通して、淺黄色の五月の空が覗ける筈のものを、蜘蛛にとつて情なかつた事には、空は何物にも遮られずに、いきなり頭の上に擴つて居りました。

「何てひどい事をする奴だ。」だが、びつこを引引き松の幹を上つて行つて、又、元の所に、お家を拵へるより外に仕様が有りませんでした。

蜘蛛は休息んでゐました。二度目に出来上つたお家の真中で、休息んでゐました。丁度その時でした。風が稍強くそのお家を揺つたのです。蜘蛛はドキツとして、夢中で松の枝へ走つて行きました。松葉の蔭に身をかくしてから、ここはお家の方を、覗いて見ました。無論そこには何の變つた事もなかつたのです。

「何だ風か！」

蜘蛛は苦笑ひをしました。生命といふものがどんなに惜しいものか、死ぬといふ事がどんなに恐ろしいものか、そして又、自分といふものがどんなに可愛いものかを、――蔭蔭に育つて來た蜘蛛は今日といふ今日始めて、知つたの

でありました。

三

朝のうちは、素晴らしいお天気だつたのが、お午になる頃にはすっかり曇つて了ひました。そのドンヨリとした空へ、何處か遠くの工場の汽笛が、けだるさうに響いて、十二時を知らせました。

お腹の空つた蜘蛛にとつては、お跳へ向きにその時小さな紋白蝶が、粘りつこい網に引つかかりました。

「しめた。御馳走だ。」蜘蛛は、隠れてゐた松葉の蔭から出て、スルスルと蝶の所へ走つ



て行きました。

ところが、その二三寸手前で、蜘蛛はハツと立ちすくんで了つたのです。蝶は未だ生きてゐました。そしてどうかして、その恐ろしい罠から逃れ出ようとして、一生懸命にもがいてゐました。昨日までは、そんな事は、蜘蛛にとつて何でもない事でありました。でも、今日は違ひます。

「此奴もやつぱり死に度くないんだ。それであんなに一生懸命になつてゐるんだ。」

蜘蛛は棒立になつたまゝ、考へこんで了つたのです。蝶がもかく度にお家の糸がブルブルと氣味悪くゆすぶられました。蜘蛛は何だかゾツとしました。

『とても俺には食べられない。』

蜘蛛はグルリと後を向くと、一散に又松葉の蔭へ走り歸りました。そこで蜘蛛は眼をつぶりました。『助けてやり度くても、あれへ引つかかつちまつたのは、俺にもどうにもならないのでナア。』

その時、人間のお家のお座敷では、お父さんとお母さんとそれから小さな男の子とが、牛鍋で御飯を食べてゐました。おいしさうに食べてゐました。窓から流れ出る香までが、大變においしさうでありました。けれども、その香が、もとは牧場で遊んでゐた牛の肉の香だといふ事を蜘蛛が知つてゐる筈はありませんでした。

三時頃になつて細糸の様な雨が

しとくと降つて來た頃には、蜘蛛のお腹はもうペコペコでした。

蝶はもう、もがき疲れて死んでゐました。蝶のおいしさうな香が時々蜘蛛の鼻をついて、そのお腹をグーグーと鳴らしました。たうとう我慢がしきれなくなつた蜘蛛はお午からつぶり通しの眼を開けました。すると、銀色の釣床に、真珠を並べた様に雨の滴が光つてゐるのが眼に入りました。

『何てきれいだらう。こんなきれいなものを、どうして人間はたたく落したりなんかするんだらう。』その時蜘蛛はフト目の下を見ました。小雨に濡れ乍ら、真赤なチューリップに載れてゐる先刻のとは別の蝶々の姿。それはまあどん

なに美しく蜘蛛の眼に映つた事でしたらう。

『こんなにきれいなものを、俺はまだ食べようとしてゐるんぢやないか。人間がきれいな俺の家をたたきこはすのよりもつとひどいやないか。』

蜘蛛は一寸、釣床の上に冷くひつかかつた哀れな蝶の姿に眼を移しました。が慌て、眼をつぶつてペコペコのお腹を手足でグツとおさへつけると、そのままデツとして了ひました。

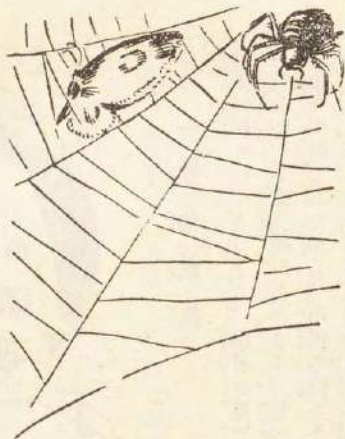
四

入相の鐘が、蜘蛛の空つぽのお腹へ痛い程響きました。で、蜘蛛は眼を開きました。もうすつかり

夕方になつてゐました。お腹の皮がもう少しで背中へくつついて了ひさうでした。二度目の鐘が響いて來た時には、蜘蛛はフラフラと

『駄目だ。このままでは鐘が鳴り終へる頃には死んぢまふだらう。』生命は大切でした。蜘蛛は松葉を嚙つて見ました。けれども、苦

つかかつてゐる蝶の方へ向つて、蜘蛛はよろめき乍ら歩き始めました。歩き乍ら蜘蛛は、生き物を食べなければ、生きて行かない身



眩暈を感じて、危く地べたへ落ちさうになりました。三度目の鐘が響いて來た時には、眼が霞んで了ひました。

くてとても食べられたものではありませんでした。で、蜘蛛はたうとう決心しました。フラフラと立上つて、それから、冷くなつてひ

をつくづく悲しいものに思つてゐました。五月雨は未だ降りつづけてゐました。(をばり)

(作者住所 東京府下駒澤町上馬引九四六)



深山の怪鳥

山山勝清

絵 沙 麗 双 二

九〇

一、先住民族

山深い村へ行くと、よく、山男を見たとか山女に會つたとかいふ老人達があります。私の郷里も、そんな山奥の村でしたから、小供の時そうした話を聞いて、どんなにおそろしく、不思議に思つたか知れません。しかし、だん／＼成長して學問をするにつけ、山女や山男のことも、ほかのばけものと同じやうに、里人の迷信だと考へてしまひました。ところが、つい近頃になつて、世界でも有名な學

者である柳田國男先生の研究で、この山男や山女はほんとうに居たものだといふことがわかりました。先生の研究によると、その山人達は、決して化けものではなく、私達の祖先である大和民族の前に、この日本國に棲んでゐた先住民族の一部だといふことです。みなさん御存じでせう。神武天皇さまや日本武尊さまが、わるものを退治なされた話を。さうした悪者どもは、私達の先祖が、まだ高天原といふ遠い國に居た時分から、日本國に棲んでゐた人種であります。その人種が、勇敢な私達の先祖に攻め立

てられて、ある者は滅びてしまひ、ある者は北へ北へと追ひやられました。今北海道に棲んでゐるアイヌはその子孫であります。がその一部は、奥山へ逃げこんで、全く、私達大和民族の目からかくれ、獸の世界へは入つてしまひました。そして、時たま、森の中で會ふことがあつても化物の一つとして、又少し學問のある人達は、これを迷信として、生きた人間と考へるものはなくなりました。

實は、最近まで、私もその一人だつたのですが、ある日、柳田先生にお目にかつた時、何かの話のついでに、

『私の叔父がね、山女に遭つたと言つてゐますがね。』と話したら、

『ふん、そりや面白い。詳しく話してくれ給へ。』斯う言つて先生は手帳を出して筆記する準備をなされました。私は驚いてさへぎりました。

『でも先生、山女といふのは私の郷里には前からある迷信ですから信用はおけませんよ。』

『いや、さうでない。』先生は學者らしいおごそかな顔で、前に述べたやうな先住民族のことをお話しになりました。

『では……』と言ふので、私は、小供の時から幾度となく聞かされた叔父の直話を思ひ出しながら語り出しました。

二、怪鳥 怪獸

その頃、私の父はアンチモニーの鐵山を經營してゐました。場所は熊本縣球磨郡湯前村の山奥で、村里から三里、肥後と日向の分水嶺となつてゐる市房山の峰つゞき、仁原山の中腹でした。

鐵山といふと、直ぐ、とつこつたる禿山を思ひ出すのですが、こゝはどうして、禿山どころか、丈餘の大木が生ひしがり、まだ斧を入れたことがない大森林でした。これは鐵山がまだ小規模だつたせいでもありますが、何しろ、斯うした大森林になれば、樹木の精力の方が何よりも強くて、少々の鐵毒位

では枯れるやうなことはないのです。こゝは全く樹木が支配してゐる王國でした。只不思議なことにこの森林の中に古い三つの墓があつたことです。これはおそらく、數百年の昔、父と同じやうに、金を堀るためにこの山には入りこんだ人のお墓でせう。さう言へば、形ばかりの鑛道ものこつてゐました。アンチモニーの鑛石は、ビカ／＼と銀色に光つてゐるので、この鑛石から銀でもつくり出さうと考へたものでせう。しかし、その人達は、こゝの大自然のために打ち負かされました。そして遂に、こゝで命をおとしたものと思はれます。

さて、法律學校を出たばかりの叔父の原田は、畑ちがひではあつたが、このアンチモニー鑛山の鑛長として、三四十名の鑛夫や事務員などゝ、この山に暮してゐました。

晝は、全員を指揮して、地下の富を堀り出すために、勇ましく働きました。小規模ながら、製練所の煙突からは高く煙が吐き出されて、近くの大樹の葉

を黄色く染めました。鶴はしの音、人々のかけ聲は小鳥達を追ひ、時たま爆發するダイナマイトは、全山にこだまして、さしもの老樹達をおのゝかせました。

しかし、夜になつて、空に輝いた太陽が、カンテラの灯となり、闇が四方から押し寄せてくる頃になると、大自然は再び人間共を征服して樹木の王國となるのでした。

大方、鳥の一種だらうと、坑夫達が鐘鳥と呼んでゐる不思議な動物の啼き聲は、あたかも遠寺の鐘のやうに、

『モツカ／＼グワアーン……』と鳴り響きます。

闇の底でも歩くやうな、かすかな足音が家の周囲にせまつて來ます。これは恐らく、血に餓えた山犬か、いたずら好きな山猿でせう。しかし、朝になつて、家の周囲に大きな足跡を見出すことがありません。熊が近くに現はれたのです。網をさくやうな聲を立て、風をきつて樹木から樹木と鳥のやうに飛び

廻るのは、顔としつぽは狸

に似、前足と後足との間

に羽根のやうな膜が

あるモマと呼ぶけも

のです。が伊衛門と

いふ坑夫が見たとい

ふモマは、からだも

普通の倍で、鳥のや

うな羽根が生へてゐ

たといふことです。

時たま、岩石を山の

上から轉がしたやうな荒い

音を立て、馳け下るのは、水をの

みに谷間に來る猪や鹿でした。家の

壁には毒をもつた山イモリが氣味悪く這

ひまはります。

斯うした動物の氣配で、靜なるべき深山の夜

は、氣味悪く騒ぎ立つのでした。都會に棲んでゐる



ものにとつては、まるで嘘のやうな話ですが、今から廿年も前まで、球磨の深山は、全く、アフリカの蠻地に行つたやうな動物の世界でした。

ですから、この深山の人は、見通しのきく月夜の晩の他、なるだけ外に出ることをさしひかへてゐました。そして家の中には、カンテラの火をかきたて、夏でも圍爐裡には、一晩ぢゆうほだ火をかきたて、怪獸の襲撃をふせいでゐました。尤も夏と言つてもこんな深山の夜は、うすら寒く感ずるのです。

ところが或る夜のことでした！

三、不思議な足跡

ぐつすり眠つてゐた叔父は、はつと目をさました。冷い手がヒヤリと顔をなでたのです。目を開けて見ると、薪をつぐのを忘れたものか、部屋の中は眞の闇夜です。

「シュウ／＼」なんとも言へぬかすかな聲が聞へる。豪膽な叔父ではあるが、目をさました瞬間に

彼の血汐は氷つてしまひました。この時のことを思ひ出して、叔父は斯う辯解して居ります。

人間といふやつは、全く意久地がないものだ。晝間どんなに強さうに言つてゐても、夜になると、全くの臆病者になつて終う。しかし、これは仕様のないことだ。なせと言つて、——すつと大昔、まだ人間が火といふものを持たず、獸を狩つて暮してゐた時分から傳はつてゐる氣持ちだから。晝間は人間が獸を狩るが、夜になると、獸が人間を狩つたのだ。だから人間は何よりも夜が恐ろしかつた。その怖れる心が、こんな深い山に暮してゐると、人間の心によみがへつてくるので、夜になると、實際ゐる猛獸のみならず、いろ／＼の化物の姿が頭の中に湧き出てくる。そして、いかに知慧で心に勇氣をつけても臆病者になつて終うのだ。俺達が、ほんとうに、先祖の恐怖心からのがれ出るのは、なか／＼容易なことではない。」と。

さて叔父は、聲を立てることも出来ないで、息を



こらして頭から布團をひつかぶりました。すると、隣に寝てゐた、小使の佐市少年も、いそがしく布團をかむる氣配がします。この二人の他に、この部屋には五人の事務員が寝てゐましたが、或者は、黙つて、或者は小さく叫んで、みんな布團をひつかむつたらしい、誰一人として怒鳴るものもなければ、起きあがるものはない。何ものとも知れぬ怪物は、しきりにシユウ／＼つぶやきながら、部屋を歩きまはるのでした。しかも、それは一人や二人ではない。叔父は死んだやうな氣持ちになつて息を殺してゐました。そのうちに、事務所の上にそびへてゐる天狗瀧（水は流れない斷崖）からいつもの音楽が聞へてきました。それは全く笛、しちりきをあはせたやうな妙なる音楽でした。風のためにおこるものと思はれませんが、坑夫達は、白髪の人達がかねでるものだとやつてゐました。そして、毎夜、この音楽が聞える時分になると、ほんのりと夜が明けかかるのでした。

を消したまゝ床には入りました。はじめのうちは眠らないつもりでゐたのですが、晝間の疲れで、ついウト／＼したかと思ふと、また、ヒヤリと顔をなでられました。晝間の決心では、いきなりひつとらへてやる筈でしたが、どうしたことか今夜も、手が出ないのは勿論のこと、聲も立てないで夜具の中にもぐりこみました。他の事務員達もおして知るべしです。

夜が明けると元氣な叔父。

「鑛長さんも口程にはありませんね。」と事務員達から言はれて平氣な顔。

「なあに、正體がわかれば、それでいゝのだ。早く家のまはりをしらべて見やう。」と言つて、外へ馳け出しました。

そして家のまはりを見ると、にはかに叔父は笑ひ出しました。

「はつはつは……なあんだ、化物の正體は猿ではないか、見ろ、この足跡を。」なるほど砂の上には一ぱ

叔父は、やつと、ほつとして、布團から顔を出す、もう怪物の姿はなく、高窓から夜あけの光が、かすかに射しこんでゐました。同宿のものはと見ると、みんなまだ頭から布團をかぶつたまゝです。夜が明けたと知ると現金なもので、叔父は、いつもの元氣者にかへつて、カラ／＼と笑ひ出しました。

「おい、みんな頭を出せ……なんで頭をひつこめてるんだ、臆病者奴が……」この聲にやつと人心地ついた人々は、ほつとした顔で、

「ああ、驚いた……さつき化物が来て、私の顔をなでましたよ。」と叫んで起きあがりました。

もとより、誰一人として、その化物の正體を知つてゐるものはありません。坑夫達に聞いてもわかりません。が、可笑しいのは叔父です。あの時は、聲も立てられなかつた癖に、晝になると、全くの勇士に變つて今夜こそ正體を見とせよと言つて威張り出しました。そして、夜、やすむ前に、家の周囲にやはらかい砂をふりまかせ、怖いのをこらへて、火

いに猿の足型が残つてゐるのです。と、事務員の一人が、變な聲で叫びました。

「鑛長さん。こゝに妙な足跡があります。大きな人の足型ですよ。」

「ふむ、こりやおかしい……」叔父も、その足跡を見て叫びました。それは普通の人間の足より余程大きなはだしの足型です。

「さて／＼、なるほど……して見れば、猿のほかにこの家を覗きこんだ者がゐるんだね、この足では、余程大きな代物だから、とても高窓からは入る筈はない。この山に恐ろしい猿使いが棲んでゐるのかね。そして俺達をひつさるひに来るのかね……ブル／＼こりやいけねえ。おい、今夜から戸締りを厳重にしないではいけな。あの高窓も大工に言ひつけて塞がなくては駄目だ！」

さすがの叔父も、晝のうちから、おびへこんで、早速家の修繕をはじめました。

四、たすけてくれつ！

さあ、この足跡が発見されて以来、今までも増して、人々はおちけこんでしまひました。小便に出るにもびく／＼ものです。ところが生憎なもので、ある月の夜、叔父は一人で製練所から事務所へ歸らねばならぬ破目になつてしまひました。その理由は、何とも言つて聞かせませんでした。元來、強がり屋のことですから、坑夫がおくつて行くといふのを、『なあに一人で結構だ。』位のことと斷つてしまつたのでせう。又、こんなに人々が夜をおそれては、仕事に差しつかへることもあるので、みんなに元氣をつけるためだつたかも知れません。

お化けでも出るには都合のいゝ朧月夜でした。叔父は、鼻唄を歌ひながら、中頃まで參りました。事務所と製練所の距離は五町ばかりあつたのです。そこは恰度、山壁になつてゐる小高いところでした。そこまで來た時、叔父は、ふとタヲの上の方の雜

木の中を押しわけて出てくるやうなカサ／＼といふ音を聞きました。内心ビク／＼してゐた叔父は、はつと思つて、樹陰に身をかくして、息をこらしめました。その音は次第に近づいて參ります。もう直ぐそばまで……

目をこらして、じつと音する方を見凝めてゐるとどうでせう。小柴の間から、にゆつと姿を見せたのは、全身真裸な三人の女ではありませんか。女と言へば優しいが、くしけづらない黒髪は、足もとにとどくほど長く垂らし、月の光にも真赤に見へる唇は、恰も耳のあたりまで裂けてゐるやうに物すごく見へました。乳房はあくまで大きい……さては昔話にきいた——乳房で人を包んで殺すやま／＼ではなからうか。とに角、われ／＼人間社會の生き物ではない——斯う考へると叔父は、クギづけにあつたやうに立ちすくんでしまひました。

その女達は、二三間前まで來て、互に顔を見合せ、わからぬ言葉でつぶやきながら、ヘラヘラと笑ひま

した。その物凄さ！

と女達は、恰も始めから叔父がかくれてゐるのを知つてゐたかのやうに、すつと、かくれてゐる大木に近づきました。そして、恐れおのゝいてゐる叔父の手を兩方からびしりと握りました。

「ひー！」

叔父は思はず聲を立てました。女達も大聲に叫びながら、叔父を引き立てやうとします。叔父はもう死者狂ひです。

「たすけてくれつ！ 誰か來てくれつ！」ありとあらゆる力をこめて叫びつゞけました。が、いかにせん、女達の力は強い、事務所までは二三町もある。忽ち叔父は、山の上の方へ一町程も引き立てられませんでした。

が幸なことに、叔父の叫び聲は、まだ寝もやらず圍爐裡の傍で話しこんでゐた坑夫達の耳に達しました。

「それつー」

といふので、數十人の坑夫達は手に手にほだ火やカンテラを打ち振りながら駆けのぼつて來ました。これ等の火を見るや、何と思つたか、女達は、とにかくに恐怖の叫び聲をあげて、叔父の手を放し、さつさと、山の中にかくれて終ひました。坑夫達が、やつと、その場に馳けつけた時、叔父は氣を失つて倒れてゐました。

これだけ話すと、柳田先生は言はれました。

『これはなか／＼面白かつた。その女達はたしかに山女に相違ない。だが君の叔父さんは幸だつたよ。一體に九州の南部山脈中の先住民族達は氣持が優しいやうだ。この場合だつて、決して叔父さんへ危害を加へるつもりはなかつたらしい。只遊び友達として、どこかへ連れて行く氣だつたらう。これが若し、關東から東北にかけての山脈中の山人達であつたら、叔父さんの命はなかつたかも知れぬ。』

(をはり)

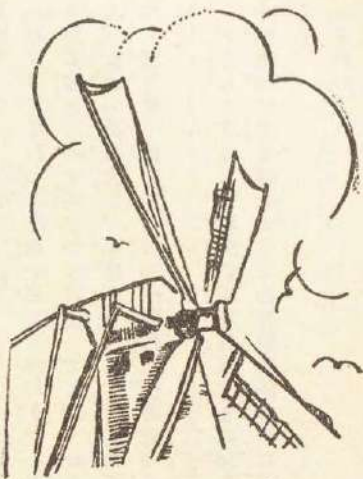
世界名作物語

英國 ウィグ 原作

フランダーズの少年

三宅 房子

岩岡とも 枝畫



第一回 發端

一、少年と犬

ネルロとパトラッシュ。この二人はお互にさびしい身の上でした。二人とも此の世の中には手頼るものもない、取り残された者同志ですから、仲のよい友達であることはいふまでもありません。いや、仲のよいといふ位な言葉では云ひあらはせない程です。恐らく兄

弟でもこれ程仲のよい兄弟はないでせう。しかも、二人といつても、それが人間同志ではないのです。

ネルロは、フランスとベルギーの境を流れるムーズ河のほとり、アルテンといふ田舎町で生れた少年です。そしてパトラッシュは、フランダースで産れた大きな犬でした。

この二人は、年も同じでしたが、一方はまだ幼い少年であるのに、一方はもう老大でした。いつも離れずに一しよに暮して来ました

が、二人とも孤兒で、同じ人の手で貧しいながらも命だけはつないで来ました。小さな村はづれの、小さな築小屋が二人の家でした。こゝは、ベルギーの首府アントワープから一里半ばかり離れたフランダースの村です。あたり一面に麥畑や牧場が廣々とひろがつてあります。そして、その平野を貫く大きな運河の岸には、ボブラやハンプキの長い並木がそよ／＼と吹く風にも枝なりました。

この村は家といつては僅かに二十軒ばかりですが、どゝ家も、さうやう根を美しい色に塗つてあるので、太陽が反射する時の美しさはまた格別です。

風車が村の中央、昔むした土手の上に立つてあります。

教會堂が、風車に向きあつて、ボツボツと立つてあります。そこには先の尖つ、細長い塔が聳へ、あて、静かに悲しげな鐘の音を響かせてあります。

ネルロ少年とパトラッシュとは、毎日この鐘の音を聞きながら、村はづれの小屋の中で一しよに暮して来たのでした。

二、ネルロの身の上

小屋の主人といふのは、大層年とつたひどい貧乏のお爺さんでした。名はジエハン・ダアズといつて、以前は軍人で、ナポレオンがベルギーへ押し寄せて来た時には、戦争に出たこともありましたが、その戦争で負傷をして、一川びつこなひやうなことになるてしまつたのです。

丁度ジエハン爺さんが八十歳の時、爺さん



の娘が死にました。そして、二歳になつたばかりの男の子を、忘れ形見として爺さんの手に残して行きました。自分の暮しだけでさへ

やつとの爺さんでしたが、不平一ついふでもなく、育て上げたのが、このネルロ少年でした。間もなく、ネルロは可愛くなつて、爺さん

と一しよに働いたりして、慰めてくれました。そこでこの老ひれた爺さんと孫とは、粗末な小屋の中に暮してゐても、お互に満足して行くことが出来たのでした。

とはいふもの、ジエハン爺さんの貧乏は

本當にひどいものでした。全く食べるものもない日が幾度もありました。また、たとへどんなに間のい、時でも、お腹一ぱいに食べられるといふやうなことはありませんでした。ですから、もしも、お腹一ぱいに食べられぬ事があつたら、それこそ二人にとっては天國へでも行つた程の喜びです。

た事でせう。

パトラッシュは、この二人にとつては、無くてならないものでした。この犬一匹が二人にとつては、金庫のやうなものでした。その上、稼人でもあるし、友達でもあるし、憎めたり、勵したり、してくれるものでありまし

た。もしも、パトラッシュが死ぬか逃げ出ししかしたなら、おそらくジェン爺さんもネロ少年も、たゞ地に倒れて、そのまゝ死んで了ふより外なかつたでせう。

ジェン爺さんは、老ひばれで、片輪者です。ネロはまだほんの子供です。そしてパトラッシュはこの片輪と子供の間犬だといふ事が考へても、ほゞ想像がつくでありませう。フランダーズの犬は、毛が黄色くて、頭も四本の脚も大きく、耳は狼のやうにぴんと立つてゐます。何代も親づりの荒い労働で鍛へ上げた丈夫な脚は、何れも外側に向つて開いてふんばつてゐます。パトラッシュはかういふ種族大で、特に何百年もの間、ラッダースで、親代々のばげしい労働に堪へ忍んで来た維りつけない犬です。生きてゐる

間は、堪えず薪を曳くために、擦傷が出来て、肉が張ちけるやうになつて、そして死ぬ時は、石のごころ／＼した街中で、血が吐いて倒れるといふ悲しい運命を持つた犬なのでした。

三、パトラッシュの生ひ立ち

パトラッシュは一人前の犬となる前から、もう荷車を曳く擦傷の痛さと、頸輪の苦しみとを嘗めてゐました。生れて、まだ一年一ヶ月もたないのに、金物商人の飼犬となつて、ひつぱり殺され

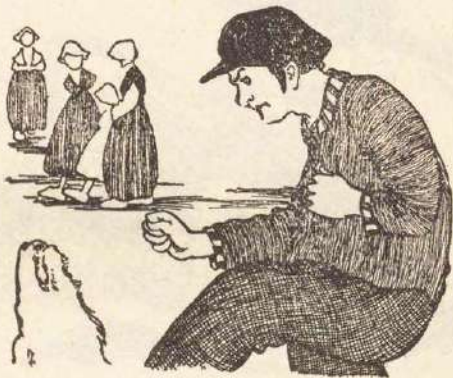
ました。金物屋の主人といふのは、飲んだくれで、残忍な男でしたから、パトラッシュは實にみじめなものでした。全く地獄のやうな苦しみを受けたのでした。荷車には、山のやうに鍋、鐵皿、鐵瓶、バケツ、その外いろいろの陶器類や、眞鍮物や銅ものなどを積んで、それをパトラッシュはありつづけのおな出で曳けと囁まれるのでした。そのくせ、主人は、のりくりりとしてゐて、黒い煙管から煙を吹きながら、道ばたの酒店とカフェー

とには一軒のこゝろを寄つ込むのです。幸か不幸か、パトラッシュには強い力がありました。もと／＼かういふ残酷な労働をするやうに生れてゐて、長い間それに馴らされて來てゐます。これ位の労働で參つてしまふやうな事はありません。いつも重い荷を曳かせられて、皮の割ける程に打たれながら、しかも始終お腹はへりつめて暮して來たのでした。

かういふ苦しみ——それがパトラッシュが主人から貰ふ唯一つのお給金であつたのです。パトラッシュは、二年間もこの残酷な主人のところで暮してゐました。しかし、ある日のこと、パトラッシュは毎日の通りに、重い荷車を曳きつて、町へ向つて走り出しました。その町といふのは、世界に有名な重工業家ルーベンスの生れた町で、そこへ通ずる眞直ぐな、巨きの立つ氣持の悪い道を、今やパトラッシュは駆けつゝゐたのでした。

夏の眞最中です。その暑さたらありません。パトラッシュの車には、金物や陶器、山のやうに積まれてゐました。しかし、主人の

もう死ぬばかりです。身動きもしません。金物屋は、この時、彼獨特の薬を出しました。——それは眠ることです。眠ることに



です。煙の棒でガント攪りつけて氣付けをするのでした。この眠ること、囁めること、煙の棒、——これがパトラッシュの眞お眠

でもあり、寝てもあつたのです。

しかし、今度といふ今度は、どんなに攪つても、囁つても、とう／＼パトラッシュは氣が付きませんでした。たゞ倒れたまゝで、もう死んだやうになつてゐました。

暫くたちました。金物屋はとう／＼眞目だとわかつたので、

「こんな野郎の死骸は、皮がひッべがして手袋にする外の役には立ちはしれえ。畜生！」とぶつ／＼獨り言をいひながら、棍棒に刺んであつた革紐をときました。それからポン！と力一ぱいパトラッシュの死骸を蹴飛ばしました。パトラッシュはころ／＼と草の茂つた中に落ちこみました。

「このくたばり犬め！ このまゝ、鐵にでもさされる。でなきや馬にでも喰はれろ！」金物屋はさういふ／＼とさういふ、しかも囁るやうにいつて、それから自分で車を曳きつて歩き出しました。

その日の街道は大變に賑つてゐました。向うのルーベンスの町で、お祭のある前日でしたから、人勢の人が往來してゐます。歩くもの、馬に乗つて行くもの、或は馬車に乗つて行

くものなどが、織るやうになつて、かやく
町へ向つて行きます。皆なうれしうに話し
ながら、きます。

さういふ人達の中には倒れた犬の姿を見た者もあつたでせうが、なかゞ死んだ犬の正体です。——それが此の地方の人達に何でめづらしいでせう。世界に何處へ行つたつて、よくある事なんです。

しばらくすると、祭に呼ばれてゐる人達
の中に立ちつて、腰のかんだ、よぼくの
破い爺さんがやつて來ました。こ
の爺さんは祭に行くやうな服装もし
てゐません。貧乏きいぼろなままと
つて、塵埃の中を、黙りこんだまゝ
人にもまれて歩いて行くのでした。

この爺さんかバトラウシユを見つけたので、爺さんは行く／＼からよけて、立止つて、不思議な能いつきなしてちつと犬の死骸を見つめました。いよいよ氣になつたらしく、爺さんはとう／＼泥濘の方まで下りて行つて、草の繁つた中にかぐんで、犬の死骸をつく／＼と見据ゑました。



爺ぢいさんの傍そばには三歳みつさいばかりの、パテ色いろの類かたをした、髪かみの毛けの美うつくしい、黒くろい眸ひとみをした子供こどもが草くさないぢりながら立たつてゐました。少年せうねんは

大變な事件にといふやうに、此のあはれな犬
をちつと見つめてゐました。

四、愛の家

ジエハン爺さんは、大の死骸を介抱して、そこから近い車の中の自分の小居へと運びこみました。大の倒れたのは、もと／＼暑さで喉の渇きと、熱との爲めに一時眼がくらんだのですから、日服にやすませて置くこと、間もなく元氣に恢復して、よろ／＼しながらもかんちやうな四足なぐつとふんばつて、立ち上らうとさへしました。

それから、何週間かの後、パトラッシュは役にも立たず、力もなく、全くの病人となつてしまつて、死ぬのではないかと思はれました。しかし、この間、パトラッシュは腹鳴られることもなく、痛い鞭を受けることもありませんでした。受けるものは、可愛い、少年のいたはる私語と、爺さんの慰めの言うばかりでした。

枯草をうづたかく積んだ小屋の隅に、犬の寝床が出来ました。夜になると、爺さんと孫

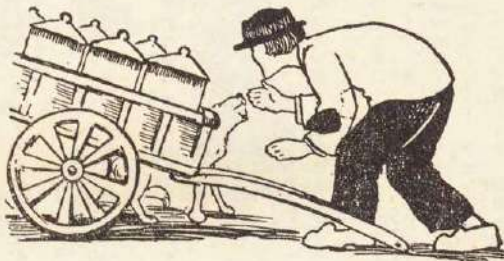
とは、ちつと耳を澄して、大々呼吸をききま
した。呼吸さへ聞えたら、大丈夫だと安心
するのでした。犬も、今で、漸く健康を恢
復して、覺えないながらも大膽を出して吠え
るやうになりました。

と、もう爺さんも孫も眼を細くして喜びました。嬉し涙さへ流しました。

殊に夢中になつて喜んだのは、ネル、ロ少年で
した。すぐと野菊の花を集め、首輪をつくつ
て、それをパトラッシュの首にかけました。
さうして、可愛い、赤い唇で犬を接吻する
のでした。

爺さんと孫の親切な心は、動物であるバ
ラツシユの心にもしみ／＼とわかつて來まし
た。バラツシユは犬です。しかし、犬では
あるが、この二人の恩人に忠義をつくしたい
といふ感激の心が燃え立つて來ました。パト
ラツシユは、毎日、爺さんと孫のする事の意
味を讀まうとして、ちつ／＼と石のやうになつて
そのがつけしりした額付で、灰色の眼を澄して
ゐました。

このジエハン爺さんの仕事といふのは、小



さな手車。曳いて、跛^{びこ}ひきく外^{そと}歩き廻^{まわ}ることでした。それは毎日牛乳^{まいにちぎゅうにゅう}を運^{はこ}ぶため、近所^{きんじょう}の牛や羊^{ひつじ}を持^もつて樂^{らく}に暮^くしてゐる人

達たちに頼たのまれて、アントワープまろざりの町にうはこへ牛乳運ぎび
に行いくことでした。

村人達はジェハン爺さんか可哀さうに思つて、少しばかりの仕事なさせてやゝめたのです。もとゝ正直なジェハン爺さんのことですから、牛乳運ばせるの、此の爺さんに限るといはれ、村にあても知の番や、牛小屋の番や、鶏小屋の番など、いろいろと頼まれしました。

しかし、もう爺さんに仕事が出来ない日ひが來ました。何しろ八十三歳といふ、老人になつたのです。アントワーアの町へ行くのにも、三里からの道な歩かなければならないのです。

バトラーツシユは、ジエハン爺さんが運んで
行く牛乳罐をちつと見てゐました。それは
バトラーツシユが元氣を恢復したはじめての
日でした。

何を思つたが、次の日の朝になると、パト
ラッシュは爺さんがまだ車に手をかけない先
に起きて行つて、ちやんと車の提棒の間に
自分の身體を持つて行つて『自分には車を曳
く力も心掛けもあります、どうか私に曳かせ
下さい』といふやうな身振りをしました。

しかし、ジエハン爺さんは、承知しません

でした。車に犬を縛りつけて労働させるのは、神様が犬を造られたお恵みでないかと考へてゐるので、どうしてもさうせなかつたのです。

けれども、バトラッシュの方でもそれを承知してませんでした。自分の身体を棍棒に縛つてくれないと悟ると、今度は齒でくはへてまでも曳いて行かうとしました。で、たう／＼流石のジェハン爺さんも根負けがしてしまひました。

自分が救つた恩を感じてゐるバトラッシュのけなげな心に、我を折つたためでもありません。

そこで、ジェハン爺さんは、犬が挽けるやうに車を作り直して、爺さんの命のある限り毎朝その車をバトラッシュが曳くことになりました。

五、その後の三年間

やがて、その年も冬になりました。ジェハン爺さんは、あの祭りの日に死にかゝつたバトラッシュを助けた事、有難い思はずにはあらねばなりました。といふのは、爺さんは年

と共にますます老ひぼれて、弱つて行つたからです。もし、この勇壯なバトラッシュがゐて、働いてくれなかつたら、とても寒い雪の道を、車を曳いて行くことは出来なかつたでせう。

しかし、バトラッシュにとつては、かうして働くことが天國のやうな喜びだつたのです。

あの無慈悲な昔の主人に、山のやうに荷物満載で重い荷車を曳かせられて、一足ごとにびし／＼膝で打たれることを思ふと、牛乳罐を曳いて行くことなど、何んでもありませんでした。強う楽しみな位でした。まして親切なお爺さんが何時もそばについてゐてくれて、やさしく抱きしめてくれたり、親切な言葉をかけてくれたりするのでした。

その上、一層よい事には、一日の仕事は三時間か四時間で済んでしまつて、あとは自由な時間になるのです。身体を投げ出さうが、日向ぼっこして眠らうが、野原を駆け廻らうが、或は六千個と一しよに遊ぶが、友達の大を助けやうが、まつたくのしほ放しなのです。——バトラッシュは本當に満足して

一〇六

それから二三年経ちました。ジェハン爺さんは、それまで始終びつこの爲めに働んだ上に、新にレウマチスにかゝつて、大變に身體が痺れるやうになり、もうこの上は車について出かけることが出来なくなつてしまひました。

この時、六歳になつた少年ネルロは、それまで幾度となくお爺さんに連れられて、アントリブの町の様子を知り抜いてゐましたが、お爺さんの代りに車について行つて牛乳を賣つて、代金を集め、それをそれ／＼牧場の主人に届けることになりました。それが如何にも一生懸命にやうなもので、それが見る人は、誰でも感心してゐました。

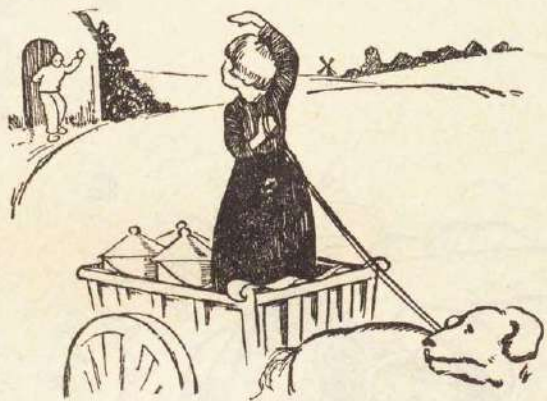
ネルロは本當に、美しい少年でした。黒みがかつた髪としたやさいい眸をしてゐます。頬は花／＼咲いたやうに輝いてゐます。綺麗な髪は、長く襟元のあたりまで垂れて房々としてゐます。

ですから、この少年と牛乳車と犬とを畫にした畫家が幾人も出て來ました。

青い色をした牛乳車には銀鍍の轡が輝いてゐます。それを曳くのは大きな黒色の猛犬です。鈴をつけた棍棒が輪のまわりのたびに、ちりん／＼と面白く鳴ります。そして、それに附添つてゐるのは可憐な美少年です。小さな素足に大きな木靴を穿いて、ルーベンスの名畫から抜け出たかと思はれるやうな無邪氣な少年の顔が漂として氣持ちよく見えました。畫家達がきそつて描いたのも無理がありません。

ネルロ少年とバトラッシュは、二人ともかうして楽しい仕事を覺え込んでしまつたので、夏になつてジェハン爺さんの身體がよくなつても、もう爺さん自身で出かけて行く必要もなくなりました。爺さんは日當りのい、小屋の入口のところに腰をかけて、孫と犬とが畑の木戸をくぐつて出て行くのを見送つてゐました。

やがて二人の姿が消えると、う／＼と絶えてしまふのでした。時計が三時を打ちます。



と、ジェハン爺さんは起きあがつて、孫と

犬の蹄のな表へ出て待ちます。バトラッシュは歸ると嬉しうに一躍高く跳ねます。それから首輪をとかれて自由の身になれます。

ネルロはその日の仕事の賃銀を得意に計算します。

それから皆で描つて、パンに牛乳にスープを添へて食事をへるのでした。

外の廣々とした平野には、夕日の影が長く曳いてゐます。

夕陽が夢のやうに立つてゐる教會堂の塔を、ほかすやうに包んでゐます。

ジェハン爺さんはお祈りをします。皆なは一しよに平和に寢床に入ります。

かういふ有様で幾日も過ぎました。また幾年が経ちました。

ネルロとバトラッシュの生活は相變らず幸福で、無邪氣で、健康でありました。

茫々草

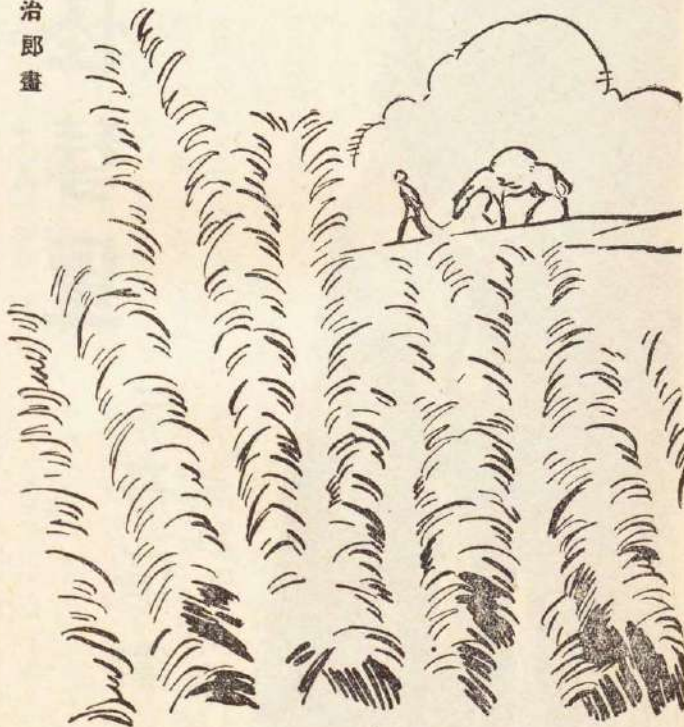
達崎龍

茫々草は
野の蔭で
いつか芯から
みな伸びた
空まで青い
夏やすみ
梅コもぎにも



あきたしナ
篠竹切つて
糸つけて
蹴コつりに
行かないか
茫々草は
野の蔭の
空の高さに
みな伸びた

寺内萬治郎畫



怪彗星

三井信衛
寺内七郎画



（前編までの梗概）

今から約五百年後の出来事であり、そのころ全世界は文明の絶頂に達し、わが東京市も、全ゆる科学の輝を盡した、理想的大都會となつてあります。

八月の中頃、天文學者牧村博士の令息正隆（せいりゅう）の玲子（れいこ）は、東京驛の百二十階にある屋上公園へ來ました。すると、夜空の片隅から、眩い一條の光線が射し、それが公園の野球場に落ちました。が、そこには一つの幻燈を映してをりました。それは、地球と彗星となし、彗星の前には地球に向つて、一本の矢の印がしてあります。不思議に思つて正隆が、天文臺にある父にその事を知らせると、すぐさま父博士はその場に來ました。

すると父博士はそれを眺めて、「これは容易ならぬ出来事だ。地球の危険が迫つて來たのだ。」と語るので、この幻燈は、そも／＼何處から映してゐるのでせうか？ 又地球の危険とは、一體何事でせうか？

三、呪はしい報告

その夜正隆と玲子の兄妹が、父と一緒に飯能の天文臺へ歸つたのは、恰度十時近くのことでした。父牧村博士のお邸は、天文臺の五町南にありましたが、そこへは寄らずに、ずつと三人は、天文臺の方へ空気を進めました。

夜が更けるに従つて、刻々と風は募り、天文臺の高い圓天井の小窓や、處々に開いてゐる、細長い摺硝子の戸が、森閑と更けてゆく夜の静けさを、思ひ出したやうに破つて、大空はその風のために、薄氣味の悪い程澄み渡つてをりました。

「ねえ、お父さん。」正隆は暫くして、風の音の途絶え目に、さう口を出しました。「一體あの不思議な幻燈は、何處から照してゐるのでせう？ 又お父さんは先刻、地球の滅亡が近づいたと仰有いましたが、それは何う云ふ譯でございませう？」

正隆も玲子も、今まで黙つてゐましたが、それは各自に、その事を考へて、一人であれこれと、思案を廻らせてゐたからなのです。

「今、説明をしてあげよう。」重苦しい聲で父は答へて、組んでゐた腕を放し、二人の顔を等分に眺めるのでした。「わしはお前方も知つてゐる通り、もう二十年この方火星のことばかり研究してゐたの

ちや。その火星の中には、この地球よりか、何倍もく賢い開けた人間が、住んでゐると云ふことを発見したのも亦わしちやつた。ところがな、その火星からは地球に向つて、毎晩々々、何かの信號をしてゐたのだ。」

「まあ、お父さん！ あの火星から、信號なんかしてをりましたの？ 何の信號でございますの？」

玲子の聲はたいそう早口です。

「それは、残念ながら、わしにも解らないのだが、兎に角火星にもこの地球と同じやうな人間が住んでゐると云ふ、たゞの知らせではないかな、と、まあかう思ふのぢや。」

「お父さん！」と、正隆の少し度

を外した聲が、高い圓天井にわんと反響しました。「ね、お父さん。今夜のあの紅い火は、その火星からの通信ぢやないのぢやうか？」

正隆がさう云ふと、父は満足の微笑を洩して、二度三度深く首肯します。

「それに違ひない。この地球から何の答へもないのを見た火星人は、火星の全ゆる科學の力を應用して、最後に、非常に強烈な、信號の光を發したのだ。」

「最後に」と云つた博士の聲は、何となく特別に、嚴かに響いたやうです。博士は暫くの間何事も語らず、只折々深い溜息を洩しては、小窓の外の澄み渡つた空を、物憂げな眼で眺めてゐるのでした。

「ね、お父さん。早くお聞かせ下さいな。ねえ、何うして地球の最期が、近づいたのぢやうか？」正隆は促しました。

「それはな、あの今夜の、屋上公園に映つた幻燈は、火星からの通信なのぢや。」

「え？ やつぱり火星からの——？」

「さうだ。それを見ても、如何に火星の文明が、進んでゐるか？ 解らない。いや、實はそれどころではない。あの幻燈の圖面は、一見しても解せる通り、この地球に向つて突進をして来る、大きな彗星があると、さう云ふ警告なのぢや。」博士はそこで沈黙しました。そこまで説明をされると、正隆

も玲子も、直ぐにもう一切の事柄がわかりました。あの幻燈には、彗星の前に矢が印してあります。その矢の印は、地球に向ひつゝ、あります。するとその彗星は地球へ突進し、遂には恐るべき大衝突をする、かう云ふのです。

火星に住む多くの人々は、この地球の危険を見て、到底黙つてゐることが出来なかつたのでせう。さうして、全ゆる科學の力を應用して、地球の一端に、その危険信號をしたのに違ひありません。

「お父さん。するとその彗星が地球に向つて、大衝突すると云ふのですね。」しかし、正隆の聲は、寧ろ好奇心で、一杯のやうでした。

「さうだ。」父は答へました。「この天文臺の望遠鏡には、まだ彗星の姿など、何んな空の端つこにも見えぬ。だが、火星にあるもつと強力な鏡玉からは、それがはつきりと見えるのかも知れない。」

けれど、さう云はれても、まだまだ正隆や玲子には、夢の話のやうに思はれてなりません。この東京の都、この科學文明の最絶頂に達した全世界が、そんな彗星などの衝突のために、脆くも滅びてしまふものとは、何う考へても、本當には思へません。たとへ衝突はしても、そこに、地球の危険を防ぐ、何かの方法があるかも知れません。獨逸のアイシユベツと云ふ學者は、かつて太陽の製造さへ

試みたと云はれてゐます。

「お父さん。その彗星を、地球から遠ざけることは出来ないのぢやうか？」正隆は尋ねました。

「そんなことは、恐らく不可能ぢや。いや、心配するな。」父はさう答へて目を閉じます。

父の云つた「心配するな」と云ふ言葉が、二人にははつきりと解りませんでした。實際彗星が衝突するの否か、それが疑問故、心配するなと云ふのか、或は又、たとへ衝突はしても、地球を救ふ方法があるから、心配するなと云ふのか。どうもはつきりと解らないから、正隆と玲子が、だんだんと不安になつたのも、また無理はありません。

三人は永い間、黙つてをりました。この人里離れた天文臺にも、次第に夜は更けて、凄味を帯びた半月が、窓の外に首を傾けて照つてゐました。空氣車が時折、空を横切つてゆきます。父は不圖、何事かを憶ひ出したやうに、「やつこらさ」と口に出しながら、肘掛椅子を立つと、やがて少し腰を曲げて、觀測室の方へ去つて行きました。

正隆と玲子は、もう夜も更けたので、又空氣車を走らして家へ歸らうと、父のところへ「お寢み」を云ふため立ち上りました。

その時です。ブ——ッ、ブ——ッ、といふ激しい音が、この天文臺の、と或る一室から、長く洩れて

來ましたが、それが不圖途絶え、と、その部屋の扉が激しく開いて、そこから姿を出したのは、助手として四五年以前から勤めてゐる、大河原でありました。

正隆と玲子が、望遠臺に續く大きな石段の上に、二歩三歩昇つたのと、その助手の大河原が、二人の後からその扉を開いたのとは、恰度同じとき、慌だしげな足どりで、大河原は天文臺の中へ入りました。

「お兄さん。何でせう？ 何だか余つ程、急な御用らしいのね。」

「うゝ。今ジイ——と鳴つたのはね、ヨオロッパからの無線電信だよ。」

そんなことを二人が話してゐる

と、望遠臺の内部から、不意に博士と大河原が、姿を現しました。

「おゝ、正隆に玲子。」さう云つた父の様子は、何うも只事ではないらしい。「今な、獨逸のミユンスタアベルヒの天文臺から、無線電信があつた。その天文臺には、残念ながら此の天文臺よりも、更に五十倍の強力な鏡玉がある。その報告によると、この地球に向つて、一瞬間九萬八千哩の怪速力で突進してゐる、大きな彗星を發見したと云ふのぢや。」

「え？ 彗星……九萬八千哩……」

今までは夢のやうに考へてゐた正隆も玲子も、云ひ合したやうにその一瞬間、異様の眼差を浮べま



した。博士は言葉を繼ぎました。

「もう明日遶り、この天文臺からも、觀測されるかも知れない。うむ、獨逸の奴に先に發見されて、残念なことぢや。」

さすがに職務上、牧村博士はさう云つて、地團太を踏みましたが正隆に玲子は、それどころではありません。今や、火星からの危険信號が、ちやんと立派に裏書をされたのです。地球の滅亡！ 地球の危機！ 夢だにも思はなかつたその大事實が、今や、目前に迫らうとしてゐるのです。

四、火星へ

ありと全ゆる科學の粹を盡し、

平和の夢に酔ふてゐた全世界に向つて、地球滅亡の忌むべき報知は瞬く間、行き亘りました。

その呪はしい怪彗星は、獨逸の天文學者のメンジュラ博士が、一番最初に發見したと云ふので、メンジュラ彗星と名づけられ、もうその夜から二三日過ぎると、牧村博士の天文臺でも、派に觀ることが出來たのでした。

果してその彗星が、地球に向つて、大衝突をするものか否かと云ふことが、間もなく全世界の學者によつて、夜の目も寐すに、研究と討論をされましたが、遺憾ながら學者中の大部分は、衝突すると云ふ結論に達したのであります。無論、正隆の父の牧村博士も、

その衝突説を信じてゐたのでした。さうして、天文學上から割出して、その大衝突の日は、今後僅かに三ヶ月の後だと發表したのです。

僅かに三月！ それを知つた多くの人々の驚きが、何んな有様であつたらうか。一々語るにも及ばないことです。

「あゝ、何うしませう。」

「何うにか、ならないものでせうか。」

寄ると隣ると、そればかり話してゐます。日毎に夜毎に、教會や寺院の鐘が、かあん、ごおんと鳴り響いて、毎日のやうにお説教が始ります。殘る三月の間を、いつそ面白可笑しく過さうと、お酒を

飲んで踏つてゐる人々もありました。さうかと思ふと、果して彗星が衝突するか何うかと云ふことに賭をしてゐる者もありました。

するともう繪葉書屋の店には、『地球最後の光景』と云ふ三色版の畫が掲げられ、それがどしどしと賣れても行きませんでした。また高い建物の上などで、夜が來ると、一回十錢で、望遠鏡を覗かせるものもありました。

しかし、何を措いても總ての人は、只深い恐怖と嘆きの底に、落されたのです。あの大理石の、宮殿のやうな大劇場も、廣い舞踏場も、或はまた美しいお邸も、何も彼もが三ヶ月の後には、消えてなくなつてしまふのです。

「文明が何だ。科學が何だ。」
「學者が何の爲になる。この地球の恐ろしい危険を、誰一人防ぐことは出來ないぢやないか。」

さう云つて、學問を呪ひ世を呪ひ人々が、また日増しに増えて來ます。東京の大道路では、日もすがら夜もすがら、色々の人の演説ばかりが、繰り返されてをりました。

さうした呪はしい聲々の中で、只、正隆と玲子だけは、美しい微笑の色を浮べ、しづかに地球の最後の日を、待つてをりました。もう此れで三月の後には、玲子ともお別れするのだと思ふと、常にも増して、妹を可愛がつてやりたくなります。

「ねえ、玲ちゃん。何でもお前の欲しいものを、みんな兄さんは與けるよ。」

今日も正隆がお邸の一部屋で、玲子に向つてさう云ふと、玲子は涙ぐんで暫くは黙つてゐました。「有がたう。私、お兄さんのお紀念品を抱いて、地球の一番お終ひの日には、笑ひながら死んでゆきたいと思ひますわ。」

「あゝ、僕だつて、一寸も哀しくないよ。この地球は僕等の故郷だ。それと一緒に滅びるのは、本當に幸福なことなのだ。ねえ玲ちゃん、僕等は（地球の最後）と云ふ勇しい歌を作つて、それを歌ひながら雄々しく死んで行かうよ。」

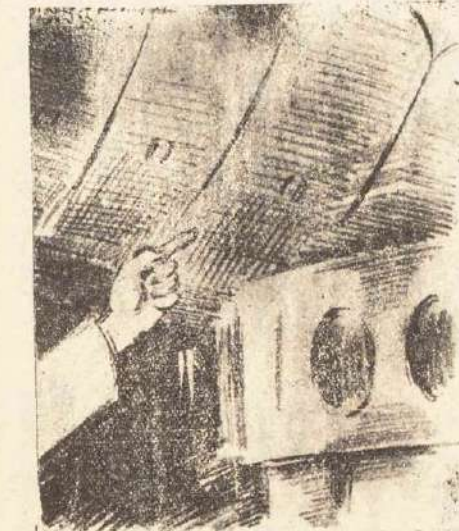
その時、静かにかう云つて、二人の前に、現れたものがありました。不圖二人が見上げると、そこには何時か、父の牧村博士が立つて、にこにこ笑つてゐるのでありました。

「あら、お父さん。」玲子は云ひました。

「はゝ、お父さんは先刻から、お前たち二人の話を聞いて、我子ながら、中々偉い決心だと思つてゐたよ。だがな、我々がこの儘此處に止つて、地球と運命を共にすることによいことぢやが、この儘又新しい世界へ移住して、そこで再び、正しい暮らしをするのも、又よいことだとは思はないかな？」
正隆も玲子も、謎のやうな父の

言葉に、只黙つて顔を見合せてゐました。
「地球を見捨て、行くと云ふのではないのちや。この地球の美しい歴史を、外の世界へ傳へようと

云ふのちや。」
「え？ 外の世界……」初めて正隆は、得も云へない顔つきをして、夢のやうにかう答へました。「外の世界へ……お父さん、それは何



處です？ そんな事が出来るのですか？」
「うむ。正隆に玲子、喜ぶがよい。お父さんは今迄事情があつて、何一つお前方に話しはしなかつたが、二十年以來お父さんは、火星に旅行する航空船を研究して、やうやく此の

程、完全に出来上つたのだよ。」
聞いて二人は、夢に夢を見る心地がしました。火星に人間が住んでゐることも、今では最早疑ふ余地のない事實となり、又全世界に至るところ、最新式の交通機關で充されてをりました。だが只一つ月や星に向ふ航空船は、未だに完成されてゐなかつたのです。まして火星には、人の住むに適する空氣も温度も、完く備つてゐることを知りながら、そこに向ふ交通機關は、何一つ發明されてゐなかつたのです。それを牧村博士が、何時の間にか完成してゐたとは！
「さうするとお父さん。その航空船に乗つて行けば、光度、火星へ行けるのですか？」



「うゝ。一時間約一千哩の速力で三年半程かゝる。地球に一番近いのが、月を除いては金星ちやが、

では意外にも、その不思議な怪速力を持った火星航空船が、その中に藏はれてゐたのでありませう。

その次に近いのが火星なのちや、二人とも此方へ来るが……」
父はさう云つて直ぐに二人を邸の裏手にある、藍塗の倉庫の前に伴れて行きました。今まで二人は、その倉庫には父の重要な研究書類や、天文の機械が入つてゐるのだと聞かされてゐましたが、
「さうちや。玲子、お前も一緒に中へ入つて見るがよい。」
航空船の一端にある白い鍵を父

が軽く押す。その横の扉が、音もなく開きます。三人は直ぐにその中へ入りました。何うしてこの航空船が真空を通つて、火星まで行くことが出来るのか、博士は「一それを説明してゐましたが、二人にはよく解りませんでした。只その内部の構造が、思つたより簡単だつたので、二人はつくづく驚いてしまひました。」

「まあお父さん。こんなもので、本當に火星へ行けますの？」玲子は云ふのでした。

「わしはさう堅く信じとる。……わしの永年の苦心が出来上つた時に、地球の滅亡を聞くのも、何か運命のやうに思はれるなあ。それにしても、近いうちに火星へ、試

運轉をしようと思つてゐたが、もうその間にも合はないのぢや。その代り近いうち、月世界まで、運轉をやりたいと思つてゐる。」

「月世界へ……」

「いや、何も驚くことはない。月の世界までなら、只の一週間ばかりで行けるのぢや。」

「でもお父さん。月の世界には、空氣がないのでせう？」

「うゝ、だから、住むことは出来ないが、この航空船の中では、無限に新しい空氣を製造する。だから、窒息の心配はないのだ。」

二人の胸には、譬へやうもない驚きで、一杯になつて來ました。

二人が倉庫を出た時には、とつぷりと日は暮れてゐました。する

とこの時、突然正隆は叫んだのでした。

「お父さん！ 彗星です。彗星が見えましたよ！」

「うむ！」

肩を張り、身を反すやうにして博士は眺めました。

玲子もまた、正隆の指す西の空を、おいつと眺めました。

弓状に曲つた銀色の尾を放つて北西の地平線上に光るメンジュラ彗星の姿が、もう肉眼でも、ありあり見えてゐるのであります。

同時に、深い叫喚の聲が、何處からとも知れず、いつばいに擴つて來ました。

(つづく)

バルコニー夜話



アーペンチャーテン

タアレンナー

寺内萬治郎

記者君「さア、こんどは寺内先生の番です。先生、なにか素朴に面白なお話を下さい。怪談でも結構です。身の毛のよだつような、悪い怪談を聞かせて下さい。」

「僕は何んにも話の種が無いんだよ。だいたい、寓家に話をしてゐるんで、無理だと思ふ。恰度、無に木に昇れと云

ふやうなもんだよ。」
記者君「そんな事があるもんで、さうせんせいはいさつと、素暗らしく面白なお話を知つていらつしやるに違ひない。是非、どうぞ一つ……」

「僕、弱つたなア……仕方がないぢやア、アーペンチャーテン、タアレンナーの話でもしませうか。」
記者君「アーペンチャーテン、タアレンナー？ そいれ、先生、その名」と云ふ所まで進んで行きまし



た。其のあたりの牛番は、碓氷抵抗もせずに、村々を我軍の手に委ねながら、山の奥深く逃げ込んでしまつたのです。

せはったいけりうらひ
先鋒隊が薪煤溪へ着いたのは、
でと　あつた
丁度、夕方頃でした。暑い夏

の日は、もうすつかりと西に落ちて、空には瞬かに夕明が残つてゐました。主人の部落は、家數にして、十二月もありましたらうか、それが皆々ガランとした空家でした。小隊長の佐伯中尉は、部下の兵士達を、それ／＼その空家へ泊らせる事にしました。そして小隊長自身は、それらの家でも一番大きな、酋長の家に泊る事になりました。

小隊長が家の中へ飯を食つてゐると、戸外から何か騒々しい物音が聞えて來ました。何んだらうと思つて出て見ると、五六人の兵士等が一人の土人を提へて小隊長の所へ引いて來やうとしてゐるのでした。

『小隊長殿』と兵士等の頭をつたひの人が云ひました。『只今、問答を擧へて参りました。私の宿泊して居ります家の穴藏に隠れてゐる奴でございま

す。先日頃から、度々われわれの行動を土人共に密告してゐたのは確かにかに此致の通りありません。穴蔵には、地圖、鐵砲などを藏してゐました。又、土人の一人も、確かにこの男は間諜だと申して居ります。」

かう話してゐる間中、土人は後手に縛られた身を崩しながら、切りに哀れみを乞ふてゐました。

「アーベンチーテン、ダアレシナ
アーベンチーテン、ダアレシナ」

土人は、小隊長に向つて、涙を流しながら訴へてゐるものでありました。年齢は三十五六でせうか、背の高い、瘦ッぽつちの、顔色の悪い男でした。

「よし、その物置へ入れて置け。」

明日の朝、血祭りにあげてやる。小隊長はかう云ひ棄てたまふ。家の中に這入つて行きませんでした。土人は、物置の柱に腰重に縛り

つづけられました。兵士達は、立ち去り際に、めい／＼「ツづつ士人の横面を照りつけて行きました。」

夜中に、ふと小隊長は眼を覺しました。何か恐ろしい夢を見たのです。耳を澄すと、どこからとも無く、哀れな聲が聞えてきます。

「アーベンチーテン、タアレンナリ。アーベンチーテン、タアレンナリ。」

それは、物置の主人でした。彼は、夜びでかう云つて泣き叫んでゐたのです。

小隊長は『チエツ』と舌打をしました。そして、その聲を耳に入れないようにして、もう一度眠らうとしましたが、どうしても駄目です。聞くまいと思へば思ふほどその聲は意々哀れに響いてくるのでありました。一二分の間を置いて、もうこれで止んだかと思ふと、又しても風のよかに「アーベン、

チーテン……』と流れてくるので

小隊長は、ガバと跳れ起こみあがりた。そして、軍刀を搦にぎり外へ出でて行きました。一刀の下に斬り殺ころしてやらうと思つたのです。

窓^{まど}から、差^さ込む^{こむ}月の^{つき}光^{ひかり}で、室^{へや}の隅^{すみ}に縛^{しば}られてゐる土人^{どじん}の姿^{すがた}が、臙^{よう}に透^{とお}り見^みえました。彼は、小隊長^{せうたいちやう}の姿^{すがた}を見^みると、足^{あし}すりをし、身^みをだへ、腹^{はら}れさうになつた聲^{こゑ}を絞^{しぼ}つて泣^なき叫^{こゑ}びました。

涙汗で汚れた^か魚になつた。その顔^{かほ}、死んだ魚のような眼を見た時、小隊長はヤヨツとして立止りました。そして、思はず眼を外に向けました。東の方には、新高の連峰^{たかねのつぎ}が、月の光りを全身に受けて、くツきりと青白く浮び上つてをりました。云ひしれの自然の崇さが、ひしりと胸に迫りました。小隊長は初めの決心は何處へや

ら、士人に言葉一ツかけずにし、宿舎の方へ歸つて行きました。明る朝の事、皆なは寢不足の眼を括りあひました。中には、あの聲が耳について、今朝までとうとう一睡もしなかつたと云ふ者もありました。

出發に先だつて、捕虜はいよいよ血祭りにあげられる事になりました。捕虜は流石に一晩泣き明んだためか、ぐツたりとした、言ふ云ふ事が出来ませんでした。たゞ哀しげな眼をして、ぢレツと小隊長の顔を見詰めてゐるばかりでありました。

その眼を見た小隊長は、昨夜の事を思ひ出しました。云ひ知れぬ腹立たしさか、胸にこみあげて來ました。晝間の明るい陽の光りが、彼に元氣を與へたのでした。

『誰か、力の切れ味を試す者はないか。小隊長は皆んなを見渡して、士人に言葉一ツかけずにし、宿舎の方へ歸つて行きました。明る朝の事、皆なは寢不足の眼を括りあひました。中には、あの聲が耳について、今朝までとうとう一睡もしなかつたと云ふ者もありました。』

ながら云ひました。併し、流石に
置れ一人として進み出る者はあり
ませんでした。
『誰もないのか、腹病者！』小隊
長は喚びりました。
『其時、一人の馬丁が、
後の方から、ニヤ／＼笑ひなが
ら出て來ました。手には鎗牌の日
本刀を持つてゐました。
『隊長様、私にやらしめて下さい。
馬丁は小腰をかだめて、ちよいと
お辭儀をしました。
『貴様か？』よし、やれ。小隊長
は一考へながら云ひました。
『この馬丁は、結局と云つて、人
を斬つて見たいから戦争に従つて
きた。』と云ふ男でした。手に持つ
てゐるのは、名刀『關の孫六』彼
が何時も自慢にしてゐたものでし
た。
穴が堀られて、その傍に捕虜は
引据ゑられました。この場になつ
ても、捕虜はその魚のような眼で、

ナンシ——タンテ——チンペ——ア
 タシテ——チンペ——ア

「やがて哀れな捕虜は、首と胴と別々になつて、穴の中に墜落されました。」



ひるごろせうたい
 晝頃、小隊は鶴蝶溪の宿舎
 につぎながらしんやん
 を引上りて、次の部落へと進軍し
 て行きました。

それから、四日目の晩の事です。
日本軍の機銃隊が、新たにこの鴉
螺溪の宿舎に侵入つて來ました。
そして、前の隊と同様、土人の家
を密舎にあて、夜を過したの
です。

と、ころが其晩、小隊の考達に皆
んな、一つの不思議な聲で夢に破
られました。丁度、宿舎の廻り
の草叢で誰かが倒れて呻つてゐ
るような、苦しうな聲でありま
した。

「アーベン、チーテン、タアレ
ンナ」と云ふようにも聞えれば、
又「ヨーエン、トウエン、タアレ
ンナ」と云ふようにも聞えまし
た。ちやうど蟲が啼くように、遠
切れては聞え、聞えては遠切れる
のでありました。小隊の者の殆ん

ど全部は、その聲の爲に眼で見てしまつて、聴る事が出来ません。恐ろしい。爲に、趣味なくめけ出して、親友の所へ聲をかけに行く者もありました。小隊はその不思議な聲の話を待切りました。併し、誰か人として、その言葉の意味、何處から聞えて来たのかと云ふ事を知る者はありませんでした。

四五日経てから、この小隊は
前の先發隊に追いつきました。そ
こでふとした事から、この不思議
な聲の語が出たのです
そこで始めて、後援隊の者達は
その場所、捕虜が殺されたのだ
と、云ふ事を知りました。

「捕虜の怨望が残つてゐるに違ひない。」^{ある}と、或者は云ひました。
「いや、そんな馬鹿な事があるものか。」それは耳の迷ひだ。^{もの}他の者が云ひ消しました。
「だつて、小隊の吟んど全部がそ



「それを聞いたのぢやないか。それに、
この事件に何の關係もない、別
の者がその聲を聞いたのだからだ
……」
「それもさうだな。ぢやア、まだ
その捕虜が生きてゐるのかな。」
「こんな事を云ひあつて、結局
事件は、なんとも解決がつかな
かつたのです。」

これは親友の山田さんから聞いた話で、本當の話なんですから、その積りで聽いてくれないと困るのです。

山田さんの家は河内の金剛山の

べつと新結は、この話を聞いて馬丁の「調々してゐました。たゞ一人、小隊長の佐伯中尉は、暗い顔をして、一言も口をききませんでした。」——

これで、僕の「話」はおしまひです。なぜ、さういふ不思議な事が發つてゐないか、皆さんどうも考へて見て下さい。』

狸が本當に
化けた話

齋藤佐次郎

龍りゆうの舊ふる家けです。主家しゅけの向むかうには
 古ふるい倉ぐらもあります。
 庭木にぎはなども鬱蒼うっそうと茂さかつてゐて、
 何なんとなく陰翳いんえきな氣分きぶんのする家いへでし
 ました。

ところ、その山田さんの古い倉の床下、どこから来たものか夫婦の御伽作り込んでしまつたのです。困つたことだと心配しましたが、その夫婦、奥は結構おとなしい奴で、別に悪戯もしません。極めて神妙にしてあるものですから、家の人達も最初こそ氣味悪く思つたものの、今では却つて可愛くなつて、御飯のお残りでもあると、持つて行つてやつたりしました。

さうしてゐる内に、この夫婦狸きつねに三匹さんびきの赤やんあかやんが生れたのです。間もなく狸きつねの赤やんあかやんはおな
おな大きくなつて、ちよ／＼と穴あなから出て來たりするやうになつたのです。

「そらッ、出た〜」なんて、皆
なで騒いだりすると、あはて、穴
の中へ這ひ込んで了ふのださうで
す。

たうく^{たうくおひめ} 親位の^{おひめ} 大きになりまし
た。
さア、さうなつたら、そろそろ^{そろそろ}
昔前の^{おへりな} 惡戯^{おへりな} ははじめたのです。大
きくなつたといつても、まだ子供
なんですから、その惡戯^{おへりな} 子供ら
みてゐて可愛^{おへりな} いのです。
丁度、五月雨^{おへりな} の降る頃でした。
宵^{おへりな} からしと、雨の音が聞こ
てゐました。山田さんの家の惡戯^{おへりな}
居^{おへりな} が、何なく縁^{おへりな} の密^{おへりな} から惡戯^{おへりな} の力
を見たのです。すると、三人の可

愛い、小僧さんが、磨傘をさして
片手に提灯を持ち、もう一方の手
には貧乏徳利と、道頓と云ふら下
げて、カラコロと高下駄の音を
させながら、背戸の井戸端の方へと
行くではありませんか！

面白^{おもしろ}い事^{こと}には、その提灯^{ていとうちん}には、はつきりとして「山田^{やまだ}」とそここの家の名^なが書いてあるのです。
隠居^{いんきょ}さんにもと武士^{ぶし}であつただけに腕力^{うでぢりき}の握^{にぎ}つた人でしたからう

別に驚かさないで、商売の小僧
の化け工を覚えてますよ、小僧
は二人とも、頭はくすり坊主で
それが老居のかゝらのやうに青く
びかり、光つてゐるのです。
そして新物のははしつて、後の帯
にはまき、お尻が見える位なんだ
です。そのお尻もまた何青なんだ
か、面白くはありませんか。
山田の腰居さんはつんと見
ておましたが、こんな面白いもの
を二人で見てもは勿體ないと思

『おい、皆なおいで。』と茶の間の方に向つて呼びました。その聲は、勿論、それ程大きい聲ではなかつたのですが、その拍子にバツと三匹の小僧さんの姿は消えてしまふつて、

ましな
惜しいことをして、つたて残食
がりましたが、その晩はとうとう
それつきり出ませんでした。
しかし、それから後も、小狸は



雨も降らないのに、相變らず傘を
さして、高下駄をばいてカラコロ
くやつてゐるのです。そして難

か「中」でも座を立ると、それつきり揺るすやうに見えなくなつて了つたさうです。

さて、この三正の子狸先生、



その後どうなつたか、つひそれは聞き終へましたが、多分山田さんの倉の床下に出て、何處かへ分家した事でせうよ。

朱の盤坊の話

水島爾保布

むかし、越後境から山越して會津領へ還入つて来た一人旅の若者があつた。秋も末の日の短いきかり、しかも夕ぐれになつて雨を持つて来たので、まだ目あての宿まで行きつかぬ中に、とあるかたの庄の半ばではあつたらしい夜

の色に路をさへぎられて了ひました。

「さう困つた。」

と、旅人はあたりを見まわして、せめては里の灯でもとさがし求めてみると、折よくも麓の方から提灯が一つ、今自分の来た路

をテク／＼登つて来るのでありました。

「今晩は……」

旅人が聲をかけようとするとなん、その提灯の人の方からかう呼びかけました。

「お見上げ申せば、旅のお方らしい。どちらへお越しなのです。」

「越後境からやつてまゐりました。御覽の通り行き暮れて難澁して居ります。」

「それはそれは難かし御困りのこととせう。幸ひ私はこれからこの丘の下の里までまゐります。御案内致しませう。」

と、その人は大さう親切にいつてくれたので「では……」とばかり、その提灯のあかりに従つて「しよに丘を下つて行きました。」

「やア、あいにくと降り出ししました。」

と、その人が空を見上ると、一しよに、旅人の笠へもバラバラと

「それは……てうど……こんな化物なんで御座います。」

と、その人は提灯をついと自分の顔の側へ持つて行きました。

ひよいと見ると、そこには、まるで火のやうな赤赤な色をした、まんまるな、さしたし二尺もあつたやうな、大きな顔が、大きい紅色の眼玉を剥いて、血色の口をカツと開いて、さうしてゲラゲラ

ラと笑ひかけたのであります。

「うわア……」

とばかり、びつくり仰天した旅人は、その儘、眞つ暗がりの丘の路の麓の方へと轉がるやうに駆け下りました。こけつまるびつやつと麓の平地まで来ると、そこには幸ひ一軒の百姓家があらした。戸でした中には来ても練つてゐるらしい人の氣配がしてゐました。

「大體です。大體です。どうか助けて下さい。助けて……」

と、旅人は思ひき切つて、あわてふためいてその家の雨戸を破れるばかりに叩きました。

「何です。何です。」

と、中から年寄つた女の聲がしました。さうしてガラ／＼と雨戸があけられました。

同時に土間へこゝろがり込んだ旅人を、

「一體まアどうなつたのです。」



れたやうに眺めました。

化物に出あつたのです。化物は私

を追つかけてまゐります。どうか私をどこかへかくまつて下さい。お慈悲です。」

「化物にお出合になつたのです。すつて、その化物と似るものは……一寸、まア、こんな顔ではありませなんだか。」

と、いふかと思ふと、今迄のお婆さんは忍ちに、たつた今見た朱の盤坊の通りの、眞赤なまんまるなお盆のやうな大きな顔になつて居ました。

「キヤツ」と、いふとその儘、旅人は目を廻して了ひました。

ふと氣がつくと、夜露に打たれて、體は水びたしになつてゐました。白々あけの空はかりりと晴れ上つて、その木蔭からは元氣のいい、小鳥の囀りが絶え間もなく聞えてゐました。

「はてな。」

と、思案して見ても、夢やら現やらさつぱり見當がつかない。そ

れもその増、旅人のころがつてあつたのは昨日かけおりた雪の丘のて松の中だったのであります。

叔父の軍刀

海野良子



一と夏、岩國川のほとりで過した事がありました。それは、私の叔父がその地の縣廳の副官をしてゐたので、招かれたのです。何になると、叔父は縁故が深い集めて、夜の更けるのも知らないで、面白い話をしてくれました。その話で今でも思ひ出すのは叔父が戦争で支那へ行つた當時の出来事でした。

叔父は當時若い少尉でありましたが、一今夜中に死に處するやうに「といふ命令で、憲兵隊から護送されて来た八名の馬賊の首を殘らず切り落さねばならない事になつたのです。

「月が丁度今夜の様にさへた夜に「つたよ」叔父はかう言つて感傷にたへないやうに、ちつと空を見上げました。馬賊が一人づつ、從卒につれて來させて前の邊に座らせました。後手に縛られた馬賊の首を前方にさしのべて、睨目して居ました。

「叔父は當時若い少尉でありましたが、一今夜中に死に處するやうに「といふ命令で、憲兵隊から護送されて来た八名の馬賊の首を殘らず切り落さねばならない事になつたのです。

「月が丁度今夜の様にさへた夜に「つたよ」叔父はかう言つて感傷にたへないやうに、ちつと空を見上げました。馬賊が一人づつ、從卒につれて來させて前の邊に座らせました。後手に縛られた馬賊の首を前方にさしのべて、睨目して居ました。

「叔父は當時若い少尉でありましたが、一今夜中に死に處するやうに「といふ命令で、憲兵隊から護送されて来た八名の馬賊の首を殘らず切り落さねばならない事になつたのです。

「月が丁度今夜の様にさへた夜に「つたよ」叔父はかう言つて感傷にたへないやうに、ちつと空を見上げました。馬賊が一人づつ、從卒につれて來させて前の邊に座らせました。後手に縛られた馬賊の首を前方にさしのべて、睨目して居ました。

震へて見えました。

「さあ早く突かんか……」

「ハッ……」

「何をぐぐぐしてゐるか……」

「小隊長殿……私……い……」

「ナニ……イヤ？……貴様それで軍人か？」

「……でもこれは私の役目ではないのであります。死刑執行は、小隊長殿の務なのであります。私は側で見て居ればよいのであります。」

「ヨシッ……分つた……おれがやらう。」

其處で、叔父は軍刀を引きぬいて、スボリと首を切り落しました。

次に一人又次に一人と順々に七名を終つて八日目になりました。

その八日目の男は、都はも、出してもぞつとするさうです。色の黒い、恐しく眼に特徴があつて、半

分笑ひかけた風でちろちろと叔父の顔を見ました。

「此奴が氣味の悪い奴だ。」と思ひましたが、先づこの一人で、今日の有難くない命令がはたされるのだと思つて手なふり上げました。が、如何したわけか、刀を握つた雙手がこの大事な最後になつて急に重くなつたのです。然しこんな事ではと氣をしつかり持つて打おろした刀は、はづれて無慘にもカチンと音して額にか、つてしまひました。

急いでぬきさすと、その男が苦しい中から後の叔父を見上げて、氣味の悪い眼を一所無氣味にして睨みました。又一刀をあびせましたが、今度は首の後を半分もはいるませんでした。その時又恨めしさうに見上げました。側に立つて居る從卒の顔も悲愴な程、叔父に似た無慘な色をへました。今一度と試みやうとした手元もにぶつてい

立たつた叔父は、思ひ切つて心臓をつきましたので、やつと落命しました。

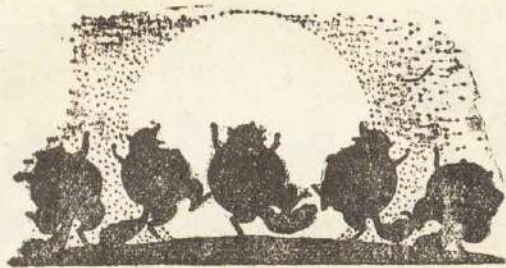
從卒が黙々としてゐる間に、叔父の眼はちつと寂れた死體の上にそ、がれてゐました。

「可哀さうな事をした……」實におれの一生を顧じて今日の事はたつた一つのしくじりだ。とほろほろと落涙しました。

それから幾日か過ぎての夕方、叔父は敵陣の爲に兩足と右手に重傷を負ひました。人事不省になつてゐたところを傷兵隊によつて擔架で病院に運びこまれましたが、何しろ重傷ですから熱も高く、上向きにしか寝られず、身動き一つ出来ませんでした。しかし、やがて意識だけはとり返しました。

夜も大分更けたと思ふ時、病室





い、月の晩

西川 喜平

い、月の晩に、数からノッく出てきた狸が五六びき。
「い、月に背れて、腹鼓をうつたのでスツカリ草臥てしまった。」
「己はくたびれよしも、腹が空いてきた。そこいらへ行つて、食物をさがしてこよう。」
「それがいい。田かける」と、ソロ／＼里の方へ出かけた。と、そこが中々食物が見當りませんので、みんなガツカリしてしまひました。
「ナンボ不景氣だつて、往來にバンのかけ一とつ落ちてゐないとは情ないな。」
「おみやげの折でも下げてくる者があつたら、おどかしてとつてや

らんだが。」
「ところが人間が伶俐になつたので、うっかりすると酷い目にあふぞ。隣り村の奴が、おどかしに出て、アベコベにつかまつて、今では動物園で見せ物になつてゐるさうだ。」
「ナニシロ、もう一と廻りしてこよう。」
と野道を行くと、ブンといひがしてきました。
「オヤ、オツナ匂ひがするぞ。あれお焼肴の匂ひだ。さがせ。」
と、あちら、こちらと見廻す中、向ふに見える一軒家の方から、風につれて匂ひがくるので、ソット一軒家の垣根をくつて、抜き足さし足、ボンヤリ灯りの見える窓の障子のすき間から覗きました。スルト内には隠居さんらしい、一人のはげ頭のお爺さんが、お膳の上へごちそうなべて、小さい箸口でチビリ／＼と、樂みさうに

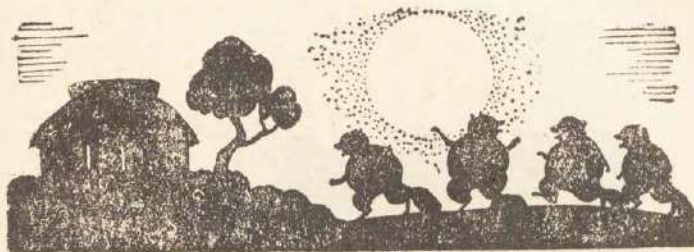
「お膳さん／＼。モシ／＼、隠居さん」と小供の聲で呼びかけましたが、隠居さんは、見向きもしないで飲んでゐるので、一とつ目小間、張り合ひが抜けて、スズ／＼歸つてきました。
待つてゐた狸は口を揃へて、
「一とつ目は意氣地がないからダメだ。今度は三つ目にたのむぞ。」
三つ目と呼ばれたのは、大狸で、「大丈夫だ、ヨイショ」と云ふと、忽ちからだ、スルト／＼と伸

い支那人でした。
その顔は一目見た叔父はぞつと神身に冷水をかけられた様に感じました。言葉一つ川さすつと見てゐる眼は、片時も頭から離れないあの八人目の馬賊の眼です。何と云ふ恐ろしい事だ、叔父は、動かない身體を無理にもたへました。そして殆ど無意識にやつと自由のきく左手をのびて終極の片側の棒にかけてある軍刀をとりました。すると男はいきなり終極に上つて来て兩手を以つて叔父の首をギョウと締めつけました。叔父は苦しみながら一生懸命に今覺えやうの支那語で何か言はうとあせりましたが、相手は少しも手をゆるめません。疲勞と傷の痛みとでは返す事も出来ませんでした。
「大城様……もし大城様……」耳元で大きく呼ぶ聲に、はつと氣がつきました。
「あなた大そうお苦しみて……」

「お痛みになりませんか……」と言つて顔の汗をふいて呉れてゐるのは間違ひなく看護婦でした。そして父、急しうに「藥を催促して参りますから。」
と出て行きました。
叔父はかろ／＼なづいて、又うと／＼としますと、誰やら入つて來ました。ドアの處にこつちを見つて立つて居る。それは前のやうに又つかつかと終極の上に来て首をしめ始めました。然しこの時は叔父も觀念して彼の爲にいささよく殺されてやらうと決心して居ましたから、只なすまゝにさして居る内に氣を失つてしまひました。
「氣がつきましたか……君、しつかりし給へ。」と言つて心配さうに叔父の手を握つたのは同僚の軍醫でした。
「見田君……」叔父は細い聲で云ひました。「僕はもう生きやうと思

はわ……」悲痛な言葉でした。
「馬鹿な……變な神經を起し給ふな。」
「イヤ決して處ではない。僕を殺さなければ止まないものが居る。」
「大分興奮してゐる。まあ／＼今夜は着いて寝給へ。」
と軍醫は、あつめて居ましたが、ふと寢る右側の床の上に解から二寸位又がぬけた。たま／＼横はつて居る長い光つたものを見つけた。不審に思ひながら、
「おい、あれは何したんだ。」と聞きよした。不思議な顔をして急いで机の上のせき看護婦より、叔父の驚きと機嫌とはどんなでしたらう。
「どうだ、面白い話だつたらう。」
と叔父はにつこりしました。私は直に聞きよした。
「叔父様、その軍刀今も御持ちでせうれ。」

するとだまつて奥から黄色い布にくるまつた品物をさげて來ました。
「サアお前さんに記念の爲に見せるとしてやらう。」と電氣をおろしながら「皆此處において。」と言ひました。
私共は出てくるその光つたものの、歴史を聞かされた今となつては、何となく體身がおの／＼のなやました。やがて布の紐をとき終つた叔父は、ズバリとさやはらひました。
これが幾多の人の血をかぶつたとも思はれぬほど、ものすこく光つて居ました。
「叔父様もう結構です。お喜び下さい。何だか氣味が悪くて……」
叔父は笑ひながらもとの通り袖に納めて布にくるみました。その間、誰か言葉を出すがありませんでした。



びて、見上げるばかりの、三つ目の大入道になりました。
大入道は、ノッシーと、大股に歩いて、庭先へ立ち上がり、太い壁で、
「隠居あるか」と、壁をかけたが、隠居さんは前のとほり、平気でゐるので、三つ目の大入道は、戸を力まかせに「ドン」とたたいて、
「コラ隠居ッ」と怒鳴るトタン、戸が、ガラリと開いて、はげ頭の大入道は、隠居さんの顔がスツと出ました。
隠居さんは、今までかけてゐた大きな眼鏡を鼻へ上げて、デロデロ見廻す顔へ、月の光りがキラリツとうつると、
「ワッ、四つ目だア」と大狸は、叫んでひっくり返りました。



「ア、こんどは秋の番です。何をお話ししませう。夏の事ですか、水に因んで、河童のお話でもしませうか。」
太郎「河童ッて、なかに？」
「河童と云ふのは……さうです、私も見た事ではないからよく知りませんが、なんでも田舎の河や池へ行くと、たくさん棲んで居ると云ふ事です。大きさは三歳か四歳の子供ぐらゐつて、頭には

河童と角力

久米 絃一

女の兒のような髪の毛が生えて居り、口は尖がつて、ちやうど鴨のように見える。色は濃黒く、所々に黒い斑點があつて、傷へまると、ブーンと臭い、なまぐさい臭ひがするさうです。又、頭の上には、お皿が一枚載がつてゐて、それには何時も、なみなみと水を盛てゐます。この河童といふ奴は、角力をとるのが大好きで、よく村の若者達が、河岸を歩いたりしますと、水の中から出て来て、
「角力とろ、角力とろ」と云ふ

うです。なんだ、こんな小さな奴が……と見くびつて角力をとつてみると、どうして、中々強い。大がいの若者は打負かされて、水の中へ引き込まれてしまふさうです。ところが、河童には一ツの弱點があつて、頭の水を流してしまふと、もう赤坊よりも弱くなつてしまひます。ですから、河童と角力をとる時には、先づ最初「やア、今日は……」と云つて、お辭儀をして見せるのです。すると河童も真似をして、
「今日は……」とお辭儀をする。端に、頭の水が流れてしまふ……この計略が一番だと云はれてゐます。又、河童の嫌ひなものは、もう一ツある。それは佛さんに供へた御飯です。この御飯を河童に見せると、
「いやだア……」と云つて、泣きだすさうです。
さて、最後の國の片田舎に、力



自慢の若者があつた。或時のこと、用水池のほとり歩いてゐると、水の中からヒョコリ河童が飛び出して来て、
「角力とろ、角力とろ」と云ひます。角力が飯よりも好きな若者は「よし来た」とばかり、直ぐ直線になりなりました。この若者は、力自

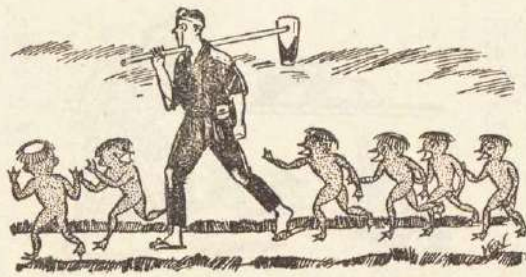
慢なからゐる。頭の水を流さざるやうな卑怯な事はしませんでした。んやッ」と云つて四ツに組んだと思つたら、小手投げといふ手で、こゝろと河童を其場へ投げ出してしまひました。
河童は泣きだした。頭の水を流したら、割れた頭の水を癒せ合せ合せ、水の中へ潜り込んで行きました。暫くすると、今度は、又別の河童が上つて来て、角力とろ……と云ひます。若者は此奴も又、手ツビどく投げ倒しました。すると又別の河童が上つて来て、角力とろ……と云ひます。此奴も投げ倒す、又お代りが上つて来る……のようにして、若者は都合十二匹の河童を投げ倒してしまひました。流石の河童も断念めたかして、それから後は一匹も上つて来ませんでした。
若者は嬉しい胸を突出して、ほッといふ息をつきました。勝利の



又、例の河童が出て来て、『角力とる、角力とる。』と云ひます。

この久兵衛は、あんまり力が強くなりません。それに、この前の河童の話を聞いてゐたので、河童が幾らハケましく云つても、知らん顔をして、スタ〜と家の方へ歸つて行きました。すると河童はい、氣になつて、池の中から、ゾロ〜ゾロ〜と敷へ切れないほどの河童が、前へ上つて来ました。そして、久兵衛の後に先になり、或は久兵衛の裾を引張つたり、或は背中を突つたり、色んな悪戯をしながら、角力とる、角力とる。と騒がれてます。久兵衛はもう泣き出しさうになつて、やつと、我家の傍まで歸つて来ました。すると、突然、一匹の河童が、黄色い服で、『佛さんの御飯たべちやいやよ。』『佛さんの御飯たべちやいやよ。』

と叫びました。それにつれて、何百何千といふ河童は一時に、



と、蛙が啼くように啼きだてました。久兵衛は、ハタと膝を打ちました。河童が佛さんの御飯が大嫌ひだと云ふ事を思ひ出したのです。早速家の中へ歸り込んで、佛さんの前に供へてあつた御飯を、シコタマ詰めこみました。そして、勇気百倍、極先きへ躍りだして見ると、雲霞のように押寄せた河童の群は『わッ』と悲鳴をあげて、押あひ、へしあひ、我勝ちに逃げ出してしまひました。あとには踏みつぶされた二三匹の河童が、手をすり合せて御慈悲を乞ふてゐるばかりでありました。

これ、河童のお話はおしまひです。皆さんも河や池へ行つて河童に會つた時は、一度ために角力とつてごらんない。夏、夕の薄つた後などには、殊に多くの河童が遊んでゐると云ふ事です。

一三四

休憩

寄席今年のバルコニー夜話、いつにない賑やかでした。私はとりわけ、寺内さんのアーペンチンが面白かつたと思ひます。寺内『いやどうも。私はまた齋藤さんの子狸の話が一番好きです。』水島『僕は、海野さんの怪談が凄みがあつていいと思ひます。暑い時には以てこいですね。』海野『まあ、そんな事ございませぬわ。水島先生の足もともにも及びませぬわ。』

西川『久米君のも面白いですな。』久米『いえ、どう致しまして。僕は西川さんの四ツ目小僧には思はず吹き出しましたよ。』

給仕『めい、お世辭を云つてますね。それぢやア何か一番なんだか、ちつとも分らない……では、お茶をお一ツ……』



綴 方 藤 藤 佐 次 郎 選

おすしやさん (賞)

大蔵市東區東雲町二ノ一七八

中 村 速 生

(十五才)

姉さんのお友達がきたので、私はすし善へおすしを言ひに行きました。すし善へはひると、店はひつそりしてゐて、『御免。』と言つても返事がありません。店をあげて留守の筈はないし、も一度大きな聲で『御免。』とよんで見ました。それでも返事がありません。『ど

うしたのかな？まあ一寸待つて見よう』と椅子に腰をかけてゐました。おいしさうなおすしのほひが、ブーンとしてきます。はへがうるさくブンブンとまつてゐました。

なんぼ待つても誰もきません。

そこで一寸奥の方をのぞいて見ました。すると座敷で誰かがねむつてゐるらしい様子です。晝寝らしい。そこで大きな聲で『御免。』と言つてみたが、よくねむつてゐるのか起きてきません。今度は思ひきりの聲で『おちさん、おすしこしらへてんか。』と言ふと、やつと目を覺したらしい。むく／＼起き上ると、ねむさうな目で見えて『おすしかいな。』と言ひました。

『ふん。角の中村や、急いで二人前持つてきてんか。』僕は可笑しさ

をこらへてかう言ひました。『うん。』おすしやさんは『アア。』とあくびをすると立ち上つてきました。どうも寝ぼけてさうなので、『二人前やで……』と一回大きな聲で言つて店をでました。

芳子の死 (賞)

東京府赤坂校尋五

柴 崎 登 喜 子

芳子は私の妹で今年二歳のあかんほうでしたが、長い間病氣で苦しんでゐましたが、とう／＼死んでしまひました。芳子の死んだのは五月十二日でした。十二日の日授業がすんで私が學校からかへると、しるるゐの人などが來てゐたので私は母にきいたら、『今朝芳子が生んだのだ。』といったので、

私はまだかばんもおろさずにいそいでつぎの間へいつて見たら、もう芳子の顔には白いはんかちがかけてあつて、まくらもとにはお線香をあげてありました。私はかなしみで胸がいつばいになつてしまつて、じつと芳子を見つめてゐました。母が『早くかばんをおろしてきなさい。』と言つたので、私はかばんをおろして母のをばへすはりました。母は『おせんかうをあげてから顔をみせてやる。』と言つたので、私はおせんかうをあげてから、芳子の顔をみせてもらひましたが、どうしてもしんだとは思はれませんでした。私は母といろ／＼の話をしてゐましたが、やがて私と母とは深い思ひにしづんでしまひました。母は目をとち下をむいてゐました。私も下をむいて

ゐました。

やがて目からは熱い涙がでて來ました。しばらくして私は母に『何時にしんでしまつたの。』とさいたら『九時半頃にしんだのだ。』といひました。そして『今日はおちやうど、うちのおばさんの命日だから、きつとおばあさんがむかへに來たのだらう。』といひました。おとむらひは夕方しました。がどうしても芳子がしんだのがゆめのやうでしかたがありませんでした。

おごなしの青年(賞)

神奈川縣高坐郡大野校高二

大谷 嘉一

私と新ちやんと三ちんと、桎ちやんと四人で風船をふつとばして

遊んでゐると、下の方から自轉車が二臺走つて來た。三ちやんはふつとばした風船を取りに行つたので、向ふから來た自轉車の若い青年は、左の方によけて、通らうとしたらしかつた。

三ちやんはそれを知らずに、風船をふくらしながら後の方にひつさつて來たので忽ちその自轉車にぶつつかつて、ころ／＼ところがつた。自轉車にのつてゐた人は、二三間先に行つたがとびおりて來て、三ちやんをだいて『此の子は何處の子だ。早く救へてくれ。』と口走るように言つた。私は三ちやんを見るひまもなく、夢中でかけ出した。すぐ後から三ちやんをだいて青年がくる。

三ちやん所に來ると『おばさんおばさんこの子が。』と青年は言つた

きり、後は言はずに井戸端に行き水を持つて來て洗ひ始めた。其處へおばさんが『あッ、なにしたのよ。その傷は。』と言ひながら、かけて來た。二人で洗つて居ると、そこへ前のおばさんが水くみに來て『まあどうしたの。待つてな、今藥を持つて來てやるから。』さう言つて、かけていつた。

青年は心配さうな顔をして『今ね機が向ふから來ると、この子が右の方に行つたんです。僕はてつきり左の方に來やあしまいと思つて左の方によけたんです。すると――なにね僕がべるをならさなかつたのが悪いです。』と、青年はふるえ聲でわびた。

『こんな血の出るはずはないが――』おばさんはさう言つて『口からも出るな。あいて見な。口に

はけがはないか。』と言つた。『おばさんきつと鼻血がは入つたんぢやあないかな。』と私が言ふと『そうらしいね。』と青年も言つた。

その中に前のおばさんが藥をもつて來た。

おばさんは『はら顔中傷だらけだ。』と言ひながら、前のおばさんに見せた。かうして書いて居るとさぶちやんの傷やおとなしにそうな青年の顔が頭にはつきりと浮んで來る。

皇太子殿下を

お迎へして

山口縣熊毛郡熊田校尋六

山本 春江

五月二十八日には、我が山口縣に皇太子殿下が、おいでになると

いふので、一人がはたを二本づゝもつて、歌を歌ひながら岩田の驛までお迎へに行つた。

その途中岩田の方に向つて禮をした。岩田に行きついて間もなく、はつり／＼雨が降り出した。私は心の中で『この様なお目出度い日はめつたにないのに、雨も一日ぐらいはこらへてくれ、ばよいのに。』と考へた。けれども雨は少しもやまぬ。驛へ行つてからは、ブラットホームへ渡つた。しばらくまつてゐると皇太子殿下が、乗つておいでになる御車が見えた。御車の前に日の丸のはたが十文字につけてあつた。私が最敬禮をしてしまつた時には汽かん車は、もう見えなかつた。その中に萬ざいが唱へられたので、私も唱へた。それから矢田さんに、『あんな

一三八
あようおがまれたで。」と言つて尋ねると、矢田さんは『あんたあ。』と云はれたので私は、『どのお方がよく分からなかつたが、みんなが氣をつけえのしせいをしてをられたのが、殿下といはれたので、あのお方ではあるまいかと思ふの。』と云つた。そして家へ歸へるとお母さんが『よくおがまれたか。』とお尋ねになつた。私は『ようおがまれたつた。』と云つてあととはだまつてゐた。

夏の夕方

山形縣西村山郡白岩町大字幸生

二 關 勤

(十四才)

暑い暑いお日様は西のお山のかげにかくれてしまつた。あたりはしんとして時々そよ／＼と風が吹

いて来て、少し寒い様にかんじて来た。今日も一日畠に出て今歸途に向つた。空はどんよりとうす墨色に曇つて、田の面には蛙が『があ／＼／＼』やかましく鳴いて居る。『あ、……ここに鳴いて居るな。』と思つて、静かに行つて見ると、蛙は白いのをブク／＼と鳴いて居る。

山のふもとの家の中には電燈が明るく窓からうつつて居る。時々窓のやぶれ目から電燈の光がピカピカと目にうつる。観音様の杉の木は黒い様にたんばの中にさびしく立つて居る。

ふ さ

神奈川縣蓮子新宿

茅原久美子

細い小さな橋を渡ると、向ふに緑の色をした山がそびへてゐる。なはてづだひにくる風は、山から吹いてくるのか若葉の香がだんだん身によつて来る。百しやうは一生けんめいで田をたがやしてゐる。あせ道づたひにやうやく山のふもとまできた。

足本のふきを取りながら自分の前の山を見た。遠くから見るとやさしく見える山が、近くからだとどうしてこんなにはしい山に見えるのかふしぎに思ひながら又ふきを取り始めた。

何の氣なしに向ふを見ると、小さな青大將が草の中をうねりながら竹やぶの中へかくれてしまつた。

初夏

東京高等師範附屬校等五

山 本 夏 彦

『朝顔の苗夕顔の苗。』もう苗賣が出て来た。

甘藷屋が氷屋にかはり、ブリキ屋が金魚屋にかはつた。

道を犬がはあ／＼いつて長い舌を出して通る。

猫が屋根で日向ぼつこをしてゐる。

學校では厚いラシヤの帽子が軽い麥わら帽子に變つた。

緑の葉陰でジイジイ蟬がやかましく鳴いてゐる。道路では電車のやかましく通る中を水色の水まき車がぬつて歩く。

『これ安い、二十錢買つて下しやい。』支那人がせんすを賣りに来た。

夜外へ出て見ると、いつも見る夜店が何となく涼しさうに見える。バナナや夏みかんが電氣の光をちか／＼反しやさせてゐる。

一箱三十錢とふだの出してある下に眞赤ないちごが見える。

屋根に上つて

北海道十勝國帯廣町東三條九

丁目柏校等五

藤 内 達 三

あぶなげな足どりで、僕は一步一步トタンをふんで屋根に上つた。やはらかな初夏の光を受けたトタンからは、大分あたゝみがあふ。そのあたゝみが足に傳はつて身體中にしみ込む。北を向くと音更の高臺が遠く見え、汽車が其の下を白煙をはきながら北へ北へと走つて行く。だん／＼目を横へそ

らせば二階造の中學校も見え、若葉に包まれた寺も所々に見える。前を見れば榮樂座が見え、二三本家のたくさんある中をえんとつがそびえてゐる。養老湯のえんとつも中にある。南を見れば帶廣驛を發したのだらう、汽車が小さくなつて走つてゐる。本名木工場のえんとつからは黒煙をはきながらゆるやかに空へ上つて行く。柏校もはつきりと見える。天氣が良いせいか日高山脈がはつきりと見える。後の方には測候所が見え、十勝木工場も見える。町がうすぐらいま／＼につつまれ、兩側の家には電氣の光が外にもれてゐる。

晝 休

府下澁橋町角八七六

稻垣秀邦

菓子工場の晝を知らず工場の笛が廣い原つばに響き渡つた。少したつと丁場の裏門からは男や女の職工が御飯を終へたのか、ぞろぞろ出てきて、日影の方に散らばつていつた。そして青い草の上にねてわすかな時間に雜誌等を読みよけつてゐる人や、女は大きい人も小さい人も、兎のやうに飛び廻つて面白そうに遊んでゐるのです。みんな暑い太陽が照らしてゐてもへいさで遊んでゐる。

兵隊さんがラッパを吹きながら二三人來ますと、僕等位の少年工がかけていつて、兵隊さんをかこんで、ニコニコしながら聞いてゐるのです。

『カランカラン』と休み時間が終つたのか小使の手で鐘が鳴らされた。本を讀んでゐる人も、遊

んでゐる人も、鐘の音にさそはれるやうに工場の中にすひこまれていつた。

まもなく機械のまはる音等がひびいて來た。高い煙突からは煙がゆら／＼と風の無い空に登つていつた。

大 風

宮城縣仙臺市新寺小路

後 藤 大 二

ゆふべは寝てから目をさましてみると、まづくらでおもての方ではどう／＼と音がしてゐた。母さんが『大風で電燈が消えてしまひましたよ』とおつしやつた。そのうち何かおつこちるやうな音がした。しばらく静かになつたかと思ふと、又強い風が吹きつけて、家

もゆれるほどおそろしかつた。早く夜が明ければよいと思つて、目をつぶつて眠らうとしても、どうしても眠れなかつた。いろ／＼のことを考へてゐると、どこかでにとりの聲がしたので、もう夜が ажけるのだと思つてうれしかつた。そのうちに風もだん／＼静かになつてきた。僕はいつのまにか又ねむつてしまつた。母さんに起されて、おもてへ出てみると、庭のざくろの木がたふれてゐた。コスモスの花だのあさがはのかきなどもみんなたふれてしまつてゐた。おとなりの板もこはれてゐるし、物置のトタン屋根をふきとばされてしまつた。畑の方へ行つてみると、作物はみんなたふれてゐる。かゝしはきものをはがれて、中から糞が出てゐた。大風の吹い

たあととは、本當に戦争のあとのやうだ。

早 起 き

兵庫縣城崎郡中筋校第二

上 坂 充 夫

起きて時計を見るとまだ五時。『早いな。』と僕はつぶやいた。

『今朝こそだれよりも早く起きて見よう。』と思つて、そつとふとんをたゝんだ。あたりはしんしんとしてゐる。たび／＼風が吹いて來て雨戸をゆする音がかすかに聞える。戸を開けて外へ出て見ると、あたりの家や木は霧につつまれてはんやりとしてゐる。

寒さをこらへながら井戸ばたへ行つて顔をあらつた。風はさあつと僕の體をかすめて北の方へとん

でいつたので思はず『おゝ寒い。』とこゑを發した。あたりが明るくなるにつれて霧はだん／＼淡くなつて、空は眞赤くそまつて間もなく太陽の顔があらはれた。山をつつんでゐた雲は、驚いたやうに左右に切れた。あちこちから雨戸を開ける音がひゞき、道はにぎやかになつた。

梅の實を食べて

東京府赤坂校第六

榎 本 精 一

昨日の午後、坂本君から漬けた梅の實を買つた。豫習をして歸りに食べようと思つたが食べなかつた。家に歸つて服をぬく時に食べたしまつた。

それから勉強して三十分もた、

ないうちに砂糖をなめた。さあ大變梅と砂糖は毒だと云ふが死ぬかしら、漬けた梅だから大丈夫だとも思ふが明日まで生きて居るかしらと思ふと何だか腹がいたいやうな氣持がする。

お父さんに腹いたの薬に毒消がよいかと聞くとお父さんは玄米パンを食つたからだらうと云つて何處らがいたいかなどと聞いて毒消を出して呉れた。それを三粒水も何も飲まないで飲んでしまつた。

お父さんに藥を買ひに行く時、梅の實を食つたらうなどと云はれやしないかと、胸がどきどきしたがかまはず云つてしまつた。案外にも梅の事は云はれなかつた。やつと安心した。だか死ぬかと思つた。



信 通

『フランダースの少年』

に就て

とばかり名作紹介を休んでおきましたので「世界名作物語」の標題のもとにこれから順次紹介をつづける事にいたしました。今度の「フランダースの少年」は先日日本にも活動写真になつて来たりしましたから、御承知の方も随分ありませう。アメリカの人気少年俳優ターガンが主人公ネルロに扮したりして、非常な評判でした。しかし、原作と比較しますと、活動写真の味は少いものになつてゐます。活動写真にする爲めに、原作の妙味を殺してしまつて筋なども餘程變へて了つてゐます。原作は筋なども感動を興へる力強いものであるばかりでなく、藝術上の價值からいつても

すつと深いものです。この點は本誌に紹介するに従つて、次第におわかりになるでせう。

この物語を作つた人は英國の文壇作家ウィグと云ふ人で廿二三歳の頃作つたもので文學上の價値は、世界名作として鳴り響いてゐるのを見てもわかります。原作は「フランダースの犬」となつてゐますが、活動写真でおなじみになつてゐたりするので、「犬」の代りに「少年」を用ひました。

この紹介は勿論原作の全部を忠実に翻譯したものではありません。紹介といふことに重きを置いて、原作のくだらない點は省いたりしてあります。「少年少女の爲めに」といふ點に十分注意して多少手心がしてあります。

第一回は此の物語の「發端」であるために興味が本當に出てゐませんが、回を重ねるに従つていよいよ面白くなり、最後には息もつかせぬ感動を皆さんに與へる事と信じます。（記者）

綴方の選後に

齋藤佐次郎

▽今月は夫として力を入つた作が見當りませんでした。例月の通りに入賞作三篇を挙げましたが、いつも程に行かなかつたのが

残念です。

▽先づ最初に中村進生さんの「おすしやさん」に就て感想を述べますと、この作が今月中で目のにつけていゝ處がありました。書かうとしてゐるところを、よくとらへてゐます。殊に海司屋の主人がよく書けてゐました。もういゝ夏の表の氣分も、上手にあらはされてゐました。

▽紫崎登喜さんの「芳子の死」かういふ題材は大膽の人が書きます。これまでに幾度か、かういふ作が載りました。大きい感動を受ける場合だけに、誰が書いてもかなり上手に書きます。たい、この作で特に注目されたのは、母親と二人切りで向ひ合ふ場面です。あそこは、實によく書けてゐました。

「やがて、私と母とは深い思ひにしづんでしまひました。母は目をとらて下を向ひてゐました。私も下をむいてゐました。やがて熱い涙がでて来ました。」

大きな不幸に出遇つた時の母と子の氣持が、これだけのの中に申し分なく出てゐました。

▽大谷嘉一さんの「おとなしい青年」表現が生き／＼してゐます。自轉車にぶつかつて負傷をした「三ちゃん」は餘りけつきりしてゐませんが「おとなしい青年」は本當によく書けてゐました。おど／＼してゐる善良な青年の姿は讀者にすぐ想像さ

れます。

▽山本春江さんの「皇太子殿下をお迎へして」特に優れた書き方がしてあるといふ譯ではありませんが、書かうとしてゐる事を無難に書いてゐます。

▽二關勲さんの「夏の夕方」夏の夕方を寫したものとては別段上手といふ程でもありませんが、田でないでゐる處を寫したところだけは非常によく行つてゐました。

▽茅原久美子さんの「ふさ」この人は素直な、ところを持つた人のやうです。あの作の外に小説を書いた日記體のものもありましたが、共にど／＼伸びて行きさうな素直さが見えました。茅原さん、返すのやうな静かな海邊で、一生懸命に書いてゐる／＼の物を書いてゐる中に初夏の氣分が出てゐます。

童話の選後に

齋藤佐次郎

童話が一向に振はないのは残念です。前度も同じです。で、推薦候補作としてつて置きの窪田重次氏の「引越した蜘蛛」が今月號に推薦しました。

編輯室より

（記者）

▽「バルコニー」夜話で澤山の頁をとつてしまひました。その爲めに止むなく、讀者文藝の方が少くなりました。自由畫は一回休みました。次號には、皆さんが休暇だけなら／＼面白く作が出来ること、思ひますから、それを樂しみに待つて一回お休みにした譯です。それから綴方も、頁が足りなくて、今月は思つたやうに載りませんでした。

▽バルコニー夜話は今度「怪談會」といつた風に、上品な怪談ばかりが出ました。一人怪談が出た爲めに、後もしんなそれになつてしまつたのですが、しかし、外の雑誌でやる怪談などとは違つて、あくまでも金の星式を發揮してゐるところに注意してゐたい。

▽一般の作家から面白い童話を募集しましたが、これは本月限り一時打ち切ります。思つた程のいゝ作が集りません。寧ろ金の星の愛讀者中から募集してゐる童話の方が遙かに優れてゐる事を知りました。

▽次號から諸物語が掲載されます。時事日曜附録に諸物語を毎週掲載して好評を得て居られる保積新天讀伯が「五郎正宗」を同篇獨特の自由な表現をもつて、描かれたことになりました。いよいよ發表のあか

つきは、必ず大評判となりませう。

▽「フランダースの少年」いよいよ今月號から掲載されました。第一回は「發端」であつて、お話のはじまりを書いたものだけに本當の面白さは、これからでせうが、しかし、スバらしい作である事はこの第一回だけで、ほぼ想像されます。やがてネルロが十六才の少年となりますが、その時に至つて、眞に面白さが出るのです。しばらくお待ち下さい。

▽三島彌川先生の「川中島の合戦」は非常な反響を興へたやうです。合戦をだ／＼と通り本に傳へられてゐるだけに書くのは、何でもない仕事ですが、此の三島先生のやうに、深く研究して書いたものは他に見當りません。それだけに、實に立派なものです。三島先生は引續いて、先生の深い研究による合戦の物語を次號にも書かれます。

▽「小馬」の八月號が配布になりました。読友の方で、まだお手に入らない方は至急にお知らせ下さい。

▽暑い夏です。皆さんは學校がお休みで、さぞ毎日愉快な日を送つておいでのこと、思ひます。皆さんの此の頃の生活ぶりな、綴方なり、童話なり、自由畫なりしてど／＼投稿して下さい。

▽編輯室で働いてゐるわれ／＼は大汗を出してゐます。庭には大きな日廻りが咲きました。讀者便り欄で皆さんのお便りを持ちます

新らしく出た本

世界名篇 第六編 三國志物語
(最上雲天編、高松元三監修)

三國志は支那の有名な歴史小説で、千六百年の昔、蜀、魏、呉の三國が、入り組んで戦い、血湧き肉躍る、壮快な物語です。これを最も面白く、わかり易く書いた本書は、定めて大好評を受けること、思はれます。そして挿絵は名高い北齋の繪を寫したものです。(四六判一九二頁、挿繪數葉、定價九拾錢、東京市外上野込二八金蘭社發行)

ホメロスのイリアド (中島振雄著、イデア社發行)

イリアドは、ヨーロッパ人の作つた文學のうちで、一番古い、そして一番立派なものだと云はれてゐます。有名なトロイ戦争の有様を描いたもので、勇士アキレスの花々しい働きと、女に對する美しい情とは、讀む人の魂を魅了して餘りあるものです。(四六判箱入三百餘頁、挿繪五十葉、定價貳圓、東京市山手山伏イデア社發行)

○民謡集おさんだいしよさま

野口雨情氏の民謡から、會心の作八十餘篇を採集した可愛らしい民謡集である。初

綴方掲載外佳作

櫻本 精一(東京) 山本 俊雄(不明)
東 敏二(京都) 川島 秀雄(東京)
村上 久子(山口) 春日 國子(東京)
沖津 清美(東京) 中里 義行(神奈川)
河本 守正(神奈川) 鈴木 文七(神奈川)
佐々木 博(東京) 上坂 静子(東京)
石井 元之(神奈川) 奥水 充夫(兵庫)
長谷 貞三(秋田) 島野 半平(神奈川)
岩谷 岩手 坂本 直則(不明)
鈴谷 一郎(東京) 杉浦 邦一(和歌山)
宮田 八郎(茨城) 杉浦 孝太郎(千葉)
北原 辰二(兵庫) 瀧上 正男(長野)
加藤 民雄(長野) 五十嵐 巖夫(不明)
山中 龍吉(東京) 中田 元紀(茨城)
関 數夫(長野) 矢作 ひで(不明)
坂本 清子(山口) 久山 マキ(山口)
尾藤 昌子(愛知) 佐藤 武雄(不明)
田中 重男(福岡) 須藤 俊一(福岡)

童話掲載外佳作

佐野 操(山口) 増井 ゆみ(神奈川)
河野 青南(朝鮮) 阿部 和子(宮城)
大空 夏子(愛知) 伴 むつな(宮城)
木本 一郎(大分) 川井 牧朗(秋田)
後藤 大二(宮城) 池澤 富美子(東京)
南 健男(石川) 長南 登羽(岩手)
池澤 龍三郎(東京) 大森 恒三郎(東京)

童話掲載外佳作 (大人篇)

五味くんに三(山梨) 大島知恵子(兵庫)
東 敏二(京都) 中村 速生(大阪)
中川しげよ(宮城) 宗家 兼二(東京)

金の星社

出版目録を

お送りいたします。

出版目録の御入用の方は、ハガキで
はんにゃ、まはし、くた、さつ、お、
本社宛お 申込み下さい。早速お送り
申上ます。

伊藤 源司(千葉) 吉村 誠(山口)
東 敏二(京都) 山本 俊雄(不明)
星野 六郎(茨城) 長崎 春男(長野)
坂本 一(宮城) 中村 清一(大阪)
奥水 清(岩手) 鷗村 公雄(福岡)
長尾 登(東京) 大和田 廣(茨城)
藤上 正男(長野) 藤山 茂路(京都)
河野 楚(朝鮮) 豊島 泰(山梨)

新誌友名簿

名和 暢兒(福岡) 新納 時秋(北海道)
齋藤 良介(東京) 庄司 泰玉(山形)
山田貞四郎(千葉) 安倍 桂子(臺灣)
中村 正彦(東京) 加藤 正夫(長野)
小池 登雄(新潟) 齋藤 剛(高崎)
中里 素行(神奈川) 島 夕波(栃木)
佐藤 五郎(宮城) 伊藤 豊春(大阪)
早川 三郎(東京) 多森 一雄(東京)
齋藤 正雄(東京) 加川 正一(北海道)

山越氏の装幀は例により清らかな感を得る。左にその一節を抜く。

砂の数ほど
かぞへて見たが
かぞへきれない

わが涙

ハムレット (大木雄三編、松政徳次監修)

ハムレットは世界第一の芝居の作者、レエクスピアの傑作です。シェイクスピアの戯曲は皆んな使ったものばかりですが、殊のこのハムレットは、少年少女向きのものとして推奨されて居ります。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる悲しき運命には、何人も涙なきを得ません。(四六判箱入一七〇頁、挿繪多數、定價九拾錢、本館動坂町金の星社發行)

○爲朝一代記 (三島龍川著、寺内龍海監修)

爲朝が伊豆の大島に流されてゐた時、一本の矢で平家の兵船を射沈めた話は、どなたも御存知です。爲朝は勇ましい英雄でした。そして日本一の弓の名人で、この英雄の傳記を讀んで胸を躍らさぬ者があつたやうか、少年少女必讀の書としてお薦めします。(四六判箱入美本、挿繪多數、一八〇頁、定價九拾錢、本館動坂町金の星社發行)



讀者だより

▲記者様、お變りありませんか。田舎にも夏が訪れて、漫間に登る人の姿が目につくやうになりました。私達の學校でも昨日は漫間登山を致しました。記者様方も山登りにいらつしやつて下さいませ。お待ち致して居ります。試験のために投書なまけて済みませんでした。又これからうんと一生懸命に投書いたします。ではちよつとお知らせまで。さようなら。小諸町 小口すま子

讀者の等しく喜んで居る次第で小学生の「讀後感」が八月號で當選したことを見て、非常によろこんでいます。あの拙文を讀み、一人でも多くの良書が讀まれたならば幸甚とします。又、沖野先生から、はがき等を送られて私はどう御禮してい、かわかりません。今後私は、藤ながら金の星の発展を祈るのです。先づは御禮まで草々。秋田 木下孝

▲野口先生のご病氣、全快、およろこび申します。金森君、推薦お目出たう。こんど漫田郡の名でだしましたからよろしく。和歌山 榎上泰之助

▲野口南情先生の御病氣御全快を祝します。「金の星」誌上の諸兄姉さま、毎日々々暑苦しい日が続きます。暑さに負けず童話作家諸兄の御奮闘を祈ります。尚私今回童話誌「驚鳥」を發刊しました。誌上の諸兄姉方、何卒御援助下さいまして御入會御投稿願ひますでは「金の星」の方々の御世話を祈りつゝ、長崎市横津野五三 西岡さかゑ

▲暑中お伺ひ申上ます。つい難病に追はれて失禮致しました。いつも私の作品を誌上におのせ下さいまして有がとう存じます。今後ともよろしくお願ひ致します。東京 船倉ひろし

▲拜啓、一年間の永い間未熟な私からお尋下さいましたことな、心からお禮申し上げます。私も今学期から寄宿舎へ入りました。うんと勉強して、此の秋はすばらしい作品を御覽に入れたいと思つてあります。ではどうぞ見せて下さる。横須賀中學校寄宿舎 茶木七郎

▲暑中御見舞申し上げます。『金の星』の發展は、腕を重ねる毎にすばらしいものです。私共愛

▲誌友の皆さま、妹ツヤも仲間に投入してやつて下さい。四人一度に投書して下さい。和歌山 藤藤邦一

▲讀者先生、童話は何時投書してもかまはないのですが。若くは特別の應答の時にだけか投書出来ないので。誌上でお答へ下さい。和歌山 藤藤邦一

▲讀者先生、童話は何時投書してもかまはないのですが。若くは特別の應答の時にだけか投書出来ないので。誌上でお答へ下さい。和歌山 藤藤邦一

▲讀者先生、童話は何時投書してもかまはないのですが。若くは特別の應答の時にだけか投書出来ないので。誌上でお答へ下さい。和歌山 藤藤邦一

▲讀者先生、童話は何時投書してもかまはないのですが。若くは特別の應答の時にだけか投書出来ないので。誌上でお答へ下さい。和歌山 藤藤邦一

▲讀者先生、童話は何時投書してもかまはないのですが。若くは特別の應答の時にだけか投書出来ないので。誌上でお答へ下さい。和歌山 藤藤邦一



金の星社 九月號

出版だより

近刊書のお知らせ

八月中に發行豫定の本は左の三冊です。

○笛吹川(童話讀本ノ三)

○ワシントン(偉人傳ノ七)

○新ロビンソン(名著大系)

▽『笛吹川』に就て

沖野岩三郎先生の童話讀本の第三篇は『びんぼう大黒』といふ題で發行される筈でしたが、風が面白くないといふので、今度『笛吹川』となつて、いよいよ近刊になりました。此の童話讀本の叢書は尙後に三冊を加へまして、全部で六冊で完結される筈です。

▽『新ロビンソン 漂流記』に就て

この本は原名を『スキズのロビンソンクルーソー』といつて、非常に有名なものですが、日本ではどうした譯かまだ餘り多く知られてゐません。實に面白く本だけにどうして知られなかつたかと思ふに思ふ位です。航海の途中大暴風雨におそはれ、船は難破してしまふところから此の物語りがはじまつてゐます。此の船にはスキズから乗込ん

だ一家族がありました。夫婦に男の子が四人です。ところが、いよいよ船が難破しようとした時、船員・乗客達は此のスキズの一家族だけを残してボートで逃げたのでした。

何故スキズの一家族が残されたか、それは此の人達がほんやりして船室にあつた爲めに残れてしまつたのです。しかし、取残された事が却つて幸福でした。ボートは途中で大波に吞まれてしまつたからです。そこで、スキズの一家族だけが嵐の過ぎた後で上陸したのでした。ところが、上陸した島が無人居たのでした。止むなく此の一家族は、その無人島で暮さなければならぬ事になりました。

▽ワシントンに就て

偉人傳大系もこれで第七篇になりました。今では非常な評判になつて、名著大系同様飛ぶやうな賣行を呈してゐます。この『ワシントン』は誰しも知つてゐるアメリカ建國の大偉人ジョージ・ワシントンの傳記です。偉人の傳記を讀むことによつて、深い感動を得て、その人の通り行が出来ないまでも、その偉人の氣持が流れ込んで來て、いゝ結果を生むものです。ですから、心ある少年少女諸君には、是非此の偉人傳大系を讀んでいただいて、各々偉人のすぐれた處を見るやうにして貰ひたいと思ひます。ワシントンやリンコンは、古い人でないだけに、皆さんにも親しみが深いことと思ひます。

△『狼少年をよんで』

金の星童話讀本の第十二冊として本居先生の前作『狼はごろく』が發行になります。『狼はごろく』が『ひやうたんばくり』の調子で巧みにと入れられてゐる名曲だけに、到る處で與はれてゐます。第十二冊は名曲であるひで

すから、見立つていゝ作集が出来上ります。尙、装幀は、日本畫界の新人として大評判の松政徳次郎畫伯が木版五度刷の極美のものを描かれました。

◎十五少年漂流記

かつて金の星誌上に掲載した長篇です。しかも、當時やんやといふ喝采を受けたものですから、その面白さに就ては御記憶の方が多し事です。九月はじめに一冊になつて出版されます。金の星叢書の第一篇として、定價も破格の空圓廿餘で、二百五十頁の大冊を發行する豫定になつてゐます。

◎ボムペイ

最後の日

リットン卿の有名な物語りです。日本にも活動寫眞になつたりして、紹介されましたが、近く本社から名著大系の一冊として發行の豫定で、印刷中です。

◎あゝ無情

◎ナイチンゲール
(偉人傳大系第六編)
著者序文の一節

『金の星』誌上で大喝采を得た久米邦武さんの苦心になつた『あゝ無情』いよいよ近刊。雑誌だけでは讀めなかつた後篇を添へました。いよいよ面白ものとなりました。

このフロレンス・ナイチンゲールは、その涙ぐましい深切な貧しいひとびとにふり撒きながら、九十年の永い一生を了へました。世間の慈善家は境上に立ち、または街頭に立つて、『貧しきひとびとよ！』と呼びかけました。しかし、ナイチンゲールはさうではなかつた。自分は英國きつての大地主の愛娘に生れ、華やかな日と夜をもつてゐましたが、いつも貧しい家々へ、あるひは暗い病院へとそのやさしい姿をあらはして、病に苦しむひとの肩に手をかけて、『かはいさうなひとびとよ！』と同情にあふれた言葉をかけたのでした。貧しいひとへの深い思ひやり

狼少年をよんで(賞)

東京市と野黄小路町二五
本多 鐵 磨

▲今まで知らなかつた動物の實生活の面白さに、目のあたり接す

懸賞創作募集

【意 注】 童 童 【意 注】 綴 童 自

（少年少女の創作）

由 畫……………山 本 鼎 先生選

方 謠……………野 口 雨 情 先生選

方 謠……………齋 藤 佐 次 郎 先生選

課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したることや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに書なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とおとさないやうにして下さい。用紙は自由書はなるべく書用紙に、童話や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は八月廿八日（その以後は次號（廻る）發表は十一月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

（一般讀者の創作）

話……………野 口 雨 情 先生選

話……………齋 藤 佐 次 郎 先生選

童話は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は『推薦』または『特選』として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓つゝ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓つゝ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

一五〇

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の際は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番

【送 金】
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい。
▽送金は振替が一番便利で御座います。
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです。
【注 意】
▽第何巻第何號よりと書いてください。
▽住所姓名ははつきり書いてください。

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十五年八月九日印刷納本（毎月一回）
大正十五年九月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人 齋 藤 保

印刷所 小 端 安 之 助

東京市本郷區動坂町三五九番地

發行所 金の星社

振替口座東京五九五六番
電話小石川五三八七番

金の星社發行著名目錄

偉人傳系
第一編

ジヤンヌ・ダルク

大木雄三先生著。有名なオレリアンの少女ジヤンヌ・ダルクが奮ひ立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたたり、涙ながるゝ悲劇的物語である。

金 十 九 錢
料 金 六 錢

偉人傳系
第二編

ローマ・シーザー 英雄

霜田史光先生著。シーザーは古代の大英雄である。世界歴史を進めてシーザー様の英雄は幾人と数へる程しかない。そのシーザーの變化多岐な運命を書いたのが本書である。

金 十 九 錢
料 金 六 錢

偉人傳系
第三編

ネルソン

三井信衛先生著。トラファルガーの海戦に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人もし一讀すべき名著です。

金 十 九 錢
料 金 六 錢

偉人傳系
第四編

リン・コルン

久米敏一先生著。最も優れた立派傳として、この『リン・コルン』をおすすめて。紙一枚、ペン先一ツ貫へぬ貧しいリン・コルンが、如何にして大統領の榮位を勝ち得たか。本書を讀まねば一生の不孝である。

金 十 九 錢
料 金 六 錢

偉人傳系
第五編

太閤・秀吉

三島精川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤・秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。

金 十 九 錢
料 金 六 錢

録目著名行發社星の金

郎三岩野沖 著生先	郎三岩野沖 著生先	郎三岩野沖 著生先	郎三岩野沖 著生先	郎三岩野沖 著生先
父戀し	森の祈り	労働の少年	赤い猫	金のつるべ
紀州の海岸に起つたあはれな物語である。父は海へ漁に出たまま、行方不明になつて了ふ。後に残された姉弟は母と共に父の行方を尋ね、遂に満洲の空でめぐり會ふ長篇哀話である。	これ程清く深い物語が他にあらうか。主人公は愛らしい少年と少女とである。家は破産し住みなれた家は人手に渡り、母は小学教員となる。少年と少女は都へ出て奮闘する。	鐵山に働く二人の少年の物語である。父親は暴動の爲めに殺されて了ふ。孤兒となつた二少年は如何にして暮したか。その運命を書いた興味深い雄大な長篇である。沖野先生の大力作である。	沖野先生の傑作として何人も推賞してゐる名篇十篇。これこそ讀本として少年少女必讀の書である。日本最初の童話讀本にして、又日本の童話讀本として最高のものであるとの評を得てゐる。	『赤い猫』と共に全国的に有名になつてゐる名著である。單純な教訓でなく面白おかしく讀んで行く内に、自ら深い教訓を與へられるのが沖野先生獨特の妙味である。
圓一金 錢六金料送	圓一金 錢六金料送	圓十二圓一金 錢六金料送	圓一金 錢六金料送	圓一金 錢六金料送

録目著名行發社星の金

雄武井武 著生先	郎二政島小 譯生先	衛信井三 譯生先	子房宅三 譯生先	情雨口野 著生先
ブウ太郎鍛冶屋	狼少年	家なき娘	家なき子	青い眼の人形
日本に武井武雄のある事は日本童話界の一大珍寶であるといはれてゐる程有名である。その武井先生が自作中最も自信のある童話に澤山の美しい挿畫を入れて理想的繪入童話集にしたのが本書である。	印度の大自然の中で狼に育てられた不思議な少年の物語である。熱帯の森林の中で猛獸と共に暮しつゝ、様々な冒険を行ふ勇壯無比の大雄辯にして、文豪キツプリングの世界的名作である。	『家なき子』と同様文豪マロリーの作になり世界有数の家庭小説である。旅の間に両親を失つた少女パリンが驢馬を道づれに、まだ見ぬ親父を尋ね行き願ひ辛苦する大傑作である。	佛國の大文豪マロリーの世界的名著である。名家に生れ乍ら不思議な運命に遇つてあそばされ旅役者に賣られて旅から旅をさすらふ哀れな孤兒の物語である。フランスの家庭では必ず本書を備へてゐる。	野口雨情先生の最も圓熟せる時代の傑作を集めた本書は日本童話界の珍寶といふべく研究家の座右になくてならぬ名著であります。挿畫と挿畫は畫家現代の大家、細田一夫の藝術の殿堂の觀あり。
圓一金 錢六金料送	圓十五圓一金 錢六金料送	圓十九圓一金 錢六金料送	圓十八圓一金 錢六金料送	圓十八圓一金 錢六金料送

齒をみがくなら、

ライオンねりはみがきを

おつかひなさい。

香がよく、

味がよく、

効果がすぐれ、

使ひ心地が、此上もなく

よろしう御座います。

